

多賀城市文化財調査報告書第12集

高崎遺跡

—都市計画街路高崎大代線外1線
建設工事関連発掘調査報告書Ⅱ—

昭和62年3月

多賀城市教育委員会
多賀城市都市計画課

高崎遺跡

—都市計画街路高崎大代線外 1 線
建設工事関連発掘調査報告書Ⅱ—

序

多賀城市は、仙台市に隣接しているため近年いちじるしく人口が増加しております。当市は市政施行以来、「史跡の町、多賀城」をスローガンに史跡の整備に努めてまいりました。開発と史跡の保護は互いに相反するものであります。それを見事に調和することができたのは市民の皆様の文化財に対する御理解のたまものであると考えております。

今回発掘調査が実施された高崎遺跡は、都市計画街路建設にともなうもので、昨年に引き続き2ヶ年の継続事業として実施されたものであります。発見された遺構、遺物には奈良・平安時代頃の建物跡、竪穴住居跡、合口甕棺などがあり、多賀城跡を取り巻く集落を研究する上で貴重な資料となるものと思われます。

本報告が多少なりとも市民の文化財に対する啓蒙の一助となれば幸いです。

昭和62年3月

多賀城市教育委員会

教育長 玉蟲 譲

例　　言

1. 本書は、多賀城市教育委員会が都市計画街路（高崎大代線外1線）建設工事に伴い、2ヶ年にわたり実施した「高崎遺跡発掘調査」の結果をまとめたものである。
2. 本調査は、高崎遺跡の第6次発掘調査にあたり、「T S—6」の略称を用いて記録している。なお、多賀城市教育委員会によって、今までに実施された各調査については、調査年度の順に第1次から第5次発掘調査とした。
3. 本書の執筆・編集は、文化財保護係職員の協力を得て、石川俊英、相沢清利、石本 敬が担当した。
4. 本書の作成については、佐藤悦子、菊池 豊、柏倉霜代、須藤美智子、熊谷純子、黒田啓子の協力を得た。
5. 調査区の実測基準線は、国家座標の方位をとっている。
6. 土層の色調については、「新版標準土色帖」（小山正忠・竹原秀雄：1976）を使用した。
7. 出土遺物の写真撮影にあたっては、東北歴史資料館の御協力を賜った。
8. 調査、整理に関する諸記録及び出土遺物は、多賀城市教育委員会が一括保存している。

調　　査　要　項

1. 遺跡所在地：宮城県多賀城市高崎二丁目47—2～94—3
2. 調査期間：昭和61年6月11日～11月7日
3. 調査面積：1,200m²（対象面積6,400m²）
4. 調査主体者：多賀城市教育委員会 教育長 玉蟲 謙
5. 調査担当者：多賀城市教育委員会 社会教育課文化財保護係
 - 社会教育課長 柳原邦男
 - 文化財保護係長 高倉敏明
 - 技　　師　　滝口 卓、石川俊英、千葉孝弥、石本 敬、相沢清利
 - 主　　事　　柏原靖史
6. 調査協力者：多賀城市都市計画課
7. 調査参加者：菊池 豊、赤間かつ子、阿部敏子、阿部トシ子、阿部美智子、阿部美津子、阿部米子、井川温子、遠藤一代、小野玉乃、加藤文一、熊谷きみ江、熊谷好子、黒崎庸治、後藤恵子、後藤はつみ、小林 健、桜井栄子、佐々木四郎、佐藤節子、佐藤たま子、佐藤三夫、下道博信、菅原絹代、鈴木 効、高野敏子、千葉享一、角田静子、星忠次郎、本田ノブ子、渡辺園恵、渡辺ゆき子

本文目次

序 文

例 言

調査要項

I.	高崎遺跡の立地と環境	1
II.	調査に至る経緯	1
III.	調査方法と経過	4
IV.	調査成果	7
1.	B 地区	7
	〈地形と基本層位〉	7
	〈発見遺構と遺物〉	7
	(1) 掘立柱建物跡	8
	(2) 井戸跡	8
	(3) 溝跡	11
	(4) 土塙	15
	(5) SX01(合口甕棺)	16
	〈堆積層出土の遺物〉	17
2.	C 地区	21
	〈地形と基本層位〉	21
	〈発見遺構と遺物〉	21
	(1) 掘立柱建物跡	21
	(2) 柱列跡	21
	(3) 竪穴住居跡	24
	(4) 溝跡	29
	(5) 土塙	35
	(6) 特殊遺構	36
	〈堆積層及び整地層出土遺物〉	37
3.	D 地区	40
	〈地形と基本層位〉	40
	〈発見遺構と遺物〉	41
	(1) 掘立柱建物跡	41
	(2) 溝跡	45
	(3) 土塙	49
	〈堆積層出土の遺物〉	49
V.	考察とまとめ	55

挿図・図版目次

第1図 遺跡分布図	2	第39図 D2区溝跡セクション図	46
第2図 調査区位置図	3	第40図 溝跡出土遺物	47
第3図 調査区設定図	5	第41図 D3区溝跡セクション図	48
第4図 SB01実測図	8	第42図 D2区堆積層Ⅰ・Ⅱ層出土遺物	50
第5図 B地区遺構配置図・セクション図	9	第43図 D2区堆積層Ⅲ層出土遺物(1)	51
第6図 SE01実測図	11	第44図 D2区堆積層Ⅲ層出土遺物(2)	52
第7図 SE02実測図	12	第45図 D2区堆積層Ⅲ層出土遺物(鉄製品)	53
第8図 SD02(A・B)、SD03セクション図	13	第46図 D3区堆積層出土遺物	53
第9図 SD05・SK05セクション図	14	第47図 出土遺物(古錢)	54
第10図 井戸跡、溝跡出土遺物	15	第48図 出土遺物(円盤状土製品)	54
第11図 SX01(合口甕棺)実測図	16	第49図 表地区(第3次)埋甕	56
第12図 SX01(合口甕棺)出土遺物	17		
第13図 堆積土出土遺物	18		
第14図 C1区遺構配置図・セクション図	19	第1表 高崎遺跡調査年次・成果表	1
第15図 C2区遺構配置図・セクション図(1)	22	第2表 宮城県内の甕棺出土例一覧表	56
第16図 C2区南北セクション図(西側)	23		
第17図 SB01実測図	23	図版1 B地区SD02(A)溝跡(西より)	65
第18図 SA01実測図	24	図版2 B地区SD02(A)・(B)溝跡重複状況 (東より)	65
第19図 SI01出土遺物	24	図版3 B地区SE01井戸跡(北より)	65
第20図 SI01実測図	25	図版4 B地区SE02井戸跡(東より)	66
第21図 C2区遺構配置図(2)	25	図版5 B地区合口甕棺(東より)	66
第22図 SI02・03セクション図	26	図版6 B地区合口甕棺(東より)	66
第23図 SI04実測図	27	図版7 C1地区SI01竪穴住居跡カマド (西より)	67
第24図 SI05実測図	28	図版8 C2地区SI02・03竪穴住居跡(西より)	67
第25図 SI05出土遺物(1)	30	図版9 C2地区SI04竪穴住居跡(北より)	67
第26図 SI05出土遺物(2)	31	図版10 C2地区SI05竪穴住居跡(北より)	68
第27図 SD02・03・06出土遺物	32	図版11 同上カマド(北より)	68
第28図 出土遺物(石製品)	33	図版12 同上細部(北より)	68
第29図 遺構内出土遺物	36	図版13 D2地区遺構全景(北より)	69
第30図 SX02実測図	37	図版14 D2地区、建物跡(南より)	69
第31図 堆積層・整地層出土遺物(1)	38	図版15 D3地区、溝跡(東より)	69
第32図 堆積層・整地層出土遺物(2)	39	図版16 出土遺物(1)	70
第33図 D2区遺構配置図	42	図版17 出土遺物(2)	71
第34図 D3区遺構配置図	43	図版18 出土遺物(3)	72
第35図 D2・D3区堆積層セクション図	44	図版19 出土遺物 SI05竪穴住居跡(4)	73
第36図 SB01実測図	44	図版20 出土遺物(5)	74
第37図 SB02実測図	44		
第38図 SB03実測図	45		

I 高崎遺跡の立地と環境

高崎遺跡は、多賀城市高崎・留ヶ谷地区に所在し、特別史跡多賀城廃寺跡を取り巻くようにして、標高8～27mの低丘陵上に広く占地している。この低丘陵は、松島丘陵から派生したもので、塩釜市方面から西へ延びながら次第に標高を減じ、多賀城市北部で沖積低地に接している。

本遺跡は、奈良・平安時代から中世にかけての複合遺跡であり、特に遺跡範囲の西半部において、奈良・平安時代の遺物の散布が顕著である。また、これまでに実施された発掘調査では、平安時代の掘立柱建物跡や井戸跡等が検出されたほか、弥勒地区と表地区（註1）の2箇所で甕棺の出土例がある。なお、調査成果の詳細は下表のとおりである。

調査年次	調査地区	おもな遺構		おもな出土遺物	備考
		検出遺構	年代		
昭和41年	丸山地区	井戸跡、建物跡	奈良・平安時代	土師器、須恵器、木製品	(註2)
第1次調査(昭和55年)	弥勒地区	掘立柱建物跡、土塙、合口甕棺	平安時代	土師器、須恵器、瓦	中央公園計画関連調査(註3)
第2次調査(昭和56年)	弥勒地区			土師器、須恵器、赤焼き土器、瓦	中央公園計画関連調査(註4)
第3次調査(昭和57年)	表地区	溝跡、土塙、埋甕(甕棺)	平安時代	土師器、須恵器	市営住宅建設工事 関連調査(註5)
第4次調査(昭和60年)	坂下地区	柱列跡、溝跡、土塙	平安時代	土師器、須恵器、瓦、風字硯	宅地造成工事関連調査
第5次調査(昭和61年)	井戸尻地区	掘立柱建物跡、豎穴住居跡、柱列跡、溝跡、井戸跡、土塙	平安時代	土師器、須恵器、赤焼き土器、瓦、円面硯、石製品	都市計画街路建設工事 関連調査(註6)

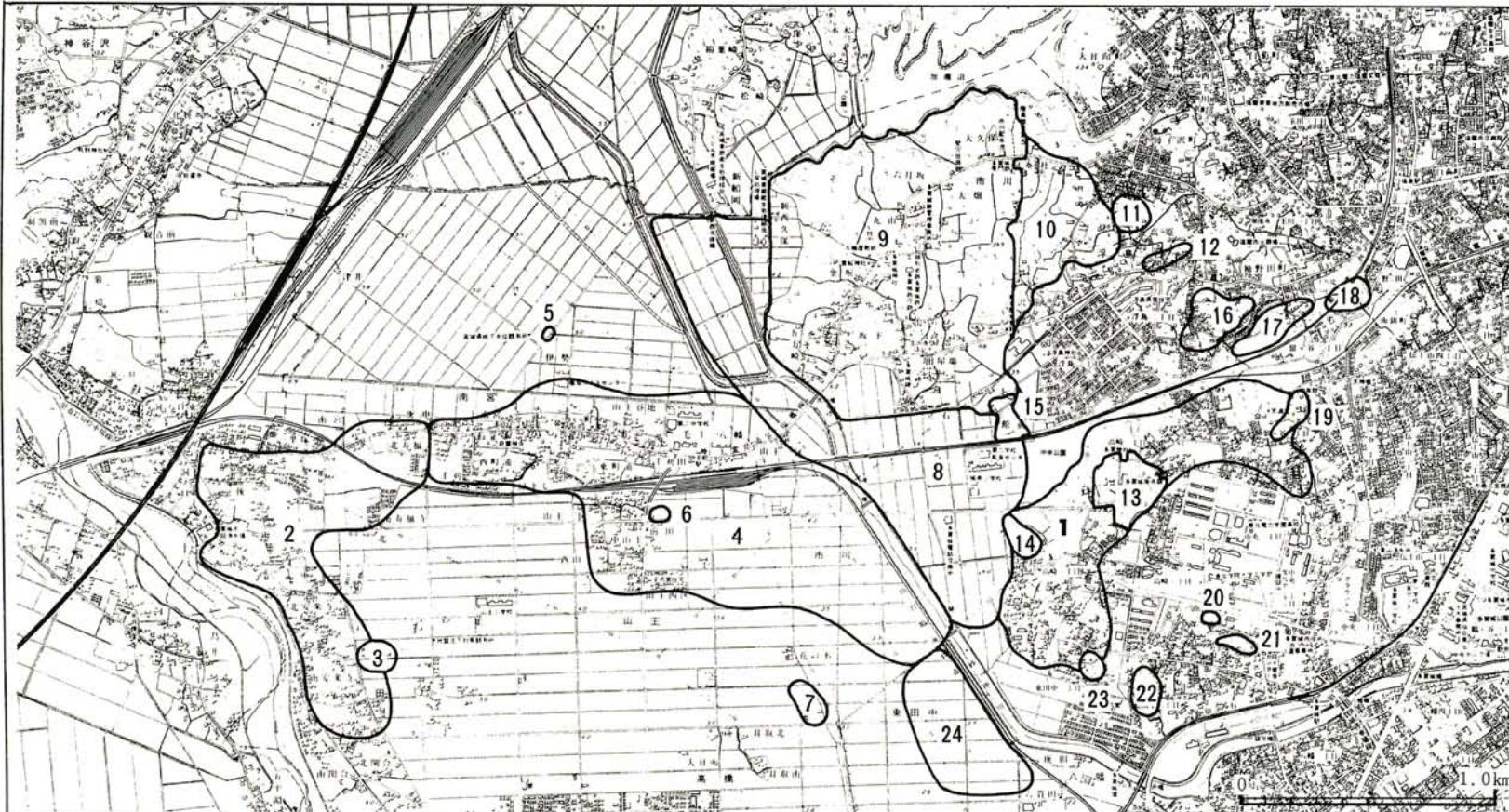
第1表 高崎遺跡調査年次・成果表

II 調査に至る経緯

本調査は、都市計画街路高崎大代線が高崎遺跡が所在する多賀城廃寺跡南西部の丘陵北側裾部を通過することから、多賀城市都市計画課と教育委員会が事前に協議を行ない、発掘調査を実施するに至ったものである。

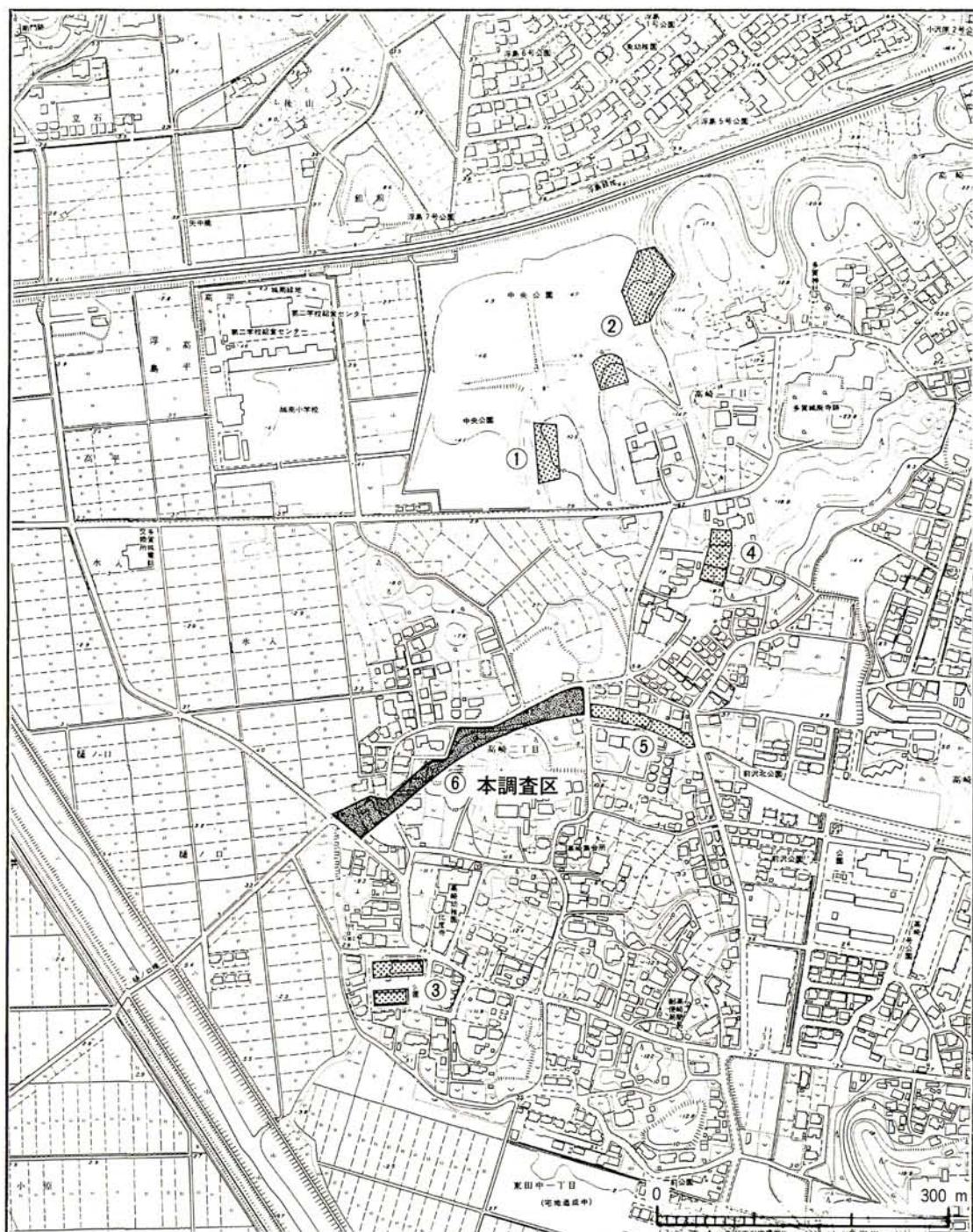
発掘調査は、遺跡内延長400mを対象とし、2ヶ年計画で行なうこととした。昭和60年9月から11月にかけて行なった初年度の調査では、A地区とした調査区東側の傾斜面と平坦面で平安時代の掘立柱建物跡1棟、柱列跡1条、豎穴住居跡2軒、溝跡14条、土塙6基、多数の小柱穴を検出した。また、調査区中央部寄りのB地区とC地区においても、遺構確認調査を行ない、それぞれ遺構が存在することを確認した。

調査2年目にあたる今年度は、B・C地区の本格的調査とともに、新たに調査区西端にD地区を設定して発掘調査を実施したものである。



遺跡番号	遺跡名	種別	時代	遺跡番号	遺跡名	種別	時代	遺跡番号	遺跡名	種別	時代
1	高崎遺跡	集落跡・館跡	奈良・平安・中世	9	特別史跡多賀城跡	国府跡	奈良・平安・中世	17	野田館跡	散布地・館跡	奈良・平安・中世
2	新田遺跡	集落跡	古墳～中世	10	西沢遺跡	散布地	奈良・平安	18	矢作ヶ館跡	散步地・館跡	奈良・平安・中世
3	安楽寺遺跡	寺院跡	古代・中世	11	法性院遺跡	散布地	奈良・平安	19	留ヶ谷館跡	散布地・館跡	奈良・平安・中世
4	山王遺跡	集落跡	古墳～近世	12	高原遺跡	散布地	奈良・平安	20	稻荷殿古墳	高塚古墳(円)	古墳(後)
5	内館館跡	館跡	中世	13	特別史跡多賀城廢寺跡	寺院跡	奈良・平安	21	桜井館跡	館跡	中世
6	山地田館跡	館跡	中世	14	丸山囲古墳群	高塚古墳(円)	古墳	22	志引遺跡	包含地・館跡	旧石器・奈良～中世
7	大日北遺跡	散布地	奈良・平安	15	館前遺跡	官衙・館跡	平安・中世	23	東田中窪前遺跡	散布地・館跡	奈良・平安・中世
8	市川橋遺跡	集落跡・水田跡	奈良・平安	16	小沢原遺跡	散布地	奈良・平安	24	六貫田遺跡	散布地	奈良・平安

第1図 遺跡分布図（遺跡地名表）



調査年次	調査地区	調査年次	調査地区
① 第1次調査(昭和55年)	弥勒地区	④ 第4次調査(昭和60年)	坂下地区
② 第2次調査(昭和56年)	弥勒地区	⑤ 第5次調査(昭和60年)	井戸尻地区
③ 第3次調査(昭和57年)	表地区	⑥ 第6次調査(昭和61年)	井戸尻地区

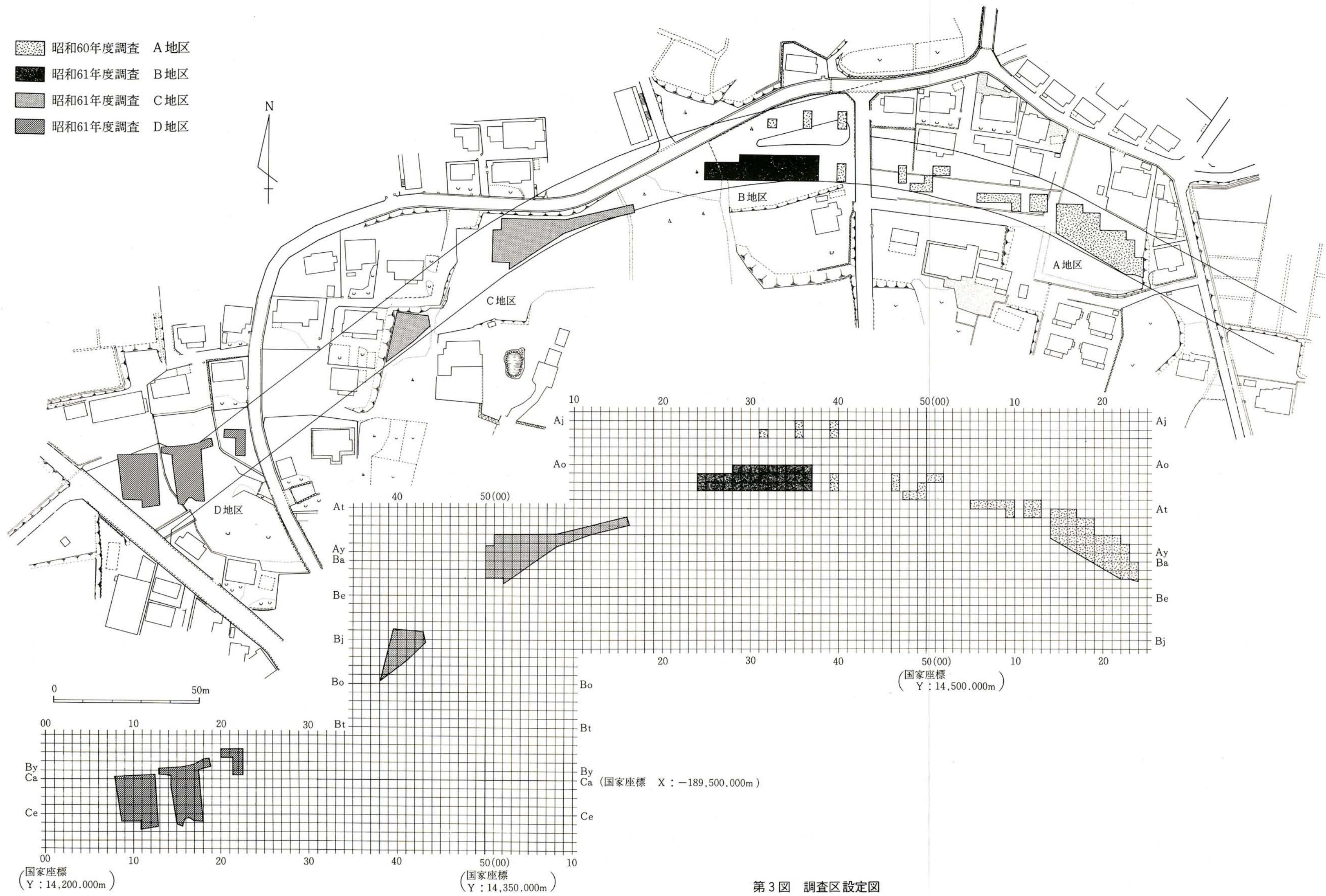
第2図 調査区位置図

III 調査方法と経過

今年度の調査は、昨年度試掘調査を行なったB・C地区の中で遺構が検出された箇所に調査の主眼を置くとともに、旧地形の状況を把握することも考慮して調査区を設定した。また、調査区西端部に位置するD地区は試掘調査を実施していないため、現地形に即して3か所に試掘坑を設定した。なおグリット配置については、昨年度の測量成果を使用した。

発掘調査は、昭和61年6月11日より開始した。B地区は遺構が多く分布する南側を中心に重機を導入して表土剥離を行なった。C地区は試掘調査によって竪穴住居跡、土塙等を検出した箇所をC₁区とし、これより西側の緩やかな丘陵北斜面をC₂区とした。なお、C₁・C₂区とも表土が薄いため、表土剥離は手掘り作業で行なった(6月15日)。一方、D地区については、3か所に設定した試掘坑を東側よりD₁区、D₂区、D₃区とした。重機による表土剥離の結果、C₁区からは、全く遺構、遺物が検出されなかった。これに対してD₂区は、遺物を多量に包含する堆積層を検出した。さらにD₃区では、灰白色火山灰を含む溝跡を検出した。以上の結果より、D₂・D₃区の遺構、遺物の広がりと規模を明確にするため両調査区を拡張した。B地区は、6月16日より遺構検出作業に入る。この結果、調査区東側の丘陵部で掘立柱建物跡、溝跡、井戸跡、土塙を検出した。一方、調査区北西部で検出した溝跡は、同一方向に2時期の重複が認められる溝跡と判明した。また、これに切られる溝跡には、灰白色火山灰を含むことも確認された。7月7日より遣り方を設定して平面図、セクション図の作成、写真撮影に入る。これらの作業と並行して再度丘陵部の精査を行なった結果、合口甕棺1基を検出し、平面図作成等を行ないB地区の全ての調査を完了した(10月3日)。D地区は、7月18日より調査区の拡張を行なう。このうちD₂区では、多量の遺物を含む包含層の掘り込みに入る。この包含層については9月11日に調査を終了し、ただちに地山面の遺構検出作業に入り、掘立柱建物跡、溝跡及び畦畔状遺構を検出した。遣り方設定後、平面図、セクション図作成に入り、全景写真撮影をもって調査を完了した(10月11日)。D₃区では盛土、旧水田土除去後、遺構検出作業に入り、溝跡多数及び土塙1基を検出する。重複関係を確認後、掘り込みに入る。また、地山面からわずかに隆起する畦畔状の高まりを検出し、古代の水田跡の存在が考えられた。遣り方設定後平面図、セクション図作成に入り、全景写真撮影を行ない調査を完了した。なお、水田跡の存在を考え調査最終日に土壤サンプリングを行なった(11月7日)。C地区は2つの調査区で同時に調査を進めた。C₁区試掘調査で確認された竪穴住居跡を中心に拡張を行なった結果、新たに土壘状遺構、溝跡、土塙等を検出した。なお昨年度の調査では、竪穴住居跡は重複のあるものと考えていたが、SI 01竪穴住居跡したものについては、埋土及びカマドや周溝の方向から再検討してプランの修正を行なうに至った。さらにSI 02竪穴住居跡は、掘り込み調査を

昭和60年度調査 A地区
 昭和61年度調査 B地区
 昭和61年度調査 C地区
 昭和61年度調査 D地区



第3図 調査区設定図

行なったところ自然堆積層のラインであることが判明した。遣り方設定後、ただちに平面図、セクション図作成を行なう。遣り方設定が不可能な場所については平板測量を行ない、10月30日に調査を完了した。C₂区は西側が大きく削平を受けた低丘陵部の北斜面に位置する。掘り込みの結果、堆積層、整地層及び遺構が複雑に重複していることが認められた。遣り方設定後、これらの遺構の掘り込み、図面作成等を順次行なった。なお、遺構については竪穴住居跡→掘立柱建物跡→溝跡という大まかな変遷がたどれた(10月23日)。11月7日、SI 05 竪穴住居跡のカマド調査をもって、全ての調査を完了した。

IV 調査成果

1. B地区

今回の本調査では、昨年度の試掘調査の成果をふまえて、遺構が顕著に認められた南半部を中心に調査区の設定を行なった。

〈地形と基本層位〉

本調査区の地形については、昨年度の報告とさほど変わることはない。A地区から続く岩盤面は34ライン付近から西側へ落ち込み、沖積層(IV層)の下に埋没している。しかし、この落ちは北側への落ちほど急ではなく、かなり緩やかなものとなっており、隣接するC₁区との間に浅い谷を形成している。

I層 旧水田面を覆う盛土で厚さは0.8~1.5mを計る。

II層 旧水田面の耕作土と床土に分けられる。厚さは20~30cmを計る。

III層 調査区のはば中央、丘陵裾部にみられ東西約10m、南北1~3mの範囲に堆積している。褐灰色粘土質シルト層で、厚さは20~40cmを計る。なお、昨年度の調査では、SD 01溝跡のプランとして報告している。

IV層 調査区の南半の丘陵裾部に分布する灰白色砂質シルトの水成堆積層である。岩盤面は南側には緩やかに傾斜し、28ラインから西では急に落ち込み、谷状になっている。約10cm幅で分層される各層には、マンガン、酸化鉄が集積沈殿しており、非常にかたい土層となっている。27ラインより以西では灰白色火山灰層が間に介在してくる。

V層 調査区東側、丘陵部から同裾部に移行する斜面に堆積している。東西約4m、南北約8m以上の範囲に分布し、厚さは約20cmを計る。4層に分層されるが、大別するとa層の褐灰色シルト層と、b~d層の黄色系のシルト層に分けられる。

〈発見遺構と遺物〉

本地区で検出した遺構は、掘立柱建物跡1棟、井戸跡2基、溝跡13条、土塙6基、合口甕棺

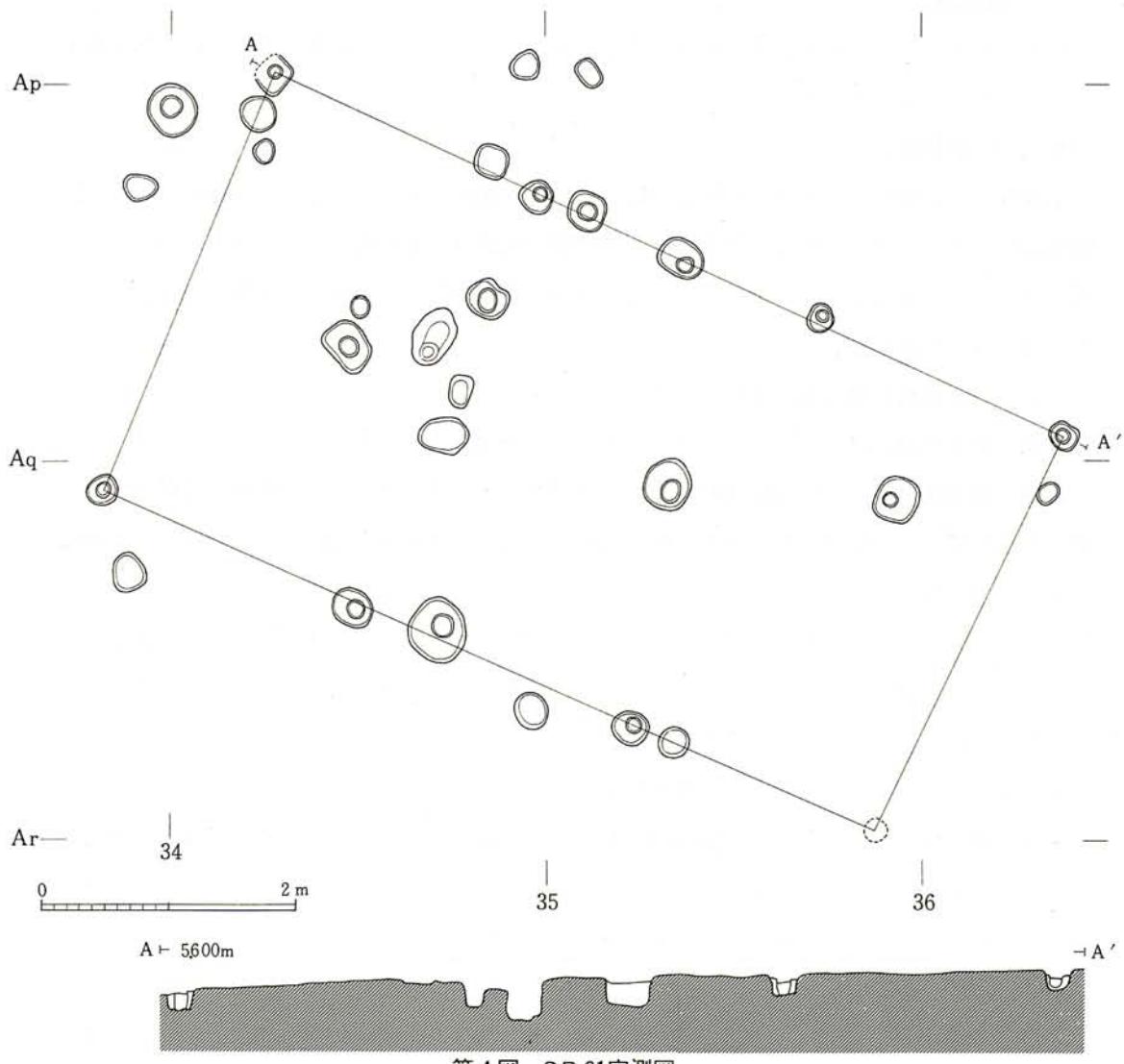
1基、多数の小柱穴である。

(1) 掘立柱建物跡

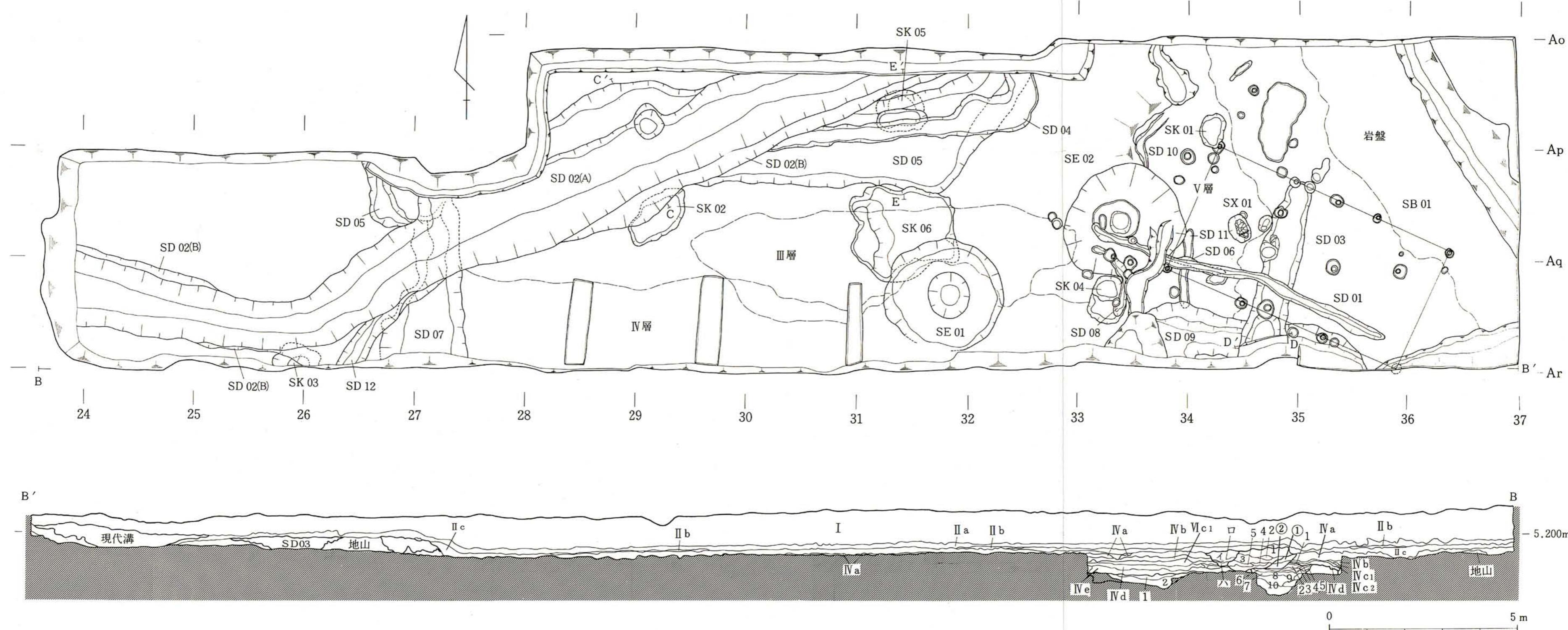
SB 01掘立柱建物跡 丘陵部のV層上面で検出した南北1間、東西3間の東西棟掘立柱建物跡である。重複関係からSD 01溝跡、SK 01土塙より古く、SD 03・09溝跡より新しい。本建物跡の方向は、西妻でみると北で約22度東に偏している。柱間についてみると、桁行は北側柱列で西より2.31m・2.42m・2.11mで総長6.84m、梁行は西妻で3.55mを計る。柱穴は、橢円形を呈するものと隅丸方形のものとがあり、規模は一辺25~35cm、深さ15~20cmである。柱は、柱痕跡より径10~15cmと推定される。遺物は土師器、須恵器の細片が出土している。

(2) 井戸跡

SE 01井戸跡 丘陵裾部の東側Ⅲ層上面で検出した。重複関係からSK 06土塙より新しい。平



第4図 SB 01実測図

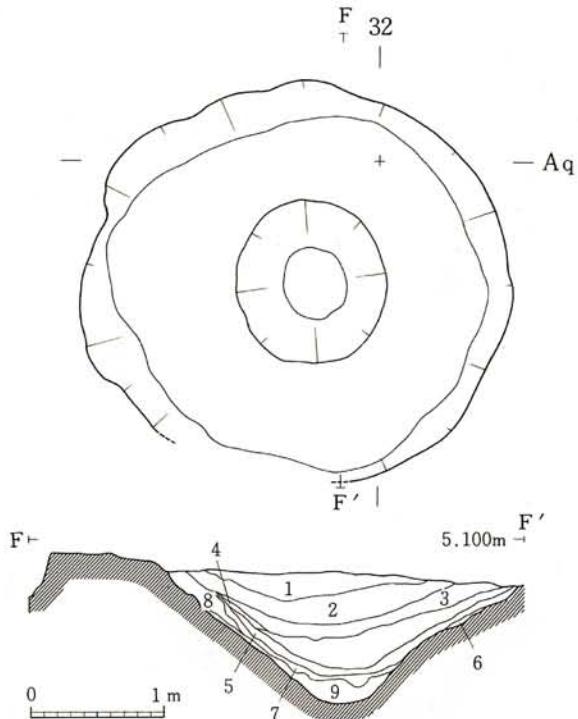


	層位	土色	備考		層位	土色	備考		層位	土色	備考			
堆積層	I	2.5YR 1/4	灰白色	盛土 旧水田土（耕作土） 旧水田土（床土） 小さめの地山ブロックを含む 砂とシルトの互層、酸化鉄斑を含む 均質な堆積、酸化鉄斑を含む 酸化鉄の集積 灰白色火山灰層 マンガン粒、酸化鉄斑を多量に含む	SD 12 SD02(B) SD 07 遺構 A	イ	7.5Y R 1/4	明褐灰色	黄橙色土粒、炭化物を含む	SK 07 SD 07	1	10Y R 1/4	灰白色	砂質 マンガン粒、酸化鉄斑を含む
	II a	10Y R 1/4	褐灰色			ロ	10Y R 1/4	黑色	2	7.5Y R 1/4	灰白色	マングン粒、酸化鉄斑・地山ブロックを含む		
	II b	10Y R 1/4	褐灰色			ハ	10Y R 1/4	褐灰色	3	2.5Y R 1/4	灰白色	マングン粒、酸化鉄斑を含む		
	II c	10Y R 1/4	灰白色			1	7.5Y R 1/2	灰褐色	4	2.5Y R 1/4	灰白色	ク ク ク		
	IV a	2.5G Y 1/4	灰白色			2	10Y R 1/4	灰白色	5	2.5Y R 1/4	灰白色	マングン粒、酸化鉄斑を含む		
	IV b	5G Y 1/4	灰白色			3	10Y R 1/4	褐灰色	6	2.5Y R 1/4	灰白色	ク ク		
	IV c1	7.5G Y 1/4	明緑灰色			4	10Y R 1/4	灰白色	7	5Y 1/4	灰白色	粘土質 マングン粒、酸化鉄斑を含む		
	IV c2	10Y R 1/4	灰白色			5	7.5Y R 1/4	褐灰色	8	2.5Y R 1/3	淡黄色	地山ブロックを含む		
	IV d	10Y R 1/4	灰白色			6	7.5Y R 1/4	明褐色	9	2.5Y R 1/4	灰白色	地山ブロックを多く含む		
	IV e	10Y R 1/4	灰白色			①	7.5Y R 1/4	明褐色	10	2.5Y R 1/4	黄灰色	地山ブロックを含む		
						②	7.5Y R 1/4	褐灰色						
									SD 07	1	10Y R 1/4	灰白色		
										2	10Y R 1/4	灰白色	砂質 マングン粒、酸化鉄斑を含む	

第5図 B地区遺構配置図・セクション図

面形は、ほぼ円形を呈する。断面形は擂鉢状で、深さ1.15mを計る。埋土は、下層ほど粘性が強く灰色味を帯びている。最上層は地山ブロックを多量に含むもので人為的な埋め戻しと思われる。遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・甕、平・丸瓦、鉄滓が出土している。

SE 02井戸跡 丘陵部から同裾部へ移行する斜面のV層上面で検出した。重複関係からSD 01・06・08溝跡より古い。埋土は3層まで掘り込んだところ、掘り方埋土と井戸内埋土が区別された。井戸内埋土のプランは、隅丸方形を呈し、その四辺に井戸枠が存在するのではないかと予想されたが検出はできなかった。さらにこの中央には、隅丸方形の土塹が付設されており、この中に土師器杯（第10図1）1個体が底面より若干浮いた状態で検出された。一方、掘り方上部平面形は、不整円形を呈するが、下部（底面）では方形状の形態に掘り込まれている。掘り方断面形は逆台形で、深さは1.3mを計る。埋土についてみると、掘り方埋土は下層ほどグライ化した



土層観察表

構造	層位	土色	備考
SE 01	1	5Y R ½ 灰オリーブ色	地山ブロックを含む
	2	2.5YR ½ 暗灰黄色	地山粒を若干含む
	3	10Y R ½ 灰黄褐色	砂質 酸化鉄斑を含む
	4	10Y R ½ 褐灰色	粘土質
	5	10Y R ½ 褐灰色	砂質
	6	5Y ½ 灰色	粘土質
	7	5Y ½ オリーブ黒色	粘土質 植物遺体を含む
	8	5Y ½ 灰色	粘土質 植物遺体を含む
	9	7.5Y ½ 灰色	砂質

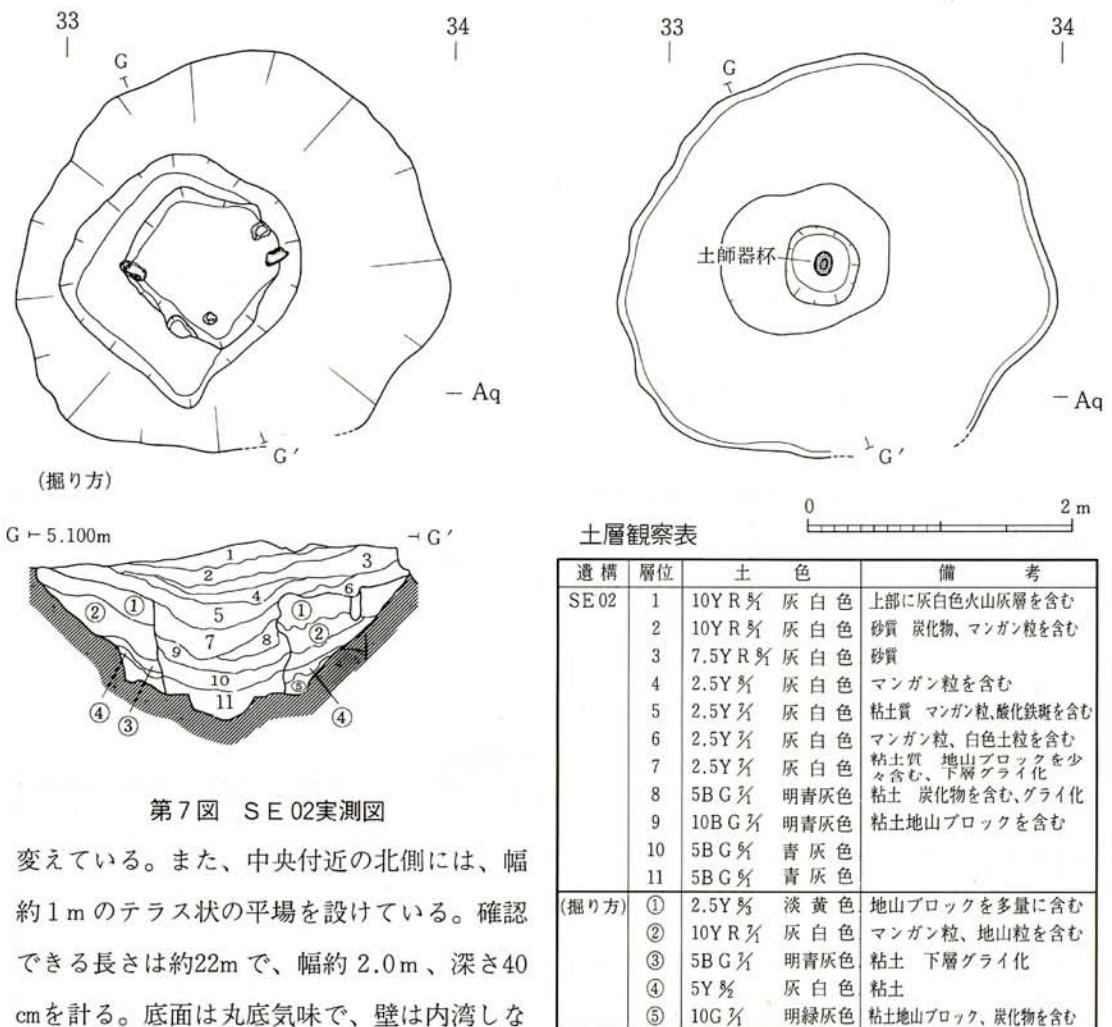
第6図 SE 01実測図

粘土で均質に積まれている。最上層には灰白色火山灰が層状に堆積している。井戸内埋土は、レンズ状に堆積する自然埋没である。なお、平面形で確認したように断面でも井戸枠の存在したことを示す立ち上がりのラインが明瞭であった。遺物は灰白色火山灰層中から赤焼き土器杯が2個体分、その他、土師器杯・高台付杯・甕、須恵器杯・壺・甕、平瓦、磁石、鉄滓が出土している。

(3) 溝跡

SD 01溝跡 丘陵部のV層上面で検出した東西方向の溝跡である。重複関係からSE 02井戸跡、SD 03・06溝跡より新しい。長さは6.3mで、幅約40cm、深さ約10cmを計る。埋土は褐灰色シルト单層である。遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・甕、平瓦、磁器が出土している。

SD 02(A)溝跡 丘陵裾部のIV層上面で検出した。重複関係からSD 02(B)・04・05・12溝跡より新しい。方向は、西側ではやや北寄りに弯曲し、東端付近では丘陵部の裾を通り北へと向きを



第7図 SE 02実測図

変えている。また、中央付近の北側には、幅約1mのテラス状の平場を設けている。確認できる長さは約22mで、幅約2.0m、深さ40cmを計る。底面は丸底気味で、壁は内湾しながら立ち上がる。埋土は、下層ほど粘性が強い均質な土であるのに対して、上層は砂と粘土質シルトが互層になる堆積をしている。遺物は、土師器杯・高台付杯・甕、須恵器杯・壺・甕、瓦、青磁碗、陶器が出土している。

SD 02(B)溝跡 丘陵裾部のIV層上面で検出した。重複関係からSD 02(A)溝跡より古く、SD 04・05・12溝跡、SK 07土塙より新しい。SD 02(A)溝跡とほぼ同じ位置で重複しているが、(A)の西側弯曲部で南へと分岐する。規模については、ほとんどが(A)に壊されているので不明である。埋土はセクション観察によると、粘土質シルトと砂が互層になるものである。遺物は、土師器杯・高台付杯・甕、須恵器甕、丸瓦、陶器が出土している。

SD 03溝跡 丘陵部の地山上で検出した。重複関係からSD 01溝跡、SB 01掘立柱建物跡より古く、SD 09溝跡より新しい。方向は、発掘基準線に対して北で約14度東に偏している。確認できる長さは約4.3mで、幅約1m、深さ30cmを計る。底面は平坦でやや内湾しながら立ち上がる。埋土は、6層に分けられるが、全体に地山粒が混じりかたくしまっている。遺物は土

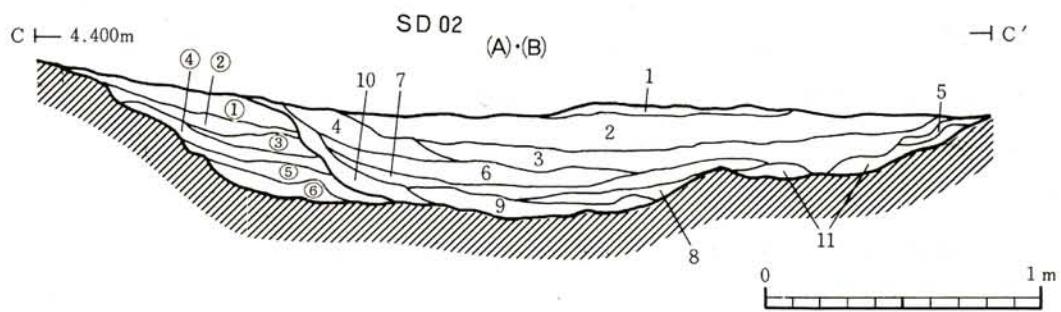
師器甕、須恵器杯・甕、瓦が若干出土している。

SD 04溝跡 丘陵裾部の地山上で検出した。重複関係から SD 02(A)・(B)溝跡より古く、SD 05溝跡より新しい。方向は発掘基準線に対して北で約85度東に偏しており、丘陵部裾付近で北へと屈曲する。確認できる長さは約7.5mで、幅0.5m、屈曲部で1m、深さ5cmを計る。埋土は褐灰色シルトの単層である。遺物は土師器甕、須恵器杯・甕、丸瓦が出土している。

SD 05溝跡 丘陵裾部の地山上で検出した東西方向の溝跡である。重複関係から SD 02(A)・(B)・04・05溝跡、SK 02・06土塙より古く、SK 05土塙より新しい。形態は東と西の両端で北へと屈曲している。確認できる長さは約20mで、幅約2.0m、深さ約30cmを計る。底面はやや凹凸があり、壁は北側で急に立ち上がるが南側では緩やかである。北壁際には土塙状の落ち込みが検出されている。埋土は、下層が砂質シルトで、上層には灰白色火山灰の自然堆積層がみられた。遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・壺・甕、平瓦が出土している。

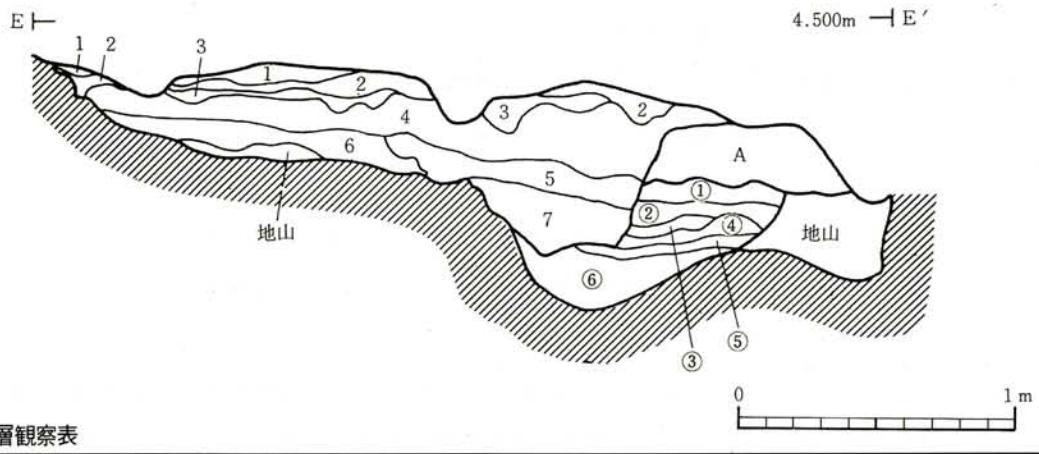
SD 06溝跡 丘陵部から同裾部に移行する斜面のV層上面で検出した。重複関係から SD 01溝跡より古く、SE 02井戸跡より新しい。方向は発掘基準線に対して東で約16度南に偏している。長さは3.8mで、幅20cm、深さ15cmを計る。遺物は出土していない。

SD 07溝跡 丘陵裾部の地山上で検出した南北方向の溝跡である。形態は北側で幅が狭く深い



遺構	層位	土色	備考
SD 02(A)	7	10YR 4/2 褐灰色	粘土
	8	10YR 4/2 褐灰色	〃
	9	10YR 4/2 灰白色	粘土、地山ブロックを少量含む
	10	10YR 4/2 灰白色	砂と粘土の互層
	11	10YR 4/2 浅黄褐色	地山崩壊土
SD 02(B)	①	5 Y 4/2 明褐灰色	シルトと砂の互層
	②	5 Y 4/2 明褐灰色	砂質 砂を多量に含む
	③	10YR 4/2 褐灰色	粘土
	④	10YR 4/2 褐灰色	〃
	⑤	10YR 4/2 褐灰色	〃
	⑥	10YR 4/2 灰白色	砂質 粗い砂と地山粒を含む
SD 03	1	10YR 4/2 灰黃褐色	粘土質 地山粒を含む
	2	10YR 4/2 にぶい黄褐色	〃 〃
	3	10YR 4/2 暗褐色	地山粒を多量に含む
	4	10YR 4/2 褐色	〃
	5	10YR 4/2 にぶい黄褐色	粘土質
	6	10YR 4/2 明黄褐色	

第8図 SD 02(A)・(B)、SD 03セクション図



土層観察表

造構	層位	土 色	備 考	造構	層位	土 色	備 考
SD 05	1	5Y 1/2 N	灰白色				
	2	5Y 1/2 N	白色	堆積層	A	5GY 1/2 N	明オリーブ灰色
	3	5Y 1/2 N	白色		①	5Y 1/2 N	灰色
	4	7.5GY 1/2 N	明緑灰色	火山灰とシルトの互層	②	5Y 1/2 N	灰白色
	5	5GY 1/2 N	明オリーブ灰色	火山灰層	③	5Y 1/2 N	灰色
	6	7.5GY 1/2 N	明緑灰色	マンガン粒、炭化物、酸化鉄斑を含む	④	5Y 1/2 N	灰白色
	7	5Y 1/2 N	灰白色	地山粒、酸化鉄斑を含む	⑤	5Y 1/2 N	灰白色
			〃		⑥	7.5Y 1/2 N	灰白色
			地山ブロックを含む				砂質

第9図 SD 05・SK 05セクション図

のに対して、南側では広く浅くなっている。確認できる長さは約4.2mで、幅1.2~2.4m、深さ約30cmを計る。埋土はマンガン、酸化鉄を含む灰白色シルトである。遺物は、土師器甕、須恵器杯・甕、円盤状土製品、丸瓦が出土している。

SD 08溝跡 丘陵部から同裾部に移行する斜面のV層上面で検出した。重複関係からSE 02井戸跡、SK 04土塙より新しい。形態は緩いL字状を呈する。長さは約2.0m、幅20cm、深さ10cmを計る。遺物は、土師器杯、須恵器杯・甕、赤焼き土器杯が出土している。

SD 09溝跡 丘陵部のV層上面で検出した。重複関係からSB 01掘立柱建物跡、SD 03溝跡より古い。方向は、確認した範囲では東西方向であるが、どのような形態をとるのか不明である。確認できる長さは7.0mで、幅1.2m、深さ20cmを計る。埋土は4層に分けられるが、いずれもマンガン粒を含むシルト層である。遺物は土師器甕、須恵器杯・壺・甕が出土している。

SD 10溝跡 丘陵部から沖積部へ移行する斜面の地山上で検出した。形態はL字状に屈曲する小溝である。長さは1.7mで、幅20cm、深さ10cmを計る。断面形は舟底形を呈する。埋土は、灰白色シルトの単層である。遺物は、須恵器杯・甕の破片がわずかに出土している。

SD 11溝跡 丘陵部から同裾部へ移行する斜面の地山上で検出した南北溝である。形状は北側で途中より北西方向に分岐している。長さは2.2mで、幅20cm、深さ5cmを計る。埋土は明褐灰色シルトの単層である。遺物は出土していない。

SD 12溝跡 丘陵裾部のIV層上面、SD 02(A)溝跡の弯曲するあたりで検出した。重複関係からSD 02(A)溝跡より古く、SD 02(B)溝跡より新しい。方向は発掘基準線に対して北で約34度東に

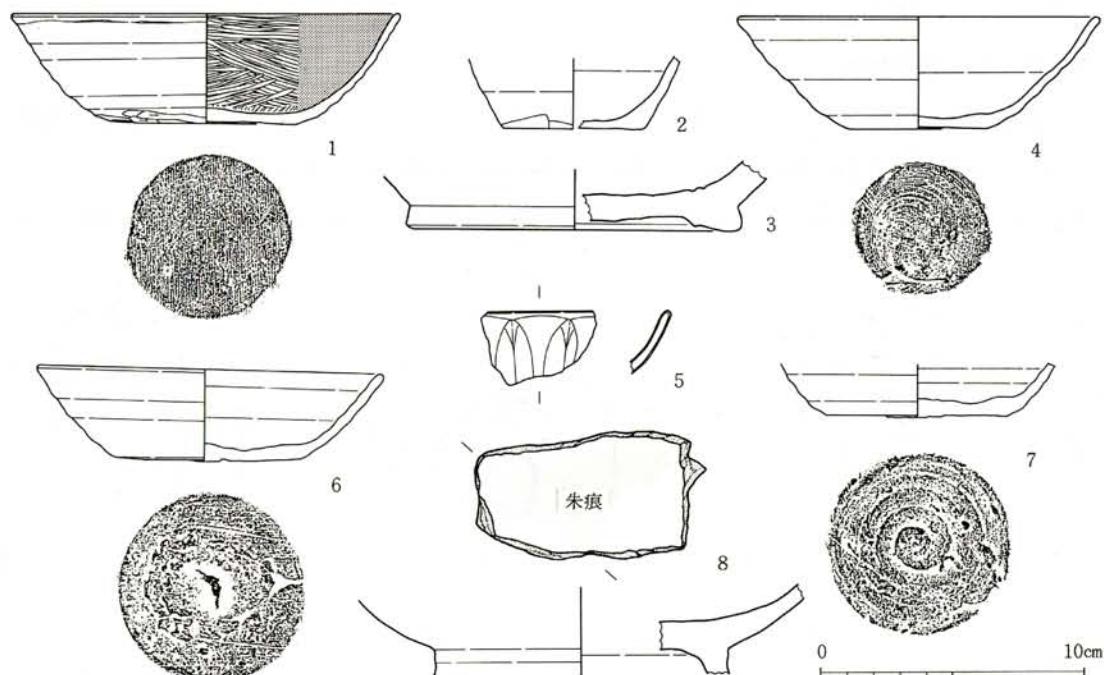
偏している。確認できる長さは3.7mで、幅50cm、深さ40cmを計る。埋土は3層に分けられ、特に2層には炭化物が厚く堆積している。遺物は出土していない。

(4) 土塙

SK 01土塙 丘陵部のV層上面で検出した。重複関係からSB 01掘立柱建物跡より新しい。平面形は不整橢円形で、長軸約1m、短軸0.6m、深さ10cmを計る。埋土は褐灰色シルトの単層である。遺物は土師器杯、須恵器杯・甕がわずかに出土している。

SK 02土塙 丘陵裾部の地山上で検出した。重複関係からSD 02(B)溝跡より古く、SD 05溝跡より新しい。平面形は不整橢円形で、長軸約2m、短軸約1m、深さ10cmを計る。埋土はオリーブ灰色シルト質粘土の単層である。遺物は出土していない。

SK 03土塙 丘陵裾部の地山上で検出した。遺構の南半が調査区外へ延びるため全体の形状、規模は不明であるが、検出した部分についてみると、長軸約1.2m、短軸0.7m以上、深さ90cmを計る。埋土は下層が粘性のある土でややグライ化している。下層では砂が交互に薄く堆積している。遺物は出土していない。



単位:cm ()は推定値

No.	遺構	層位	種類	器形	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	備考
1	SE 02	井戸枠内埋土	土師器	杯	ロクロナデ、体部下端～底部手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	14.8	6.3	4.2	
2	タ	掘り方埋土	須恵器	小型蓋	ロクロナデ、底部回転糸切り、体部下端～底部周縁手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	(5.4)			
3	タ	タ	タ	蓋	タ	ロクロナデ	(12.8)			
4	タ	埋土	赤焼き土器	杯	タ、底部回転糸切り	ロクロナデ	(13.8)	5.0	4.3	
5	SD 02	タ	青磁	碗						蓮弁文
6	SD 05	灰白下層	須恵器	杯	ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ	ロクロナデ	13.7	7.1	3.5	内外面火ダスキ痕
7	タ	タ	タ	タ	タ	タ	6.9			タ
8	SD 09	埋土	タ	高台付杯	タ	ロクロナデ、一部研磨				転用硯 内面朱痕

第10図 井戸跡、溝跡出土遺物

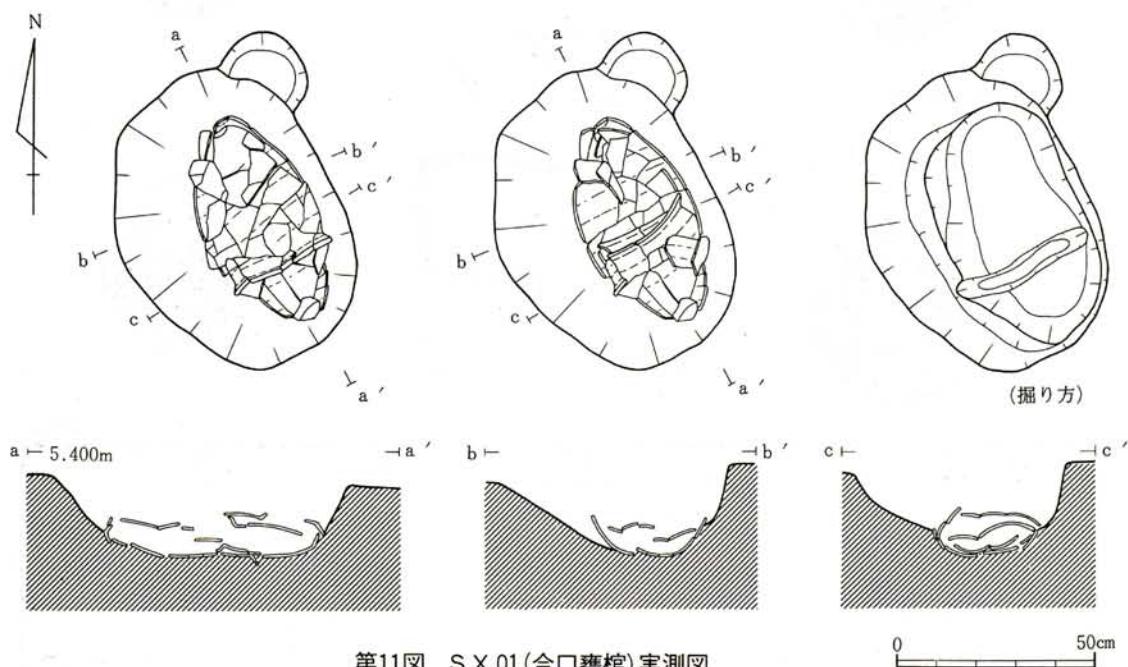
SK 04土塙 丘陵部から同裾部へ移行する斜面のIV層上面で検出した。重複関係からSD 08溝跡より古い。平面形は不整方形で、北半に浅い円形のくぼみを有する。規模は長軸約1.3m、短軸約1mを計る。底面は東壁ぎわが深くなつており、西へ向つて緩やかに立ち上がる。埋土は東側から自然に堆積していった状況を示している。遺物は土師器、須恵器杯・甕の破片がわずかに出土している。

SK 05土塙 丘陵裾部の地山上で検出した。重複関係からSD 04・05溝跡より古い。平面形はSD 05溝跡によって南半を壊されているが、およそ橢円形を呈していたと思われる。規模は長軸1.2m、短軸1m以上、深さ約50cmを計る。埋土は下層がグライ化した均質な土で、粘性が強い。一方、上層は砂質シルトと粘土質シルトが互層になっている。遺物は、土師器杯、須恵器甕がわずかに出土している。

SK 06土塙 丘陵裾部の地山上で検出した。重複関係からSE 01井戸跡より古く、SD 05溝跡より新しい。平面形は不整方形で、一辺2.5m前後を計る。底面は凹凸が激しく、西側ではテラス状になっている。遺物は底面上から比較的多く出土しており、土師器、須恵器杯・壺・甕、赤焼き土器、平瓦などがある。

(5) SX 01 (合口甕棺)

丘陵部のV層上面で検出した。掘り方平面形は隅丸長方形を呈する。方向は合口甕棺の長軸方向で、北で約27度西へ偏している。規模は長軸76cm、短軸55cm、深さ23cm（最大）を計る。断面形は東辺がほぼ垂直に立ち上がるのに対し、西辺は緩やかである。底面は甕棺の形態に合



第11図 SX 01(合口甕棺)実測図

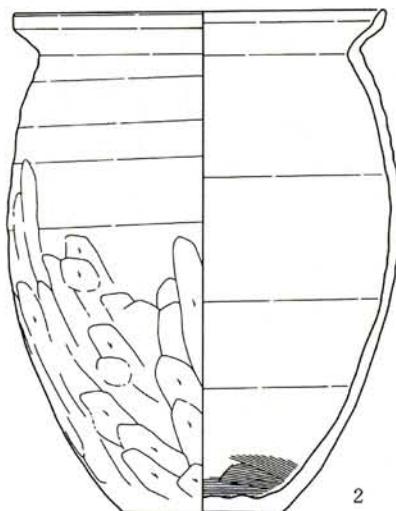
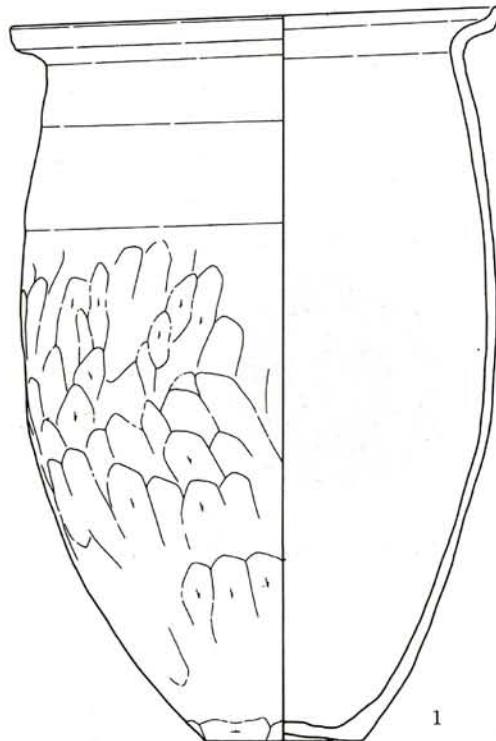
わせて掘られている。甕棺は掘り方の東寄りに埋められており、方向は掘り方長軸線にはほぼ一致している。埋土についてみると、甕棺内の上層が褐灰色粘土質シルト層、下層が浅黄橙色粘土質シルト層である。一方、掘り方内埋土は灰黄褐色シルト層で、地山ブロックと炭化物を多く含んでいる。これはV層に非常に近似した土であることから、埋め戻しが行なわれたとみることができる。甕棺は2個体分あり、いずれもロクロを使用して製作したものである。長胴形を呈し、外面の体部下半はヘラケズリ調整されている。その他、掘り方内埋土から土師器甕、須恵器杯・甕の破片が若干出土している。

〈堆積層出土の遺物〉

III層からは、須恵器杯（底部切り離し不明で、回転ヘラケズリ調整のものを含む）・高台付杯・壺・甕、赤焼き土器、丸瓦、羽口が出土しているが、いずれも細片のため図示できるものはない。

IV層については灰白色火山灰の上層と下層の出土遺物に分けられる。前者には、土師器杯、須恵器甕、瓦がある。後者には、土師器杯・甕（ロクロ使用）、須恵器杯・壺・甕、赤焼き土器杯、丸瓦、円盤状土製品、鉄滓がある。

V層からは、土師器甕、須恵器杯（底部回転ヘラ切りで、周縁をかるくナデ調整しているもの）・壺・甕、砥石が出土している。

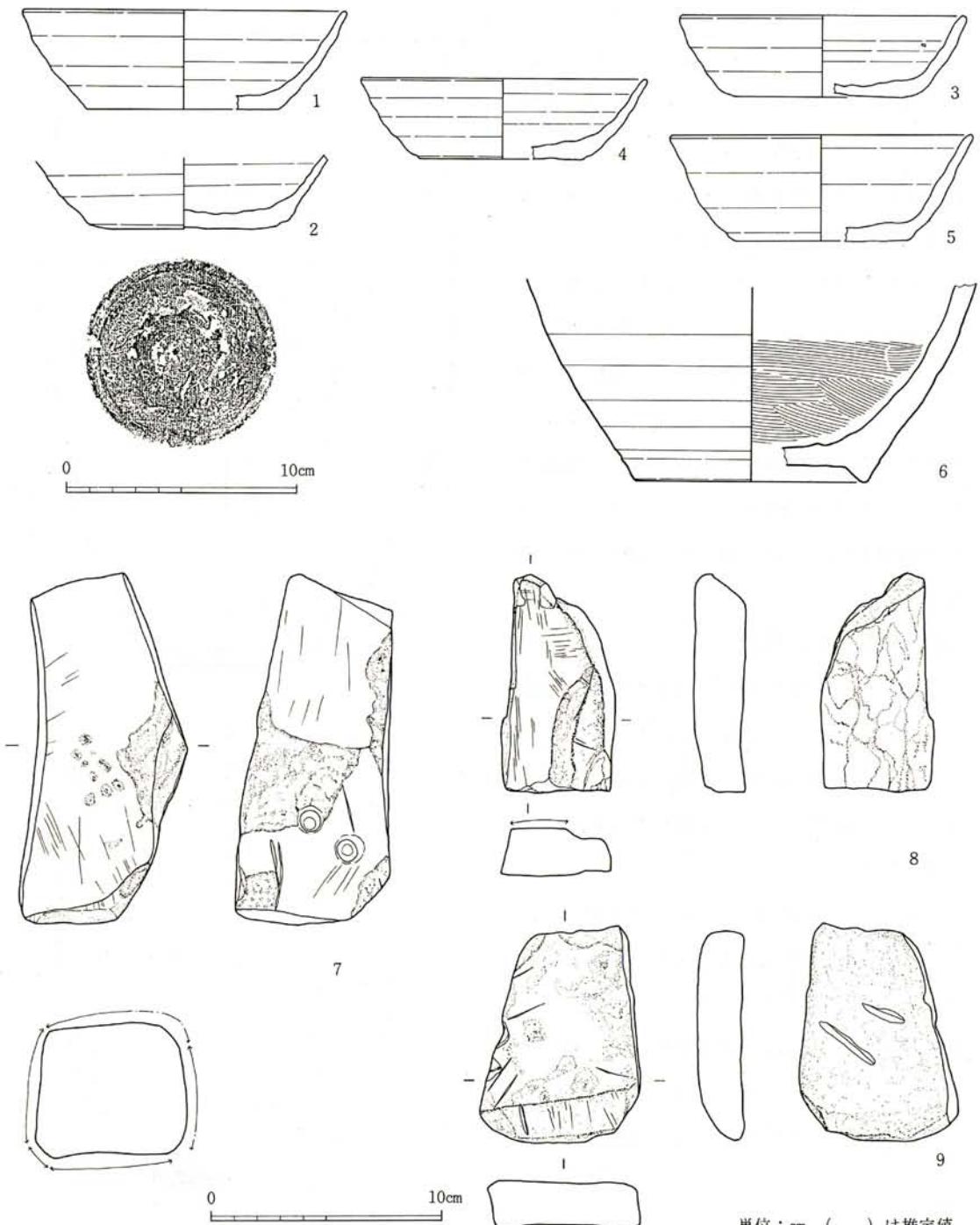


0 15cm

単位: cm

No.	種類	器形	外 面 調 整	内 面 調 整	口 径	底 径	器 高	備 考
1	土師器	甕	ロクロナデ、体部ヘラケズリ	ロクロナデ、体部下端～底部ヘラナデ	18.9	8.0	25.5	
2	々	々	々	々	24.8	8.0	37.0	

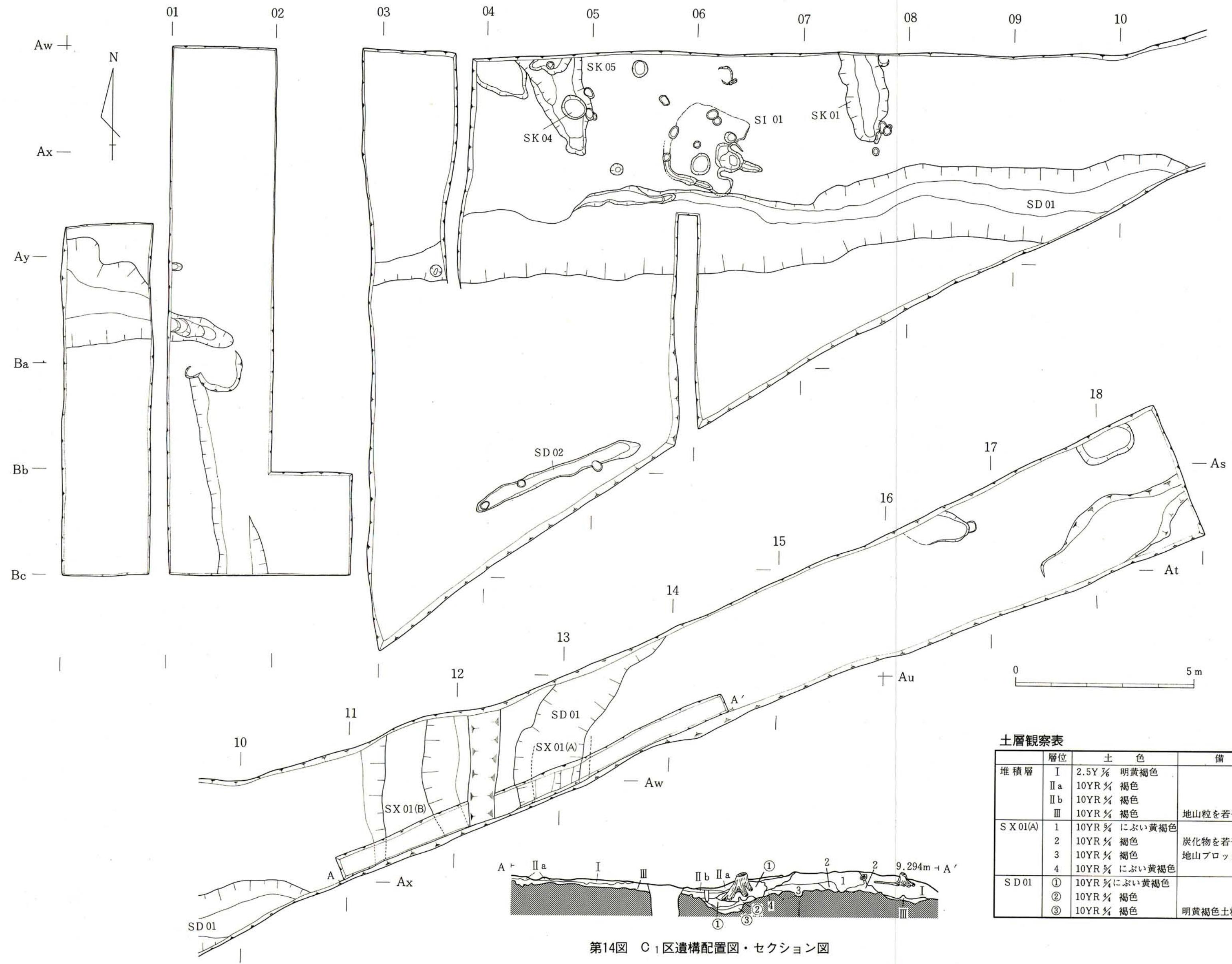
第12図 S X 01(合口甕棺)出土遺物



単位: cm ()は推定値

No.	層位	種類	器形	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	備考
1	表採 V層	須恵器	杯	ロクロナデ、底部回転糸切り タ タ	ロクロナデ タ タ	(14.0) (8.6) 8.0	(7.4) (7.2) (7.6)	4.3 3.5 3.6 4.6	
2									
3									
4									
5									
6			壺	タ タ	タ タ				
7	砥石	V層出土							
8	砥石	V層出土							
9	砥石	S E 02出土	(擦痕・線状痕あり)						

第13図 堆積土出土遺物



第14図 C1区遺構配置図・セクション図

2. C地区

本地区は、昨年度試掘調査を実施した箇所をC₁区、今回新たに設けた調査区をC₂区と呼ぶことにした。C₁区は、昨年竪穴住居跡を検出した周辺の精査および、丘陵東側への遺構の伸びを確認することを目的として調査区を設定した。C₂区は、C₁区の西側に隣接する北斜面に位置しており、北・西側は、後正の削平により大きく改変されている。

〈地形と基本層位〉

C₁区については昨年度の報告書で説明していることより、今回はC₂区を中心に記述する。C₂区の現況での地形は、南端が平場状になっており、北側へ向かって傾斜している。南端と北端の高低差は約2.2mである。堆積土は、0.3～1mの厚さを計り、地山の傾斜面に沿って堆積している。堆積層は7層に分層され、I層が表土、II～VII層が遺物を含む包含層となっている。II層は、南半部の平場状のところに見られ、地山ブロックを多量に含む土層であることから整地層の可能性もある。III層は、調査区のほぼ全域に見られる。IV～VII層は堆積範囲が限られており、IV・V層が調査区の南半に、VI・VII層が北半の東側に多く分布している傾向がある。また、調査区のほぼ中央西側付近には整地層が分布している。これは、V層におおわれており、黄灰色シルトと淡黄色シルトによって、約2～5cmの幅で版築状に整地されている。

〈発見遺構と遺物〉

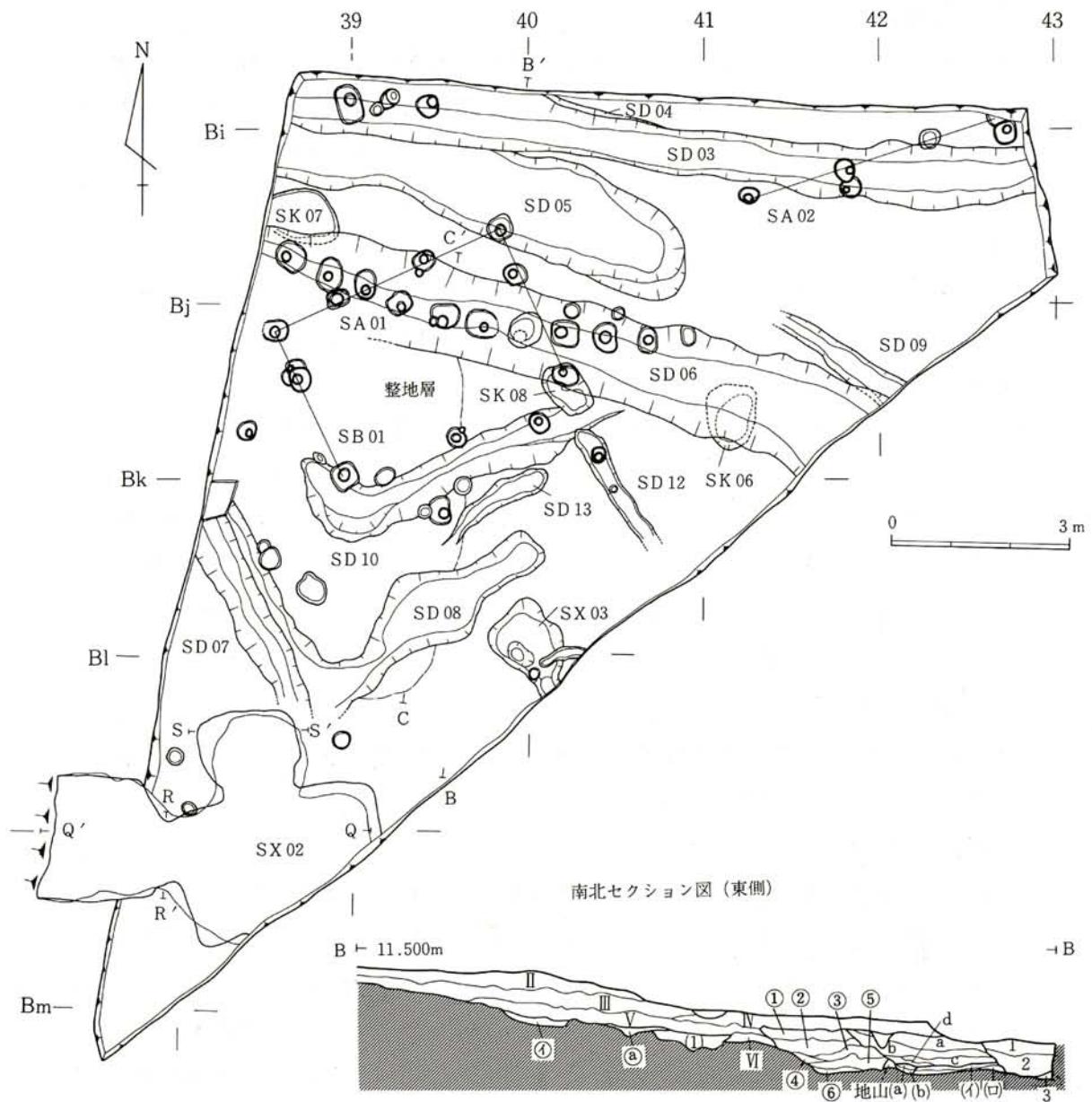
本地区で検出した遺構は、掘立柱建物跡1棟、柱列跡2条、竪穴住居跡5軒、溝跡15条、土塙7基、特殊遺構3、小柱穴である。

(1) 掘立柱建物跡

SB 01掘立柱建物跡 C₂区のほぼ中央、整地層上面で検出した東西3間、南北2間以上の掘立柱建物跡である。重複関係からSD 06溝跡、SK 06土塙より古く、SD 10溝跡より新しい。SA 01柱列跡とも重複があるが直接切り合いを有していないため新旧関係は不明である。方向は、北側柱列でみると北で約66度東に偏している。柱間についてみると、北側柱列で西より、1.22m・1.63m・1.38mで総長3.23mである。東側柱列では北より0.75m・1.85mを計り、総長については不明である。柱穴は、一辺40cmの隅丸方形を呈するものや、30×40cmの不整形のものもあり一様ではない。掘り方埋土は褐色系のシルトで、地山粒を多く含んでいる。柱は柱痕跡より径15～20cmと推定される。遺物は、土師器杯・甕（ロクロ未使用も含む）、須恵器杯・甕、丸瓦が出土している。

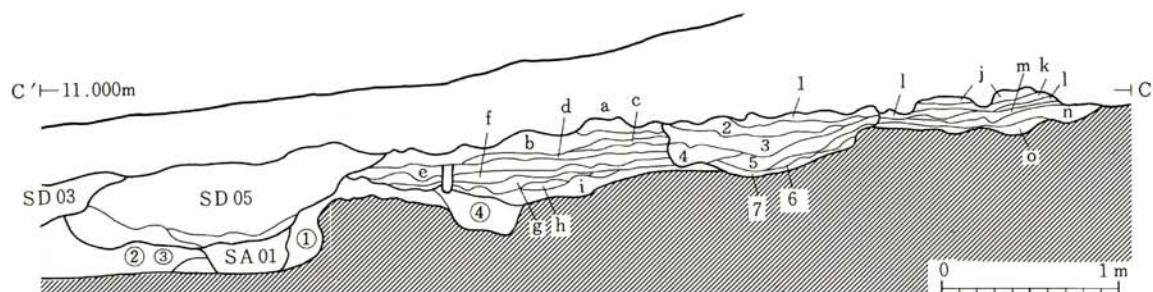
(2) 柱列跡

SA 01柱列跡 C₂区のほぼ中央、地山およびSI 04竪穴住居跡埋土上面で検出した東西方の柱列跡である。確認できたのは10間分であるが、西側はさらに調査区外へと伸びている。重複関係から、SD 06溝跡より古く、SI 04竪穴住居跡より新しい。柱間は、東より0.67m・



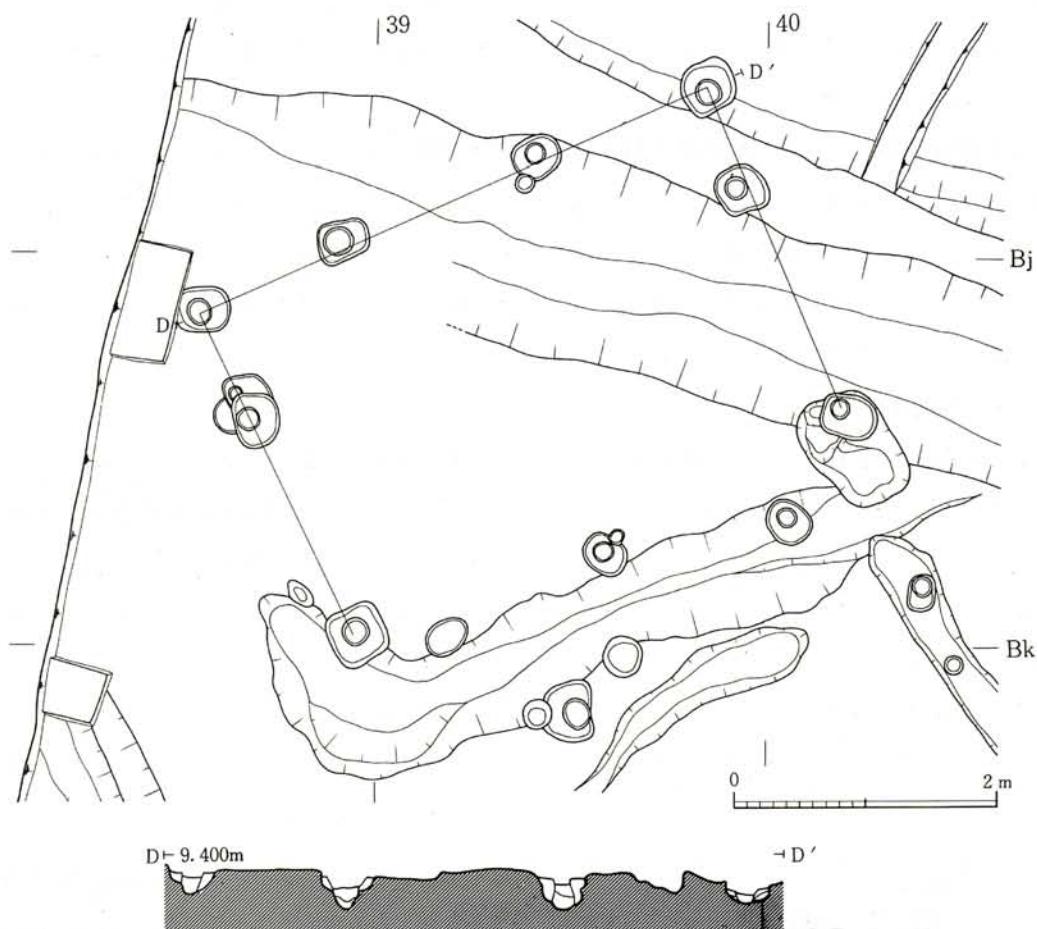
	層位	土色	備考		層位	土色	備考
堆積層	II	10YR 5/4 明黄褐色		SD 06	①	10YR 5/4 にぶい黄褐色	炭化物を若干含む
	III	10YR 5/2 黒褐色	炭化物を含む		②	10YR 5/4 にぶい黄褐色	粒土質
	IV	10YR 5/6 褐色	〃		③	10YR 5/4 にぶい黄褐色	炭化物を含む
	V	10YR 5/6 褐色	〃		④	10YR 5/4 灰黄褐色	
	VI	10YR 5/6 にぶい黄褐色	炭化物を若干含む		⑤	10YR 5/4 にぶい黄褐色	地山ブロックを含む
					⑥	10YR 5/4 明黄褐色	粒土質
SD 03	1	10YR 5/4 褐色		SD 08	⑦	10YR 5/4 灰黄褐色	
	2	10YR 5/6 にぶい黄褐色			⑧	10YR 5/4 にぶい黄褐色	砂質 地山ブロックを含む
	3	10YR 5/6 灰黄褐色	粘土質 地山ブロックを含む	SD 13	⑨	10YR 5/4 にぶい黄褐色	炭化物、地山ブロックを含む
SD 04	イ	10YR 5/4 にぶい黄褐色	〃 褐色土を含む	SD 10	(1)	10YR 5/4 暗褐色	
				SI 04	(イ)	10YR 5/4 灰黄褐色	
SD 05	a	10YR 5/4 暗褐色	炭化物を含む		(ロ)	10YR 5/4 灰黄褐色	粘土質 地山ブロックを含む
	b	10YR 5/4 褐色	炭化物、地山粒を含む	SA 01	(a)	10YR 5/4 褐灰色	地山粒を若干含む
	c	10YR 5/4 にぶい黄褐色			(b)	10YR 5/4 明黄褐色	粘土質
	d	10YR 5/4 灰黄褐色					

第15図 C2区遺構配置図・セクション図(1)

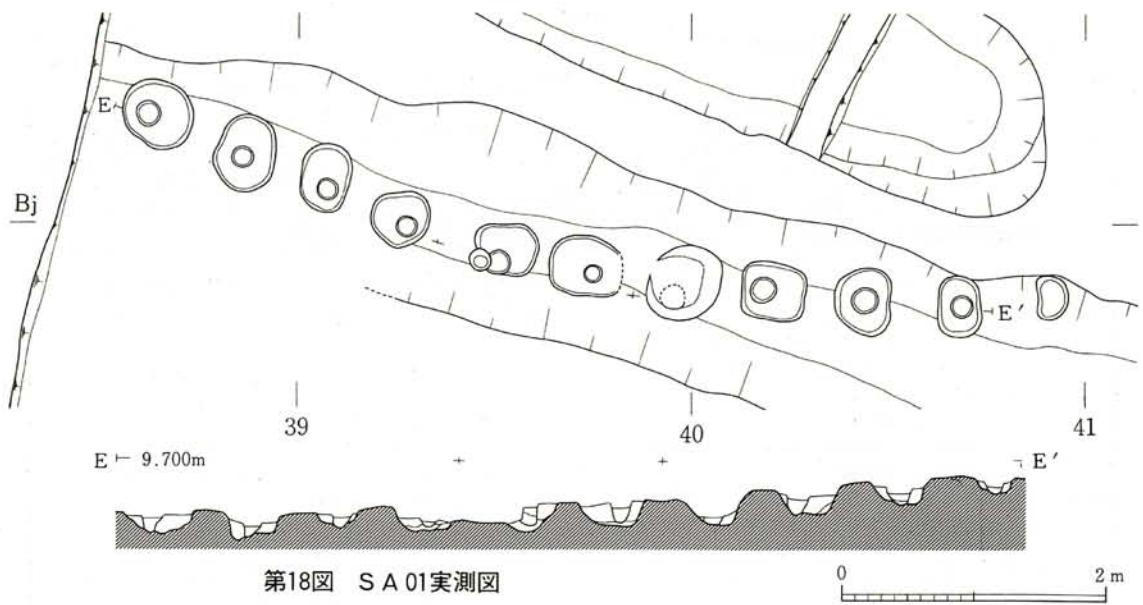


	層位	土 色	備 考		層位	土 色	備 考
SD 10	1	10YR ½	明黄褐色	整地層	g	2.5Y ¾	淡黄色
	2	10YR ¾	褐灰色		h	2.5Y ¾	淡黄色
	3	10YR ¾	灰黄褐色		i	2.5Y ¾	淡黄色
	4	10YR ¾	褐灰色		j	2.5Y ¾	黄灰色
	5	10YR ¾	褐灰色		k	2.5Y ¾	黄灰色
	6	10YR ¾	浅黄橙色		l	2.5Y ¾	淡黄色
	7	10YR ¾	明黄褐色		m	2.5Y ¾	灰白色
整地層	a	2.5Y ¾	黄灰色		n	2.5Y ¾	淡黄色
	b	2.5Y ¾	黄灰色		o	2.5Y ¾	黄灰色
	c	2.5Y ¾	黄灰色	SI 05	①	10YR ¾	灰黄褐色
	d	5Y ¾	灰色		②	10YR ¾	褐灰色
	e	5Y ¾	灰色		③	10YR ¾	明黄褐色
	f	2.5Y ¾	淡黄色		④	10YR ¾	にい黄橙色

第16図 C 2区南北セクション図(西側)



第17図 SB 01実測図



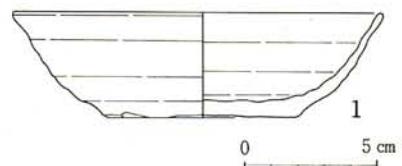
第18図 SA 01実測図

0.72m・0.78m・0.70m・0.64m・0.71m・0.74m・0.66m・0.70m・0.79mで、確認できる総長は7.11mである。柱穴は不整方形を呈し一辺40~60cm、深さは約20cmである。柱は柱痕跡より径15~20cmと推定される。遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・壺・甕、円盤状土製品、丸・平瓦、古銭（開元通宝）が出土している。

SA 02柱列跡 C2区の北東隅で検出した。重複関係にあるSI 02・03竪穴住居跡、SD15溝跡の埋土上で検出し、これらをすべて切っている。方向は、北で約72度東に偏している。3間分検出しており、柱間は西より1.71m・約1.58m・約1.2mである。柱穴は一辺約40cmの不整方形を呈し、深さ15cmを計る。柱痕跡は2箇所で検出しており径15cmである。遺物は土師器、須恵器の細片が若干出土している。

(3) 竪穴住居跡

SI 01竪穴住居跡 C1区の地山上で検出した。北・西壁付近は既に削平されており、貼り床がわずかに残っているにすぎない。しかし、カマドおよびその周辺は比較的形態をとどめていた。このような状況から平面形については不明確であるが、およそ隅丸方形を呈するものと考えておきたい。規模は南辺2.0mであり、東辺は2.2mまで検出した。方向は、南辺が東で約16度南に偏している。カマドは、東辺のほぼ中央に付設され燃焼部と煙道部からなる。燃焼部側壁は地山を削り出して構築しており、側壁は火熱を受け赤変している。



単位:cm ()は推定値

No.	層位	種類	器形	外 面 調 整	内 面 調 整	口 径	底 径	器 高	備 考
1	1層	須恵器	杯	ロクロナデ、底部ヘラ切り、体部下端~底部手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	(14.0)	7.2	4.0	

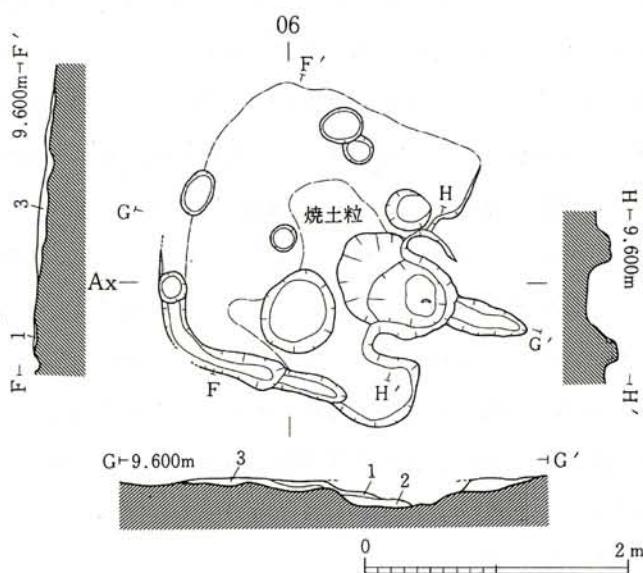
第19図 SI 01出土遺物

煙道部との境には約10cmの段差がみ

られる。また、燃焼部内で丸瓦が直立した状態で検出されている。これは支脚として利用されていたものと考えられる。カマド周辺には炭化物と焼土粒を含む土が分布していた。

周溝は、南・西辺で確認しているが、おそらくは各辺を巡っていたものと思われる。幅は10~13cm、深さ約10cmを計る。ピット等は検出されているが、いずれも規則的に配置されたものではない。埋土は、カマドをとり囲むように堆積する1層と、貼り床の2・3層に大別される。遺物は、1層から土師器高台付杯・甕、須恵

器杯、赤焼き土器杯、平・丸瓦が出土している。

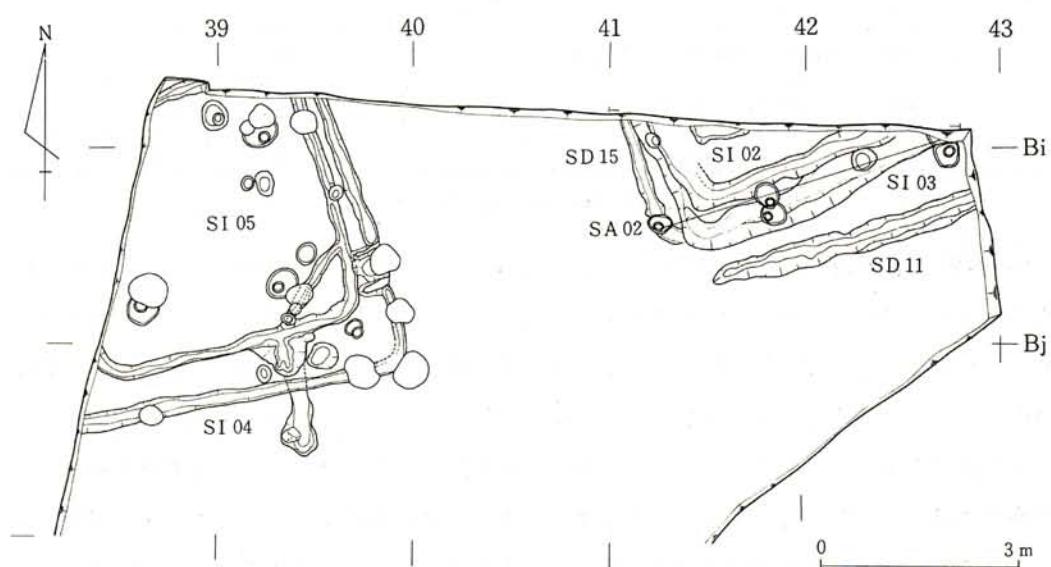


土層観察表

遺構	層位	土色	備考
SI 01	1	10YR 1/2 黒色	炭化物層 住居跡埋土
	2	10YR 1/2にぶい黄橙色	粘土質
	3	10YR 1/2 褐灰色	貼り床 炭化物を若干含む

第20図 SI 01実測図

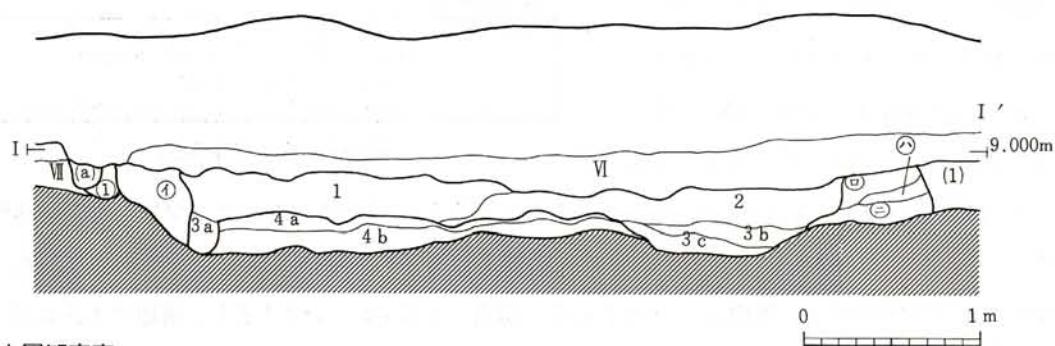
SI 02竪穴住居跡 C2区の北東隅、Ⅶ層およびSI 03住居跡埋土上面で検出した。重複関係からSA 02柱列跡より古く、SI 03竪穴住居跡より新しい。南辺と西辺の一部を検出したにすぎずその全体の形状、規模等は不明である。調査した部分についてみると、南辺で1.5m以上を計り、方向は南辺が北で約70度東に偏している。床は、全面に地山ブロックを含むにぶい黄



第21図 C2区遺構配置図(2)

橙色シルトで貼り床されており、その上面にはうすい炭化物層が堆積している。周溝は、幅約30cm、深さ20cmを計り、南・西辺で検出している。カマド、柱穴は検出できなかった。住居内埋土は、2層に分けられるが基本的には同一で、地山粒を含むシルトで良くしまっている。遺物は土師器杯・高台付杯・甕、須恵器杯・蓋・甕、丸瓦が出土している。

S I 03竪穴住居跡 C2区の北東隅、Ⅶ層上面で検出した。重複関係からS A 02柱列跡、S I 02竪穴住居跡より古く、SD 15溝跡より新しい。S I 02竪穴住居跡にそのほとんどが壊されており、周溝を部分的に検出したにすぎない。規模は、南辺で4.0m、西辺では2.2mまで検出した。方向は、南辺が北で約70度東に偏しており、S I 02竪穴住居跡とほぼ同じである。周溝は、南辺の一部で検出しておらず、幅30cm、深さ15cmを計る。カマド、柱穴等については調査範囲が限られていたこともあり不明である。埋土は3層に細別されるが、いずれも地山ブロックを多量に含んでいることから人為的に埋め戻されている可能性がある。遺物は土師器、須恵器の破片が若干出土している。



土層觀察表

遺構	層位	土 色	備 考	遺構	層位	土 色	備 考
SI 02	1	7.5YR 1/4にぶい褐色	石英粒を含む	SI 03	④	10YR 1/2 褐灰色	
	2	10YR 1/2 灰黄褐色			⑤	10YR 1/2 灰黄褐色	砂質
	3 a	10YR 1/2 灰黄褐色	周溝 地山ブロック、炭化物を含む		Ⓐ	2.5Y 1/4 浅黄色	々
	3 b	10YR 1/2 灰黄褐色	々		Ⓑ	10YR 1/2にぶい黄橙色	やや大きめの地山粒を多量に含む
	3 c	10YR 1/2にぶい黄橙色	々 粘土質	Pit	(a)	2.5Y 1/4 黄灰色	砂質
	4 a	10YR 1/2 黒色	炭化物層	SD 15	0	7.5YR 1/2 褐灰色	炭化物、マンガン粒を含む
	4 b	10YR 1/2にぶい黄橙色	地山粒を含む	S A 02	(1)	2.5Y 1/4 淡黄色	地山粒を多量に含む

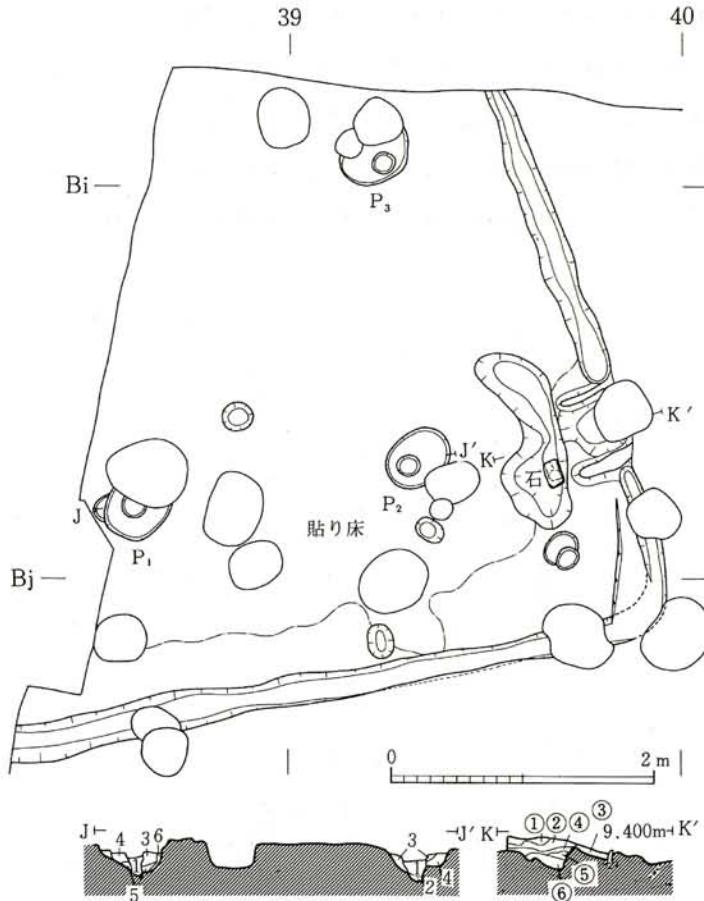
第22図 S1 02・03セクション図

SI 04竪穴住居跡 C2区の北西隅付近の地山上で検出した。重複関係からSB 01掘立柱建物跡、SA 01柱列跡、SD 03~06溝跡より古く、SI 05竪穴住居跡より新しい。平面形は、隅丸方形を呈していたものと思われ、南辺で5.1m、東辺で4.18mまで検出している。方向は、南辺で計ると北で約78度東に偏している。構築に際しては、SI 05竪穴住居跡を埋め戻して、ほぼ全面に床を貼っている。カマドは、東辺の南東隅寄りに付設され、燃焼部のみを検出した。燃焼部は浅いくぼみになっており、内部埋土は焼土・炭化物粒を多く含んでいる。側壁、床面にはさほど火熱を受けた痕跡は認められない。周溝は、カマド付設部分を除いた壁沿いに巡っ

ている。幅20~30cm、深さ5~10cmを計り、南辺ほど深く、オーバーハングしている部分もある。住居内で検出されたピットの内、柱穴と推定されるのはP₁~P₃の3個である。いずれも不整円形のプランで柱痕跡を有している。これらの各柱穴を結んだ線は住居各壁と平行で、住居平面形とほぼ相似する形をとることから主柱穴とみられる。カマドの西側には、不整形の土塙が検出された。これは埋土中に側壁補強用と思われる石や、焼土、炭化物粒を混入していることから、カマドに関連する用途に使用されていたものと考えられる。埋土は溝等によって壊され、ほとんど残っていないが、南壁ぎわには人為的な埋め戻しが認められた。遺物は、土師器、須恵器の小破片が出土している。

SI 05竪穴住居跡 C2区の

北西隅付近のSI 04竪穴住居

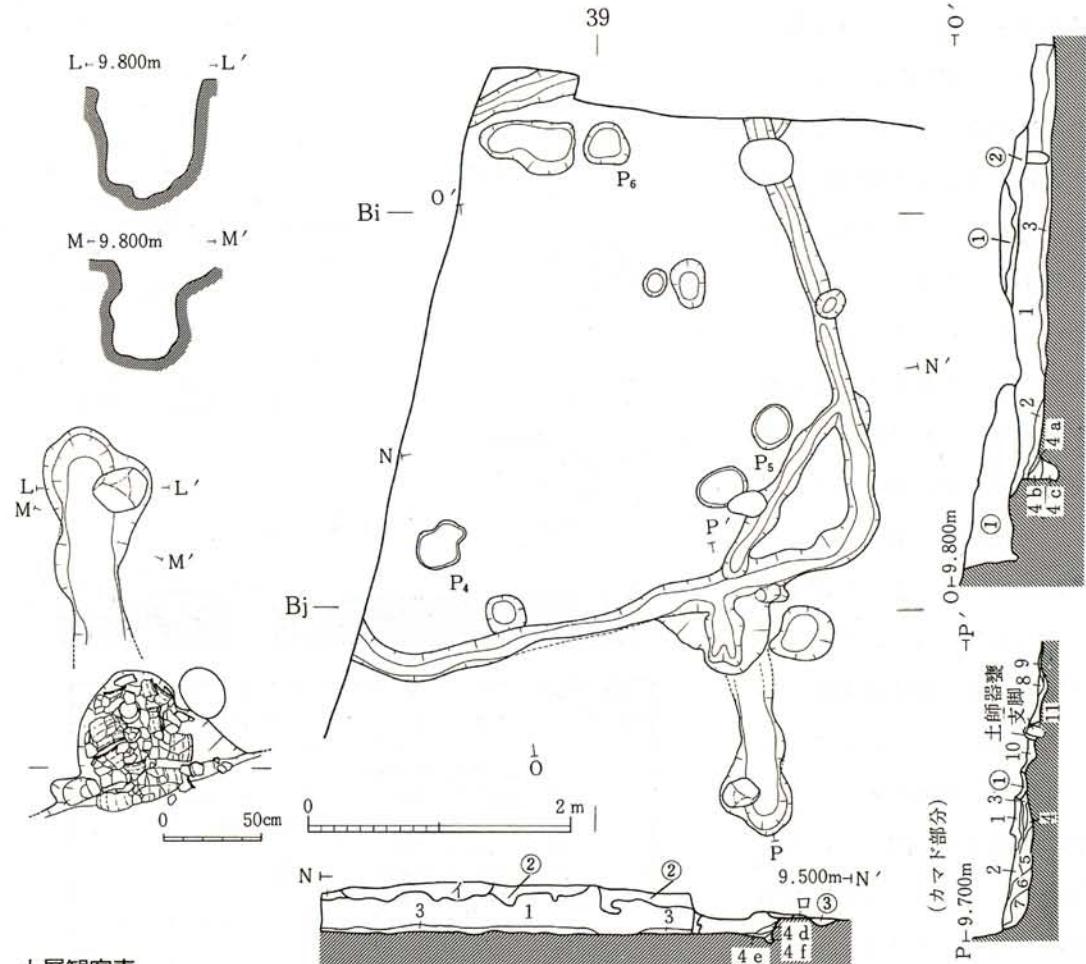


遺構	層位	土色	備考
SI 04 カマド	①	10YR 4/2 褐灰色	炭化物を若干含む
	②	10YR 4/2 灰黄灰色	焼土粒、炭化物を含む
	③	10YR 4/2 明黄褐色	
	④	10YR 4/2 黒褐色	焼土粒、炭化物を多量に含む
	⑤	10YR 4/2 にぶい黄褐色	炭化物を含む
	⑥	10YR 4/2 黒褐色	〃
柱穴	1	10YR 4/2 暗褐色	柱痕跡
	2	10YR 4/2 暗褐色	〃
	3	10YR 4/2 灰黄褐色	掘り方 炭化物を若干含む
	4	10YR 4/2 明黄褐色	〃
	5	10YR 4/2 褐灰色	明黄褐色土を斑状に多量に含む
	6	10YR 4/2 灰黄褐色	

第23図 SI 04実測図

跡床面上で検出した。重複関係からSB 01掘立柱建物跡、SI 04竪穴住居跡、SA 01柱列跡、SD 03~06溝跡より古い。平面形は、隅丸方形を基調とするものと推定され、東西軸4.2m、南北軸4.15mを計る。方向は南辺で計ると北で約78度東に偏している。SI 04竪穴住居跡構築時に埋め戻されていることから、南半は比較的残りが良好であるが、北半は後世の溝によってかなり削平されている。カマドは、南辺の南東隅寄りに付設され、燃焼部と煙道部からなる。燃焼部は壁に接して住居外に構築されており、周溝がその中央に入り込んでいる。規模は

幅約1m、奥行55cmを計り、底面には土師器甕4個体分を敷きつめて燃焼部床面としている。床面のほぼ中央には支脚と考えられる石が据えられ、その上に土師器甕の底部（第26図3）が被せられていた。煙道は、基底幅20cm、長さ1.25mで、ほぼ水平に煙出し孔へと続いている。煙道先端の西壁ぎわには、長さ50cmの砥石を転用したとみられる細長い石が据えられている。周溝は、住居壁沿いに全周しており、南壁ぎわがより深くなっている。幅20cm前後、深さ3～



土層観察表

遺構	層位	土 色	備 考	遺構	層位	土 色	備 考
S K 05	イ	10YR 5/4 褐色	砂質	S I 04	①	10YR 5/4 明黄褐色	周溝
Pit	口	10YR 5/4 灰白色		S I 05	1	10YR 5/4 明黄褐色	煙道部 炭化物を多量に含む
S I 04	①	10YR 5/4 褐黃褐色	地山ブロック、炭化物を含む	2	10YR 1/4 黒色	〃 炭化物層	
	②	10YR 5/4 褐灰色	砂質、炭化物と地山粒を含む	3	10YR 5/4 にぶい黄褐色	〃 炭化物を多量に含む	
	③	7.5YR 5/4 褐灰色	周溝 炭酸鉄斑を多量に含む	4	10YR 5/4 黒色	煙道部 炭化物、焼土を若干含む	
S I 05	1	10YR 5/4 にぶい黄橙色	白色土粒を多量に含む	5	10YR 5/4 黒色	煙道部 炭化物、焼土を多量に含む	
	2	10YR 5/4 にぶい黄橙色	白色土粒を含む	6	10YR 5/4 黑褐色	煙道部 炭化物、焼土を含む	
	3	10YR 5/4 褐灰色	炭化物を含む	7	10YR 5/4 黑褐色	煙道部 炭化物を多量に含む	
	4 a	7.5YR 5/4 にぶい褐色	周溝	8	10YR 5/4 灰黄褐色	炭化物、焼土粒を含む	
	4 b	7.5YR 5/4 にぶい褐色	〃	9	10YR 1/4 黑色	〃	
	4 c	7.5YR 5/4 褐灰色	〃 粘土質 地山ブロックを含む	10	5YR 5/4 暗赤褐色	炭化物、焼土を多量に含む	
	4 d	7.5YR 5/4 褐灰色	〃	11	5YR 5/4 褐灰色	〃	
	4 e	7.5YR 5/4 褐灰色	〃				
	4 f	7.5YR 5/4 褐灰色	〃				

第24図 S I 05実測図

10cmを計る。住居内で検出されたピットの内、柱穴と推定されるのはP₄～P₆の3個である。いずれも不整形のプランで柱痕跡は認められていない。これらは、S I 04豊穴住居跡の主柱穴とほぼ位置を同じくしている。床面は、地山を床としておりやや凹凸があり北側に向かって傾斜している。住居内埋土は4層に分けられる。1層は前述した通り、S I 04豊穴住居跡構築時に埋め戻した整地兼貼り床である。出土した遺物の内、図示できたのは16点である。その内、燃焼部底面から出土した土師器4点は同時性を示す資料である。また、支脚（石）に被せられていた土師器甕や、煙道部先端出土の土師器甕、燃焼部埋土出土の土師器杯・甕もこれらに近い時期と考えられる。その他、埋土中から土師器杯（ロクロ未使用）、甕（ロクロ使用と未使用のものがある）、須恵器杯・蓋・壺・甕、丸・平瓦が出土している。

(4) 溝跡

SD01溝跡 C1区の中央を東西方向に走る溝跡で、近世以降の遺物を含む堆積層（Ⅱ層）の上面で検出した。部分的に段築になっているところもある。確認できる長さは約22mで、幅2m前後、深さ40～60cmを計る。なお、SX01を切る溝状プランは方向、埋土の状況からして同一のものと考えている。遺物は、瓦、砥石、陶磁器が出土している。

SD02溝跡 C1区の西側北壁付近の地山上で検出した東西溝である。小ピットと重複するがこれより古い。長さは5.0m、幅40～50cm、深さ2～5cmを計る。遺物は、丸・平瓦が出土している。

SD03溝跡 C2区の北壁ぎわ、Ⅲ層上面で検出した東西溝である。重複関係からSD04溝跡より新しい。確認できる長さは12.3mで、幅0.8～1.0m、深さ約50cmを計る。断面形は逆台形を呈する。埋土は、2層に分けられるが、いずれもしまりのない土質である。遺物は、土師器杯・高台付杯・甕、須恵器杯・蓋・壺・甕、赤焼き土器杯、円盤状土製品、丸・平瓦が出土している。

SD04溝跡 C2区の北壁ぎわ、Ⅲ層上面で検出した東西溝である。重複関係からSD03溝跡より古い。規模等についてはSD03溝跡に壊されており不明である。

SD05溝跡 C2区の北壁寄り、V層上面で検出した東西溝である。重複関係からSB01掘立柱建物跡、SD06溝跡より新しい。東端が調査区の中央付近で立ち上がるもので、幅1.6～1.7m、長さは7.2mまで検出した。断面形は舟底形で、深さ50cmを計る。埋土は、2層に大別されるが、いずれも自然堆積層である。遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・甕、丸・平瓦が出土している。

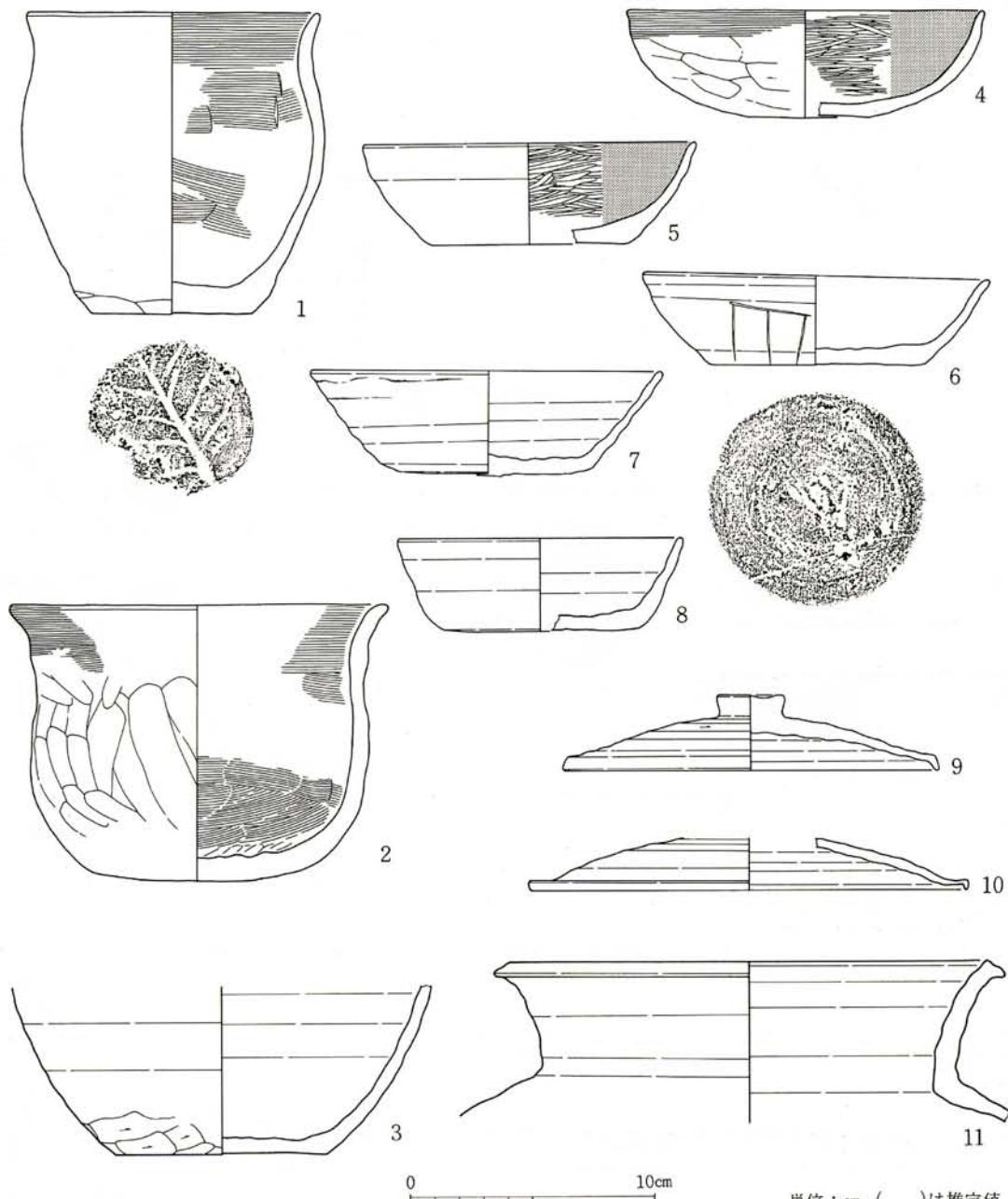
SD06溝跡 C2区のほぼ中央、V層上面で検出した東西溝である。重複関係からSD05溝跡より古く、SB01掘立柱建物跡、SA01柱列跡より新しい。方向は、発掘基準線に対して北で約20度東に偏している。確認できる長さは10.5mで、幅1.4～1.7m、深さ70cmを計る。底

面は東から西に傾斜している。埋土は、6層に細分されるが、全体に粘性に富んだにぶい黄褐色シルトが主体である。遺物は、比較的多量に出土しており、図示できたものも多い。土師器、須恵器、丸・平瓦、砥石、鉄滓、不明鐵製品が出土している。



No.	層位	種類	器形	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	備考
1	カマド内	土師器	壺	ヨコナデ、体部ヘラナデ	ヨコナデ、体部一部ヘラナデ	20.0			
2	々	々	々	ヨコナデ、体部ヘラナデ、ヘラケズリ	ヨコナデ、体部ヘラナデ	22.5			
3	々	々	々	々	ヨコナデ	21.7	8.2	30.8	
4	々	々	々	ヨコナデ、体部ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	20.1	9.0	14.8	
5	煙道部	々	々	ロクロナデ	ロクロナデ	(22.2)			

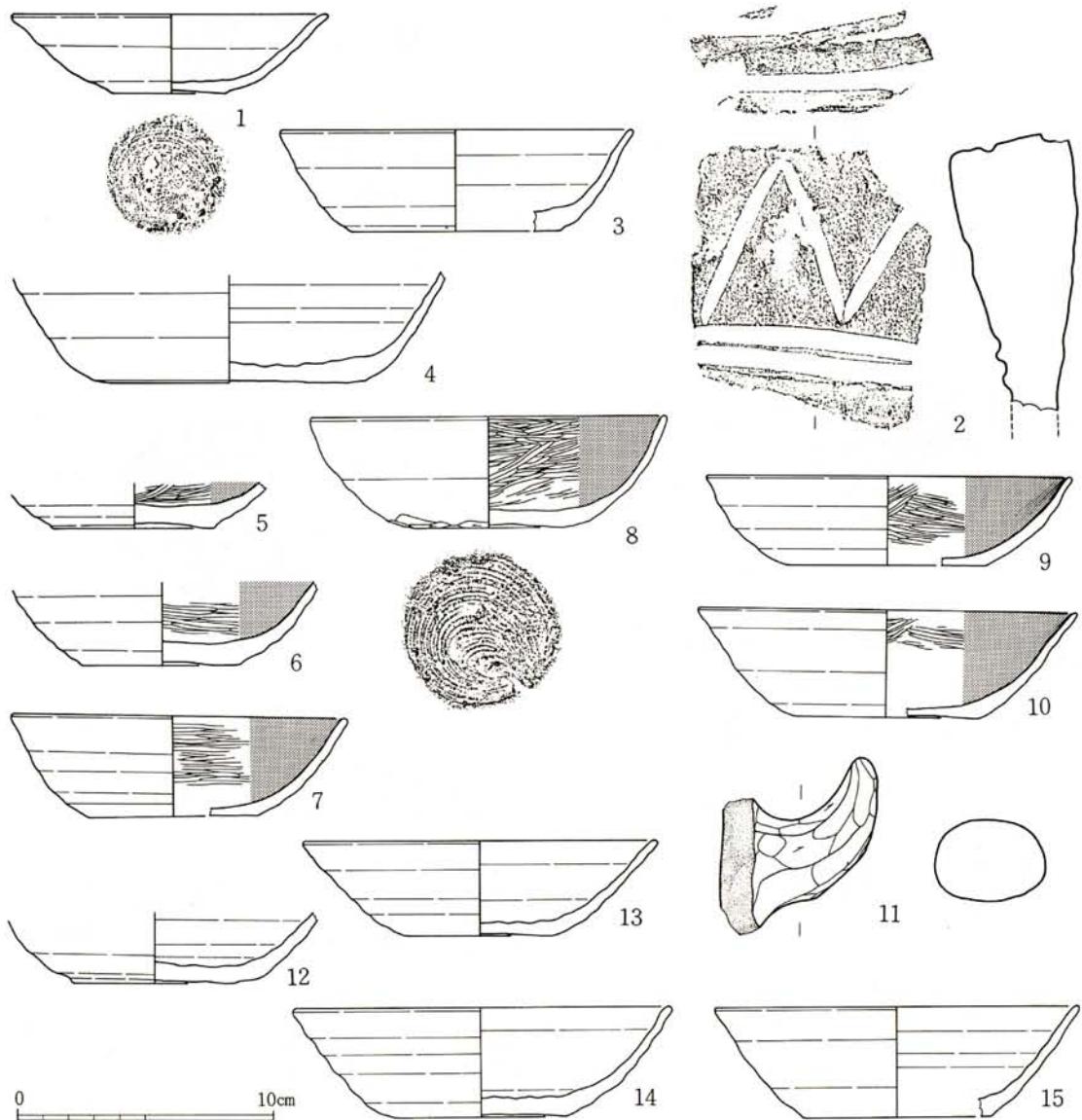
第25図 S105出土遺物(1)



単位: cm ()は推定値

No.	層位	種類	器形	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	備考
1	3 層	土師器	小型甕	体部下端ヘラケズリ、底部木葉痕	ヨコナデ、体部ヘラナデ	(12.1)	(6.6)	12.4	外面磨滅
2	周溝	々	々	ヨコナデ、体部ヘラケズリ	ヨコナデ、体部ヘラナデ、底部ナデ	(15.6)	9.0	11.3	
3	カマド内	々	甕	ロクロナデ、体部下端ヘラケズリ	ロクロナデ		(8.7)		
4	3 層	々	杯	ヨコナデ、体~底部ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	(14.6)		4.4	
5	カマド内	々	々	ロクロナデ		(13.6)	(8.0)	4.2	外底部磨滅
6	3 層	須恵器	々	ロクロナデ、底部回転ヘラ切り	ロクロナデ	14.2	8.8	3.7	外体部ヘラ描「口」
7	3 層	々	々	々	々	14.4	7.2	4.3	
8	1 層	々	々	々	々	(11.7)	(8.1)	3.8	
9	3 層	々	蓋	ロクロナデ、天井部回転ヘラケズリ	々	(15.4)	2.8	3.1	
10	1 層	々	々	々	々	(18.0)			
11	3 層	甕	ロクロナデ	々	々	(20.9)			

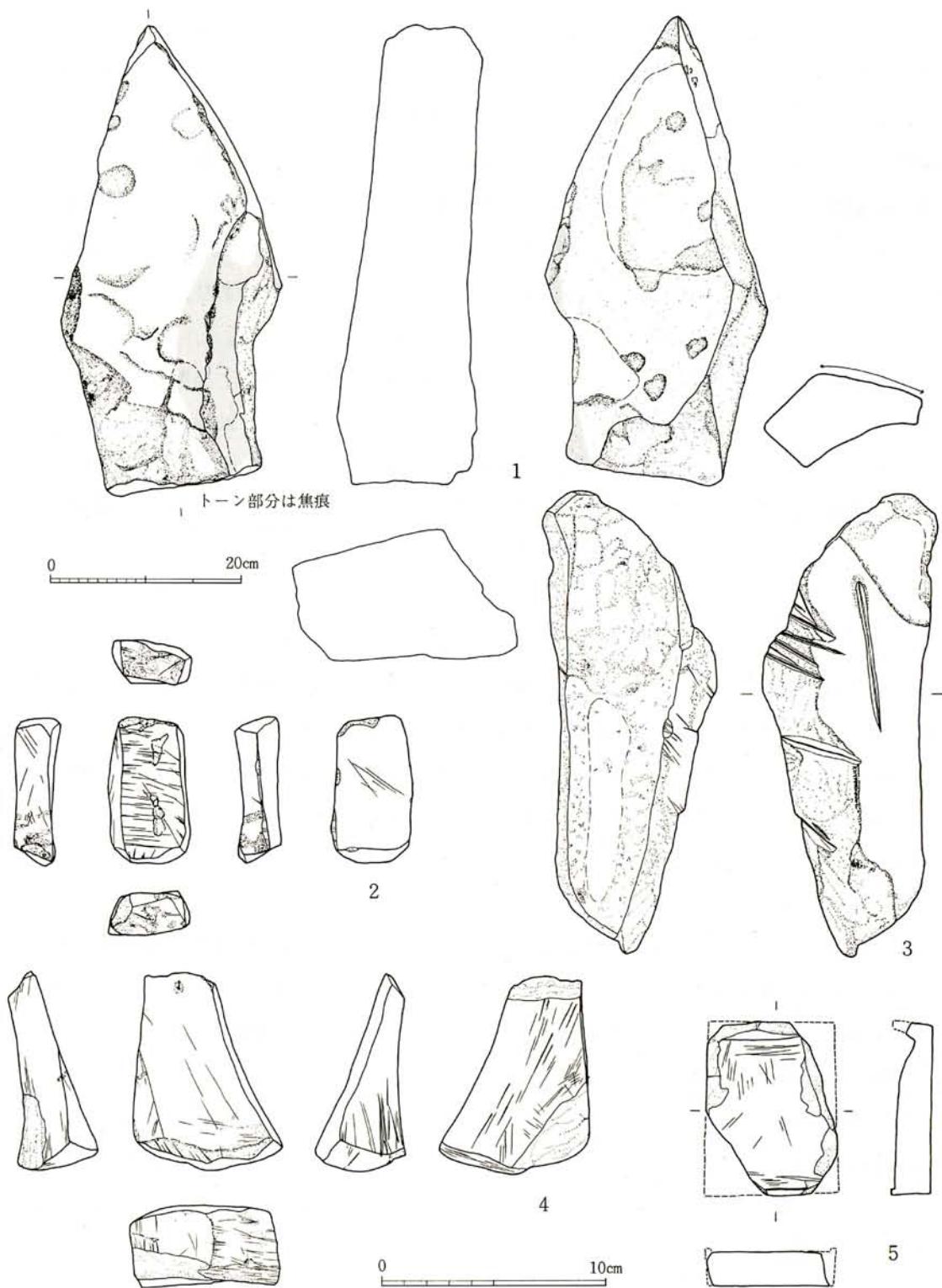
第26図 S105出土遺物(2)



単位: cm ()は推定値

No.	造構	種類	器形	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	備考
1	SD02	赤焼き土器	杯	ロクロナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ	12.7	4.4	3.1	
2	✓	軒 平 瓦		凹面指ナデ(布目痕若干残る)	凸面				
3	SD03	須 恵 器	杯	ロクロナデ、底部回転ヘラ切り	ロクロナデ	(13.6)	(8.0)	4.0	重弧文
4	✓	✓	✓	✓ 底部回転ヘラケズリ	✓		(10.6)		
5	SD06	土 師 器	✓	✓ 底部回転糸切り	ヘラミガキ・黒色処理	6.4			
6	✓	✓	✓	✓	✓	6.2			
7	✓	✓	✓	ロクロナデ、底部回転糸切り、底部下端回転ヘラケズリ	✓	(13.1)	(6.5)	3.9	
8	✓	✓	✓	ロクロナデ、底部回転糸切り、底部下端手持ちヘラケズリ	✓	13.8	5.8	4.3	
9	✓	✓	✓	ロクロナデ	✓	(13.0)	(7.6)	3.5	外底部磨滅
10	✓	✓	✓	✓ 底部回転糸切り	✓	(15.8)	(7.0)	4.2	
11	✓	✓	把手部	ヘラケズリ		6.6			
12	✓	須 恵 器	杯	ロクロナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ				
13	✓	✓	✓	✓	✓	(13.8)	(5.7)	3.7	
14	✓	✓	✓	✓	✓	(14.6)	6.8	4.3	
15	✓	✓	✓	✓	✓	(14.0)	(7.4)	4.3	

第27図 SD 02・03・06出土遺物



No.	遺構	層位	種類	備考	No.	遺構	層位	種類	備考
1	SI 05	煙道部	礫	磨痕、火を受けている	4	SD 06	埋土	砥石	
2	SD 01	埋土	砥石		5	SK 01	〃	硯	長さ7.8cm、幅(6.0)cm、高さ1.8cm
3	〃	〃	礫	磨痕、溝状のキズ有					

第28図 出土遺物（石製品）

SD07溝跡 C2区の南半、地山上で検出した。重複関係からSD08溝跡より新しい。方向は、発掘基準線に対して東で約63度南に偏している。確認できる長さは3.6mで、幅40~70cm、深さ10~20cmを計る。断面形は舟底形を呈する。埋土は、灰黄褐色粘土質シルトの単層である。遺物は、土師器杯、須恵器杯・壺・甕、灰釉陶器椀、円盤状土製品、不明鉄製品、石鏃が出土している。

SD08溝跡 C2区の南半、地山上で検出した。重複関係からSD07溝跡より古い。形態はL字状を呈し、長さ4.5m+3.5m、幅0.6~1.4mである。深さは10cm程であるが、南側ほど深くなつており約20cmを計る。埋土は、灰黄褐色粘土質シルトの単層であり、SD07溝跡のものと非常に近似している。遺物は、土師器杯、須恵器甕が出土している。

SD09溝跡 C2区の北東隅、東壁寄りのVI層上面で検出した。方向は、発掘基準線に対して東で約36度南に偏している。確認できる長さは2.0mで、幅50cm、深さ20cmを計る。埋土は、褐灰色粘土質シルトの単層である。遺物は、土師器杯、須恵器杯・甕が出土している。

SD10溝跡 C2区のほぼ中央、整地層上面で検出した。重複関係からSB01掘立柱建物跡、SK06土塙より古い。南側の残存状況が悪いので、形態については不明瞭であるが、おそらくはL字状を呈していたものと思われる。確認できる長さは5.5m、幅0.6~1m、深さ5~30cmを計る。底面は凹凸があり、壁はほぼ垂直に近く立ち上がる。埋土は、7層に分層されるが全体に良く似たシルトである。南から北へ堆積する自然埋没である。遺物は、土師器杯・高台付杯・甕（ロクロ使用と未使用のものがある）、須恵器杯・壺、円盤状土製品が出土している。

SD11溝跡 C2区の北東隅、VII層上面で検出した。方向は、発掘基準線に対して北で約73度東に偏している。西端はSI03竪穴住居跡の南西隅付近で立ち上がっている。確認できる長さは4.14m、上幅30~40cm、下幅10cmを計る。断面形は舟底形で、深さ20cmを計る。遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・甕が出土している。

SD12溝跡 C2区のほぼ中央、東壁近くの地山上で検出した。重複関係からSD10溝跡より古い。方向は、発掘基準線に対して北で約34度西に偏している。確認できる長さは2.25mで、幅30~40cm、深さ約10cmを計る。断面形は逆台形を呈する。埋土は、暗褐色シルトの単層である。遺物は、土師器杯・甕が出土している。

SD13溝跡 C2区のほぼ中央、整地層上面で検出した。方向は、南北両隣りに位置するSD08・10溝跡にほぼ一致する。確認できる長さは約2mで、幅30cm、深さ25cmを計る。底面は丸底気味で壁は緩やかに開く。埋土は、にぶい黄褐色シルトの単層で、地山ブロック、炭化物を多く含む。遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・甕が出土している。

SD14溝跡 C2区のほぼ中央、東壁ぎわの地山上で検出した小溝である。重複関係からSX03より新しい。確認できる長さは0.9mで、幅15cm前後、深さ3~5cmを計る。遺物は、土師器甕、須恵器杯・甕が出土している。

SD15溝跡 C₂区のS I 03竪穴住居跡、西隣りのⅦ層上面で検出した。重複関係からS A 02柱列跡、S I 03竪穴住居跡より古い。S I 03竪穴住居跡によって東への屈曲部が壊されており、形態については明確にできない。確認できる長さは2.0mで、幅20cm、深さ20cmを計る。断面形はU字形を呈する。埋土は、褐灰色粘土質シルトの単層である。遺物は出土していない。

(5) 土塙

SK01土塙 C₁区のS I 01竪穴住居跡の東側地山上で検出した。平面形は南北に長い不整形である。昨年度の試掘調査では若干の掘り下げにとどめていたが、今回の調査で深さ10～30cmを計り、底面は南から北へ傾斜していることが判明した。規模は、短軸1.25m、長軸は2.5mまで検出した。埋土は、3層に分けられ、西側から堆積していく自然流入土である。遺物は、土師器杯、須恵器杯・甕、赤焼き土器杯、平瓦、中世陶器擂鉢、硯が出土している。

SK02土塙 C₁区の東端北壁ぎわの地山上で検出した。一部調査区外に延びるが、平面形は東西方向の隅丸方形である。規模は長軸1.6m、短軸は0.7mまで検出した。深さは5～15cmを計り、西側のほうが残存状況が良い。埋土は、暗褐色シルトの単層である。遺物は、土師器杯・甕、須恵器が若干出土している。

SK03土塙 C₁区の東端北壁ぎわの地山上で検出した。一部調査区外へ延びるが、平面形は不整橈円形を呈するものと考えられる。確認した範囲では長軸1.4m、短軸0.9m、深さ10cmを計る。埋土は暗褐色粘土質シルトの単層である。遺物は、土師器杯、須恵器甕が若干出土している。

SK04土塙 C₁区の西側北壁ぎわSK 05土塙の埋土上で検出した。重複関係からSK 05土塙より新しい。平面形は略円形を呈し、径70cm、深さ15cmを計る。底面は地山であり、ほぼ平坦である。埋土は5層に分層されるが、全体的にみると黒褐色砂質シルト層が主体となっている。遺物は、土師器杯の破片が若干出土している。

SK05土塙 C₁区の西側北壁ぎわの地山上で検出した。重複関係からSK 04土塙より古い。平面形は不整形で、確認した範囲では長軸2.8m、短軸0.9m(最大)、深さ20cmを計る。底面は南から北へと傾斜している。埋土は、2層に分層されるが、いずれもにぶい黄橙色シルトである。遺物は出土していない。

SK06土塙 C₂区のほぼ中央VI層上面で検出した。重複関係からSB 01掘立柱建物跡、S D 10溝跡より新しい。平面形は不整方形を呈する。規模は長軸90cm、短軸65cm、深さ5～10cmを計る。遺物は、土師器杯・高台付杯・甕、須恵器杯・甕が出土している。

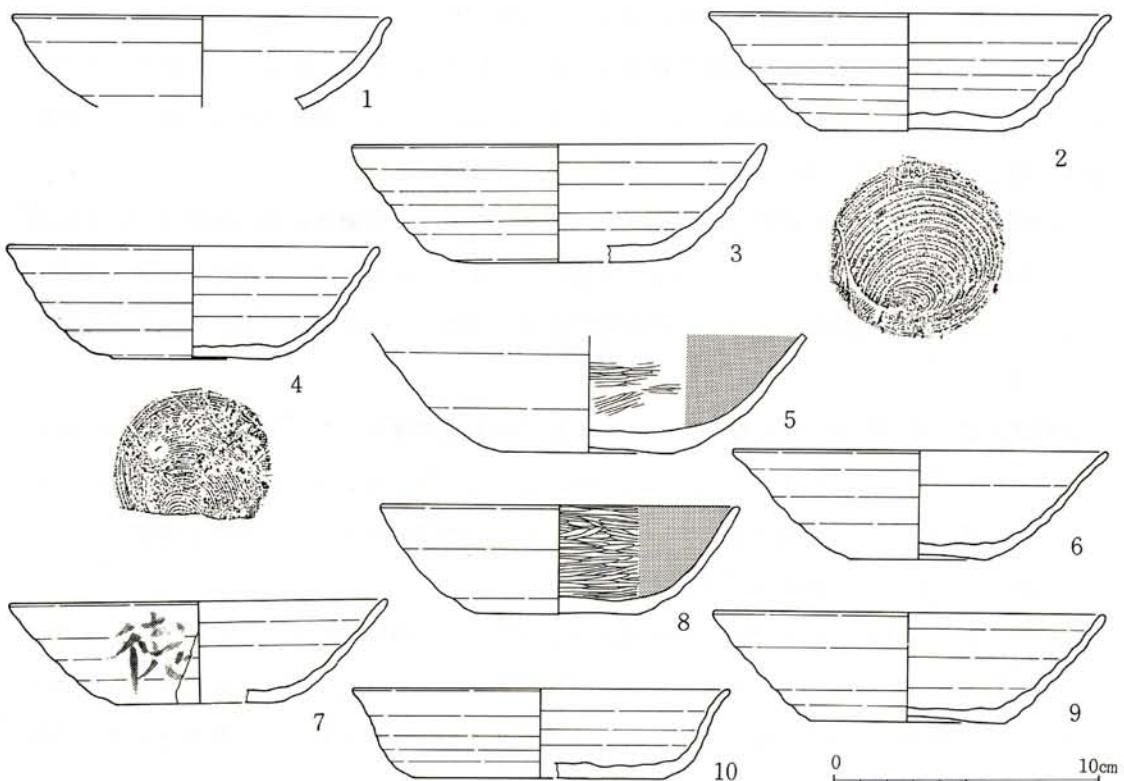
SK07土塙 C₂区の北半部西壁ぎわのS I 04竪穴住居跡埋土上面で検出した。重複関係からSD 06溝跡より古く、S I 04竪穴住居跡より新しい。平面形は不整形で、確認した範囲では長軸1.15m、短軸0.9m、深さ10～15cmを計る。埋土は、褐灰色砂質シルトの単層である。遺

物は、土師器甕、須恵器甕が出土している。

SK08土塙 C2区 のほぼ中央東壁寄りⅦ層上面で検出した。重複関係からSD06溝跡より古い。平面形は不整円形で、長軸1.15m、短軸0.85m、深さ約25cmを計る。底面は中央付近がやや壅み、壁は外反しながら立ち上がる。埋土は、灰白色砂質シルトの単層である。遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・壺・甕が出土している。

(6) 特殊遺構

SX01(A)・(B) C1区の東側で検出した土墨状遺構である。幅3mのトレンチ内での調査であったためその全容については不明である。重複関係からSD01溝跡より古い。土墨状遺構は(A)・(B)がほぼ平行する位置関係にあり、構築面はいずれも地山である。積土は、2層に大別される。下層がややしまりのある褐色シルトであるのに対して、上層はしまりに乏しいにぶい



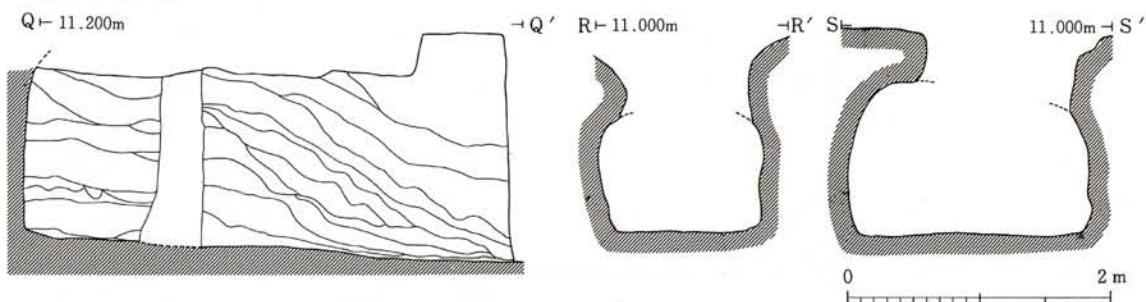
単位: cm () は推定値

No.	遺構	種類	器形	外面調整	内面調整	口 径	底 径	器高	備 考
1	SD07	灰陶器	碗	ロクロナデ	ロクロナデ	(14.6)			
2	々	須恵器	杯	ロクロナデ、底部回転糸切り	々	15.3	7.0	4.5	
3	SD08	々	々	々	々	(15.6)	(6.6)	4.5	
4	SD10	々	々	々	々	(14.0)	6.0	4.3	
5	SK01	土師器	々	々	ヘラミガキ・黒色処理	6.4			
6	々	赤焼き土器	々	々	ロクロナデ	(14.2)	5.3	4.1	
7	SK08	須恵器	々	々	々	(14.4)	(6.2)	3.9	外体部墨書「徳」か
8	々	土師器	々	々	ヘラミガキ・黒色処理	(13.6)	(6.1)	4.1	
9	々	須恵器	々	底部回転糸切り	ロクロナデ	(14.8)	(7.4)	4.2	
10	SX03	々	々	底部回転ヘラ切り	々	(14.4)	(9.6)	3.4	

第29図 遺構内出土遺物

黄褐色シルトである。遺物は出土していない。

SX02 C2区の南端西側削平断面で検出した地下式坑である。天井はすでに崩落しており、側壁と床面のみ検出された。方向は発掘基準線に対して東で約6度南に偏している。確認した範囲では削平面から約2.1mの所に玄門状の括れがあり、その奥には幅約2.3m、奥行き3.6mの長方形を呈する一室がある。さらに北側には、幅約1.7m、奥行き約1.5mの坑が付設されている。全体の長さは5.5mまで検出し、床面から天井部までの高さは約1.2m～1.5m位はあったと推定される。床面レベルは、西側がやや低いが、概ね水平になっている。その他、付属施設と見られるものは検出されなかった。埋土は、34層に細別されるが、基本的には褐色シルトと黄橙色の地山崩壊土が互層になるもので、その間に炭化物層が数枚介在している。堆積の仕方は東から西へと傾斜する自然埋没であり、30層以下は天井崩壊土と考えられる。遺物は、土師器、須恵器の細片と、骨片が若干出土しているが、直接遺構に伴うと思われるものは出土していない。



第30図 SX02実測図

SX03 C2区のほぼ中央東壁ぎわの地山上で検出した焼土遺構である。重複関係からSD14溝跡より古い。平面形は不整形を呈するが南端では溝状になる。規模は短軸約1m、長軸1.44mまで検出した。床面は北側に向かって傾斜しており、その一番低い北壁近くに焼土の集中する部分がある。また、その中央には焼石が検出された。埋土は、褐灰色砂質シルト層である。遺物は、焼土内から土師器杯・甕、須恵器杯・壺が出土している。

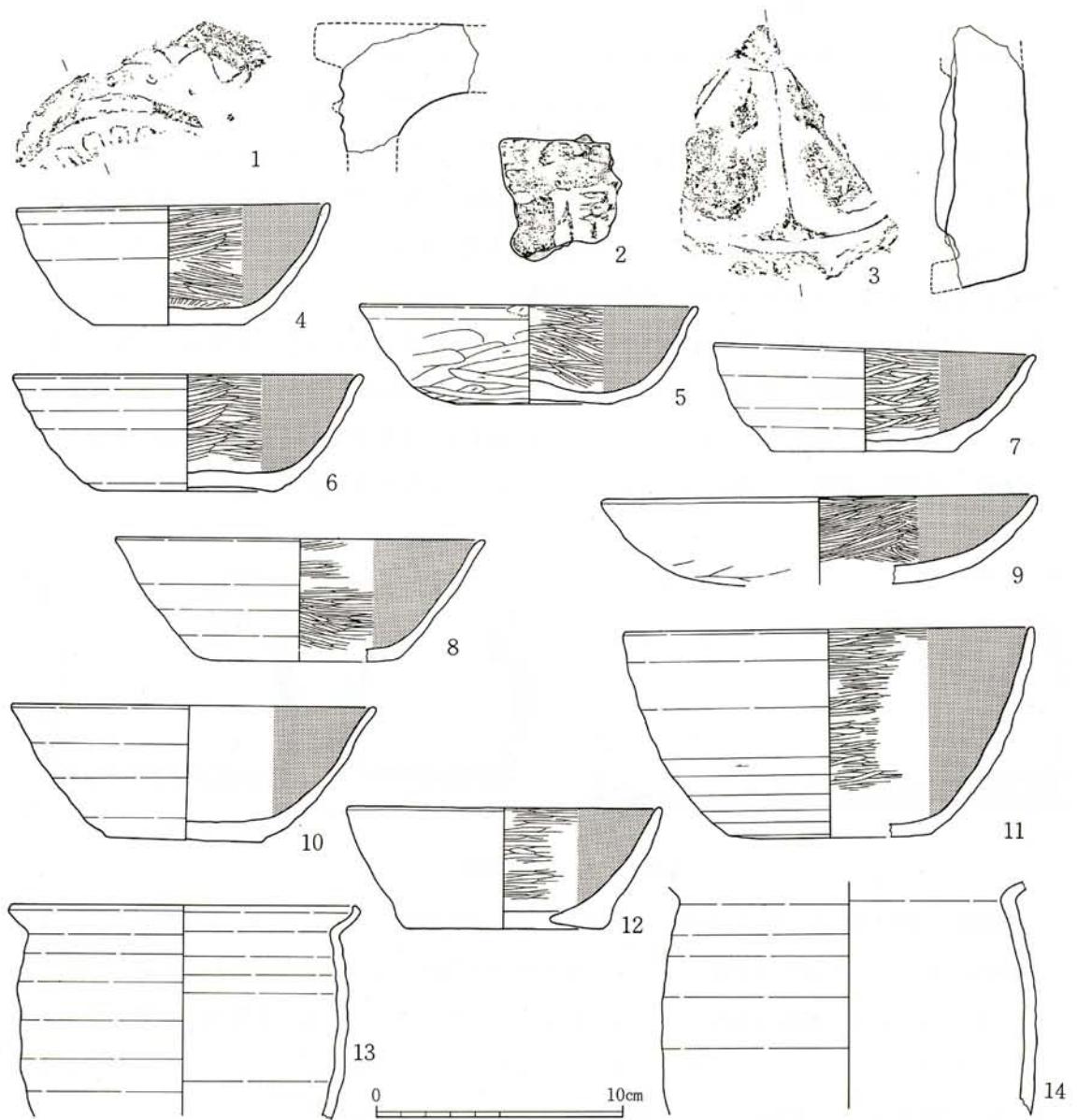
〈堆積層及び整地層出土遺物〉

I～VII層からは、土師器、須恵器、赤焼き土器、瓦、土製品、石製品、鉄製品等が出土しているがいずれも細片のものが多い。

I層（表土）には、近世以降の陶磁器、瓦等にまじって土師器、須恵器、古代の瓦がある。

II～VII層には、土師器杯・高台付杯・甕、須恵器杯・高台付杯・蓋・壺・甕があり、古代より新しい遺物は含まれない。

土師器杯には、製作技法にロクロ使用のものと、ロクロ未使用のものがある。VI・VII層では両者が混在しているが、ロクロ未使用のものの出土量はさほど多いとはいえない。V層からは、



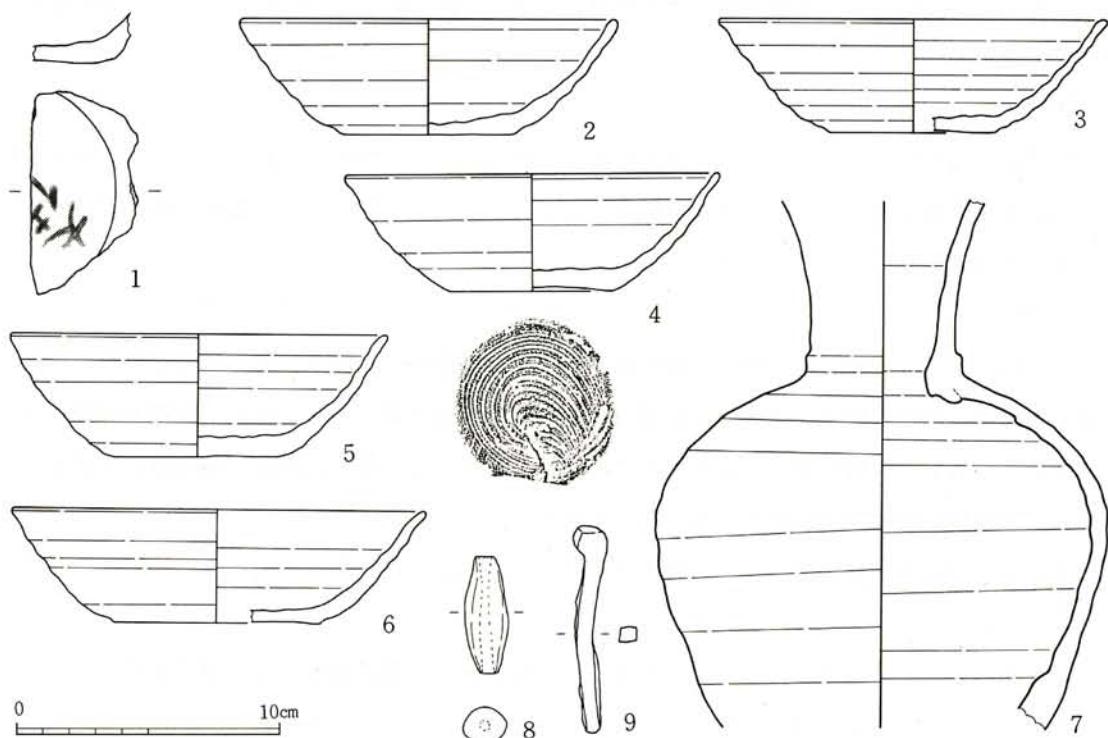
No.	層位	種類	器形	外 面 調 整	内 面 調 整	口径	底径	器高	備 考
1	I 層	軒丸瓦							細弁蓮花纹 刻印「伊」 重弁蓮花纹
2	IV 層	丸 瓦							
3	III 層	軒丸瓦							
4	タ	土師器	杯	ロクロナデ、底部回転糸切り	ヘラミガキ・黒色処理	12.8	6.2	4.9	
5	IV 層	タ	ク	ク 体～底部→手持ちヘラケズリ	ク	13.8	6.3	3.0	
6	タ	タ	ク	ク 底部回転糸切り	ク	13.0	7.6	4.4	
7	V 層	タ	ク	ク	ク	(14.2)	7.0	4.8	
8	タ	タ	ク	ク	ク	(15.0)	(8.4)	5.0	
9	タ	タ	ク	ク 体～底部ヘラケズリ	ク	(17.6)			ロクロ未使用
10	整地層	タ	ク	ロクロナデ、底部回転糸切り	ク	(14.8)	6.4	5.5	
11	Ⅳ 層	タ	ク	ロクロナデ、体部回転ヘラケズリ	ク	(16.6)	(8.2)	8.5	
12	タ	タ	ク	磨滅しており調整不明	ク	(12.8)	(8.0)	4.9	ロクロ未使用
13	V 層	斐	ロクロナデ		ロクロナデ	(14.0)			
14	タ	タ	ク		ク				

第31図 堆積層・整地層出土遺物(1)

らは、大半がロクロ使用のものに変わり、Ⅲ層においてはさらに赤焼き土器が加わってきている。甕についてもほぼ同様な傾向が見られる。

須恵器杯についても、ほとんどが破片のため大まかな傾向しか知ることができないが、Ⅶ層では底径に比して器高が低く、多少丸底気味の器形のものが出土している。Ⅳ層より上層では、口径に比して底径の小さいもので、底部が回転糸切り無調整のものが大半を占めている。

整地層からは、土師器杯・高台付杯・甕、須恵器杯・壺・甕・円盤状土製品、瓦が出土している。土師器については、ロクロ使用のものが多いが、他には、これといった特徴は指摘できない。



単位:cm ()は推定値

No.	層位	種類	器形	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	備考
1	I層	須恵器	杯	ロクロナデ、底部回転ヘラ切り	ロクロナデ				外底部墨書「大□」
2	IV層	々	々	々 底部回転糸切り	々	(14.4)	6.4	4.4	
3	々	々	々	々	々	(14.3)	(6.2)	4.3	
4	V層	々	々	々	々	(14.2)	6.2	4.5	
5	々	々	々	々	々	(14.4)	6.4	4.6	
6	々	々	々	々	々	(15.6)	(7.8)	4.3	
7	々	々	壺	ロクロナデ、肩部回転ヘラケズリ	々				
8	IV層	土製品	土錐	全体に磨滅					長さ 4.4 cm、幅 1.6 cm
9	々	鉄製品	釘						

第32図 堆積層・整地層出土遺物(2)

3. D地区

本地区は、本年度新たに調査対象地区とした場所である。調査区は地形に沿って3ヶ所に設定し、東よりD1区、D2区、D3区とした。なお、D1区では遺構は検出されておらず、遺物についてもその出土量はごくわずかである。

〈地形と基本層位〉

D地区は全調査地区の西端にあり、丘陵部が沖積部に移行する西斜面に位置する。この斜面は、D1区では比較的急な落ちをみせるが、D2区からD3区にかけては緩やかな傾斜となっている。調査区全域には盛土が厚く堆積し、D2・D3区では盛土の下に厚さ30~40cmの旧水田耕作土が分布している。なお各調査区の堆積層については対応関係が不明なため、ここでは各区ごとに説明することにする。

D1区

堆積層は3層確認されている。いずれも地山の傾斜に沿って堆積しており、厚さ10~20cmを計る。I・II層は地山ブロックを含む褐色ないし黒褐色シルト層である。III層は黄褐色粘土質シルト層である。

D2区

D1区と同じ丘陵斜面に位置する。地山面での比高差は約50cm程度で、その傾斜は緩やかである。I層は旧水田耕作土であるが、II層以下は全て遺物包含層である。なお、調査区西壁付近において、III層がIV層を切って落ち込むことを確認した。この落ち込みは、地山面まで到達しており部分的に畦畔状の区画を作るところもある。

Ia層 旧水田耕作土である。調査区全域に10~25cmの厚さでほぼ水平に堆積している褐灰色シルト層である。

IIa層 調査区の北半部に分布し、厚さ5~20cmを計る灰褐色砂質シルト層である。

IIb層 調査区北半部ほぼ全域にその分布がみられる。下層の傾斜に沿って堆積しているため、西側では厚く堆積している。若干粘性が認められる黒褐色シルト層で、厚さ約10~50cmを計る。

IIc層 調査区南半部に分布し、ほぼ水平に堆積している。黒褐色シルト層で、厚さ約20cmである。

IIIa層 調査区西半部に分布し、西側に向けて徐々に傾斜しながら堆積している。地山粒を含む黒褐色粘土質シルト層で、厚さ15~30cmを計る。

IIIb層 IIIa層とほぼ同じ箇所に分布する。灰白色火山灰を斑状に含む黒褐色シルト層で、厚さ約15cmを計る。

IV層 調査区西壁付近を除く全域に分布する。一部地山直上にあり、傾斜に沿って堆積して

いる。灰黄褐色粘土質シルト層で、厚さ15~30cmを計る。

V層 調査区北半部の地山直上に分布し、ほぼ水平に堆積している。黒褐色粘土質シルト層で、厚さ約7~20cmである。

なお、地山層中には、堆積時に流れ込んだと思われる自然礫が、主に東半部に集中して認められた。

D3区

D3区は周囲の水田面より一段高いレベルに位置し、ほぼ平坦面を呈している。なお、D2区で検出した包含層は検出されなかった。

I層 調査区全域を覆う旧水田耕作土で、ほぼ水平に堆積している。酸化鉄斑を含む褐灰色シルト層で、厚さ10~20cmを計る。

II層 調査区全域に分布する旧水田耕作土で、ほぼ水平に堆積している。黒褐色砂質シルト層で、厚さ約20cmを計る。

IIIa層 調査区のほぼ全域に分布する。若干しまりのある黒褐色シルト層で、北側に向けて徐々に厚さを増している。厚さ10~20cmを計る。

IIIb層 調査区の北半部に分布し、ほぼ水平に堆積している。酸化鉄斑を含む黒色シルト層で、厚さ2~10cmを計る。

IIIc層 調査区北半部に分布し、水平に堆積している。粘性、しまりの強い黒色粘土質シルト層で、厚さ約4cmを計る。

IV層 調査区北半部の東側に分布する粘性の強い黒褐色シルト層である。ほぼ水平に堆積するが、東側に向かうほどその厚さを増している。

V層 調査区の南半部に分布し、ほぼ水平に堆積している。粗い砂を主体とする褐色砂層で、厚さ約5cmを計る。この面より、灰白色火山灰を含む溝跡を検出している。

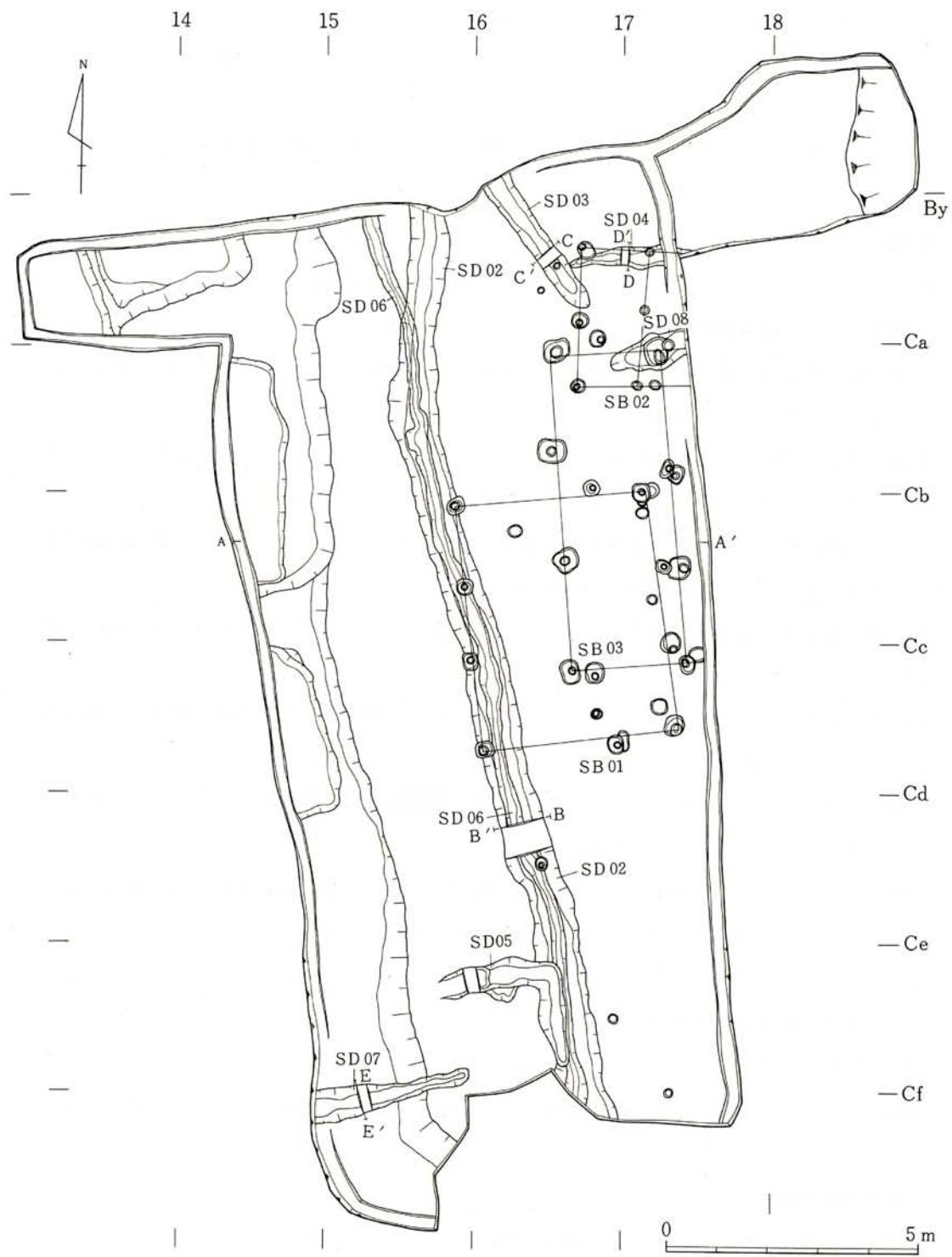
VI層 調査区のほぼ全域に分布する。マンガン性を含む粗い砂粒を主体とする明褐色砂層である。SD16・17溝跡の検出面である。

〈発見遺構と遺物〉

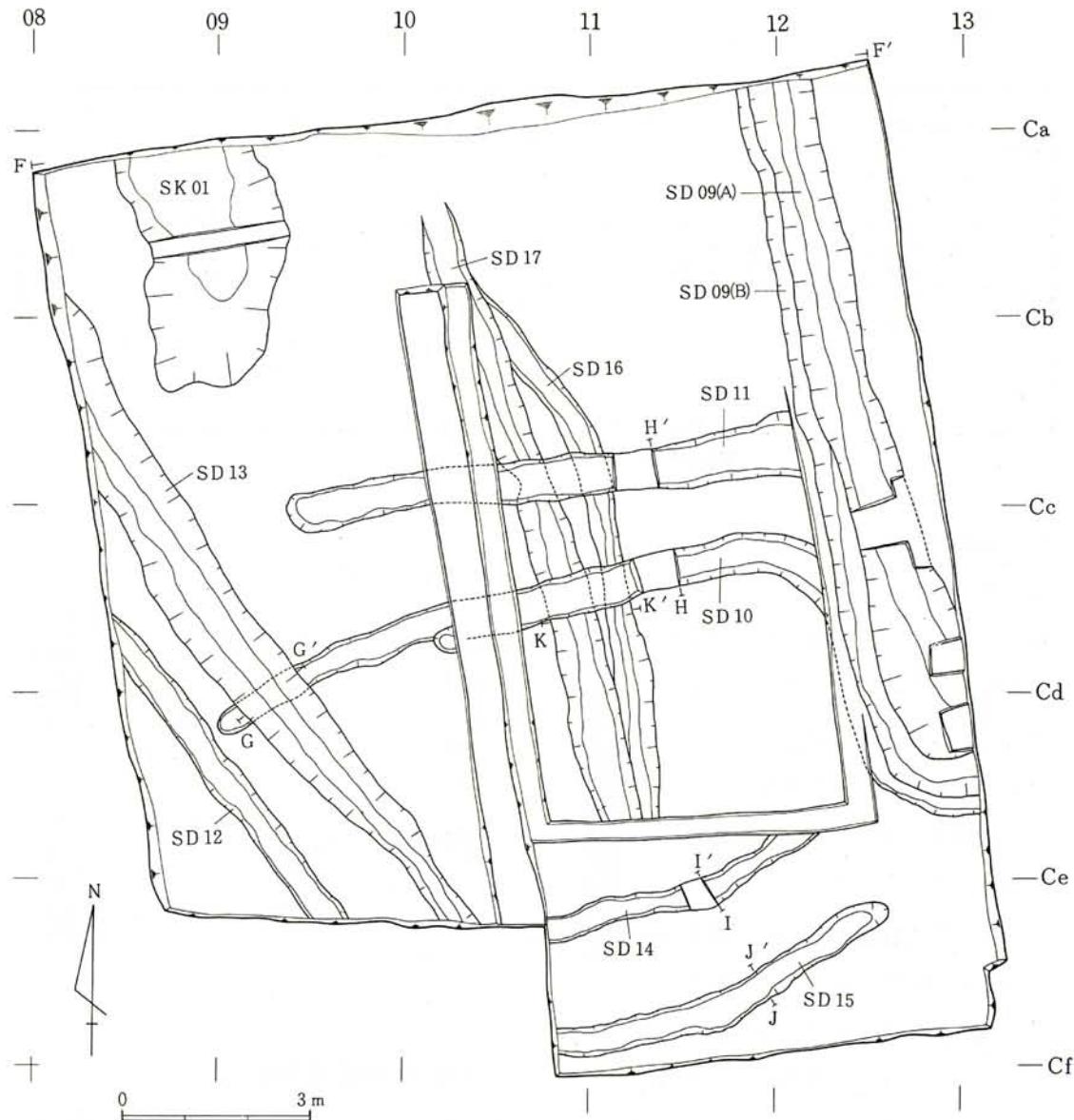
本地区で検出した遺構は、掘立柱建物跡3棟、溝跡17条、土塙1基、小柱穴、畦畔状遺構である。

(1) 掘立柱建物跡

SB01掘立柱建物跡 D2区中央部東側の地山上で検出した東西2間、南北3間の南北棟掘立柱建物跡である。SB03建物跡、SD02溝跡と重複関係にあり、これらより新しい。建物の方向は、西側柱列でみると北で約7度西に偏している。桁行は、西側柱列でみると南より1.61m・1.75mで総長4.97mを計り、梁行は北妻では2.76m・1.62mで総長4.37mである。特に四隅の

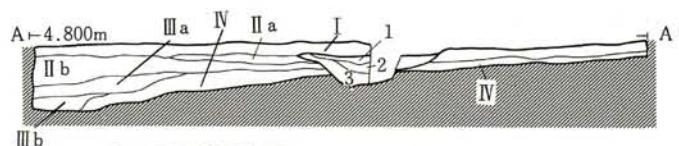


第33図 D₂区遺構配置図

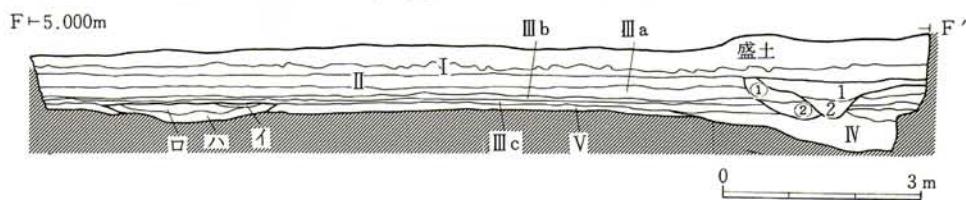


第34図 D3区遺構配置図

D2区堆積層東西セクション図



D3区堆積層東西セクション図



	層位	土 色	備 考		層位	土 色	備 考
D ₂ 区堆積層東西セクション							
堆積層	I	7.5YR ½ 褐灰色			III a	10YR ½ 黒褐色	酸化鉄斑を含む
	II a	7.5YR ½ 灰褐色	砂質		III b	10YR ½ 黒色	〃
	II b	10YR ½ 黒褐色	黑色土粒を含む		III c	10YR ½ 黒色	粘土質
	III a	10YR ½ 暗褐色	粘土質 地山粒を含む		IV	10YR ½ 黑褐色	〃
	III b	10YR ½ 黑褐色	酸化鉄斑、灰白色火山灰を含む		V	10YR ½ 褐灰色	砂 酸化鉄斑を含む
	IV	10YR ½ 灰黄褐色	粘土質 酸化鉄斑を含む				
S D 01	1	10YR ½ 灰黄褐色			S D 09(A)	1 10YR ½ 黑褐色	酸化鉄斑を含む
	2	10YR ½ 暗褐色				2 10YR ½ 灰黄褐色	砂質
	3	10YR ½ 黑褐色			S D 09(B)	① 10YR ½ 黑褐色	酸化鉄斑を含む
D ₃ 区堆積層東西セクション							
堆積層	I	10YR ½ 褐灰色	酸化鉄斑、砂粒を含む		S K 01	イ 10YR ½ 黑褐色	砂質 酸化鉄斑を含む
	II	10YR ½ 黑褐色	砂質 酸化鉄斑を含む			ロ 10YR ½ 灰黄褐色	〃
						ハ 7.5YR ½ 灰褐色	〃 酸化鉄斑を含む

第35図 D₂・D₃区堆積層セクション図

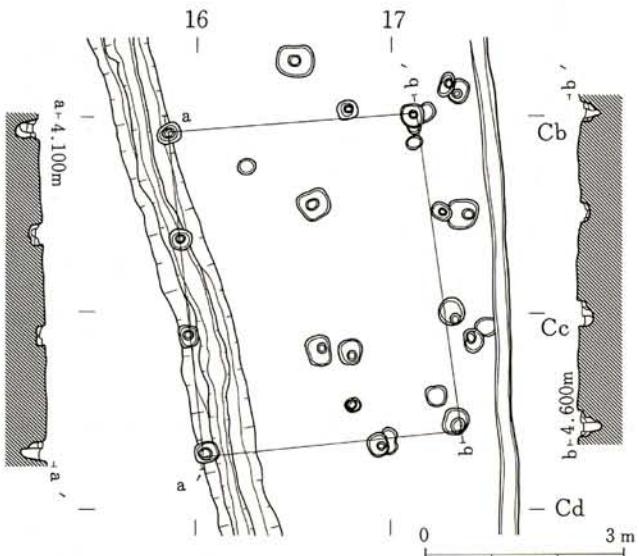
柱穴が他のものより一段深く掘り込まれているのが特徴となっている。柱穴は径30~40cmの楕円形や隅丸方形を呈するものなどがあり、一様ではない。柱痕跡は径15~20cmである。埋土は黒褐色シルトを主体としている。遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・甕が出土している。

SB02掘立柱建物跡 D₂区北東部の地山上で検出した掘立柱建物跡である。重複関係からS D 04溝跡より新しい。また、SB 03建物跡とも重複

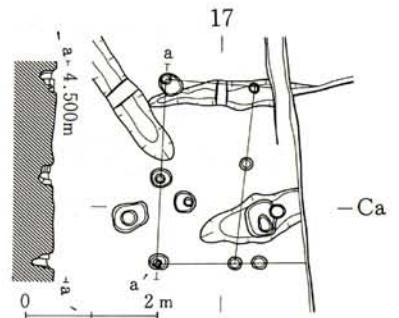
しているが、直接の切り合いを有していないため新旧関係は不明である。南北2間、東西1間を検出しているが、東西についてはさらに東側で調査区外に延びる可能性が強い。建物の方向は北で約3度東に偏している。柱間は、西側柱列で南より1.

30m・1.52mで総長2.82m、北側柱列では1.36mを計る。柱穴は径30~40cmのものと、径約15cmのものがあり、いずれも略円形を呈している。前者には、径約15cmの柱痕跡が認められる。掘り方埋土は、下層に褐灰色シルト層が堆積し、上層には灰黄褐色シルト層がみられる。下層は上層に比べ粘性が強く、地山粒を含んでいる。遺物は出土していない。

SB03掘立柱建物跡 D₂区北東部の地山上で検出した掘



第36図 SB01実測図



第37図 SB02実測図

立柱建物跡である。S B 01建物跡と S D 08溝跡と重複関係にあり、これらより古い。また、S B 02建物跡とも重複があるが、直接切り合ひが認められないため、新旧関係は不明である。東西1間、南北3間を検出したが、これから建物を復元した場合、極端に長いものになってしまうため、南北3間、東西2間以上の総柱建物跡と考えておきたい。建物の方向を西側柱列でみると、北で約4度西に偏している。柱間は、西側柱列では南より1.84m・1.87m・2.41mで総長6.11m、北側柱列では2.27mを計る。柱穴は、50×60cmのものや、30×40cmのものなどがあり、その形状も隅丸方形、不整形と様々である。柱痕跡は、ほぼ径20cm前後を計る。掘り方埋土は、地山粒を含んだ褐灰色シルト、黄褐色シルトが主体となっている。遺物は出土していない。

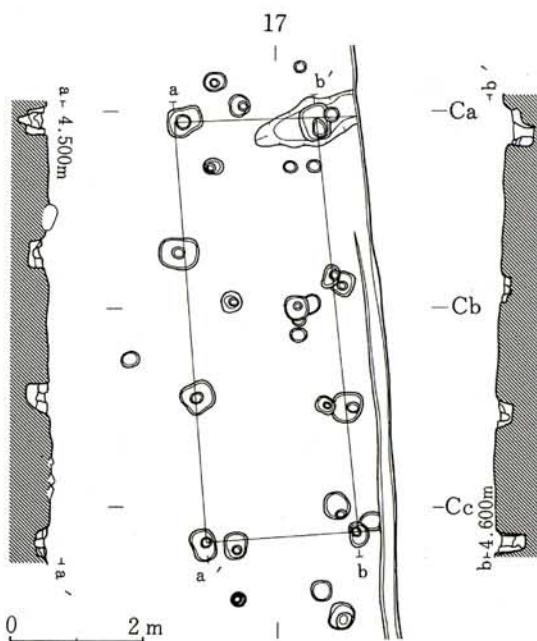
(2) 溝跡

SD01溝跡 D 2 区中央部のⅡ層上面で検出した南北溝である。確認できる長さは18mで、上幅0.9～1.2m、下幅30～40cm、深さ45cmを計る。方向は発掘基準線に対し、北で約30度西に偏している。埋土は、上層から灰黄褐色・暗褐色・黒褐色シルトの3層に分けられる。遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・甕、近世以降の陶磁器が出土している。

SD02溝跡 D 2 区中央部の地山上で検出した南北溝である。重複関係より、S B 01建物跡、S D 05溝跡よりも古く、SD 06溝跡よりも新しい。確認できる長さは18mで、上幅約90cm、下幅約50cm、深さ約20cmを計る。埋土は灰黄褐色・褐灰色シルトの2層に大別される。遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・壺・甕、瓦が出土している。

SD03溝跡 D 2 区北側の地山上で検出した南北溝である。SD 04溝跡と重複関係にあり、これより新しい。確認できる長さは3.2mで、上幅約50cm、深さ約10cmを計る。埋土は灰黄褐色シルトと褐灰色シルトの2層に分けられ、ともに地山粒を含むのが特徴である。遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・壺・甕が出土している。

SD04溝跡 D 2 区北東コーナー部の地山上で検出した東西溝である。S B 02建物跡、S D 03溝跡と重複関係にあり、これらより古い。確認できる長さは1.9mで、上幅約40cm、下幅約10cm、深さ約10cmである。埋土は灰黄褐色シルトの単層である。遺物は土師器杯・甕、須恵器



第38図 SB 03実測図

杯・高台付杯・蓋が出土している。

SD 05溝跡 D 2 区南西部の地山上で検出したほぼ直角に屈曲する溝跡である。SD 02・06溝跡と重複関係にあり、これらより新しい。確認できる長さは東西 2.5m 以上、南北 2.13m で、上幅 50~60cm、下幅 20~40cm、深さ約 8cm である。埋土は褐灰色シルトの単層である。遺物は土師器甕、須恵器杯が出土している。

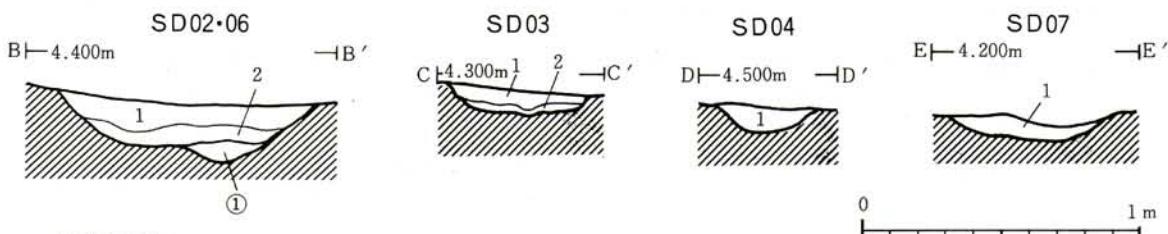
SD 06溝跡 D 2 区中央部を南北に走る溝跡で、SD 02溝跡を完掘した後に検出された。確認当初の所見では、SD 02溝跡の埋土の一部と見て、この溝跡が段掘りを呈するものと考えたが、調査区の北端で SD 02溝跡と異なった方向を取るために、重複関係のある溝跡と理解した。確認できる長さは 22m で、上幅 20~30cm、下幅 5~10cm、深さ約 8cm を計る。埋土は地山ブロックを含む灰色シルトの単層である。遺物は出土していない。

SD 07溝跡 D 2 区南西部西側斜面の地山上で検出した東西溝である。確認できる長さは 3.2m で、上幅 約 60cm、下幅 約 30cm、深さ 約 10cm を計る。埋土は褐灰色シルトの単層である。遺物は、須恵器杯が出土している。

SD 08溝跡 D 2 区北東部の地山上で検出した東西溝である。SB 03建物跡と重複関係にあり、これより新しい。確認できる長さは 1.6m で、上幅 約 80cm、下幅 約 60cm、深さ 約 10cm である。埋土は、黄褐色シルトの単層である。遺物は出土していない。

SD 09(A)溝跡 D 3 区東側 II 層上面で検出した。SD 09(B)溝跡とほぼ同じ位置で重複しており、これより新しい。本溝跡は南端付近で屈曲し、南北方向から東西方向に向きを変えている。確認できる長さは 11m で、下幅 約 40cm、深さ 約 50cm を計る。上幅については、北壁断面で観察すると約 2.5m もある。埋土は 2 層に大別され、上層は黒褐色シルトを主体とし、下層は砂層となっている。遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・壺・甕、瓦が出土している。

SD 09(B)溝跡 D 3 区東側 II 層上面で検出した。(A)溝跡に大半が壊されており、形態については不明確であるが、(A)溝跡とほぼ同じ位置で東西方向に向きを変えている。確認できる長さは約 12m で、深さ 約 60cm を計る。埋土は 2 層に分けられるが、黒褐色シルトを主体としている。



土層観察表

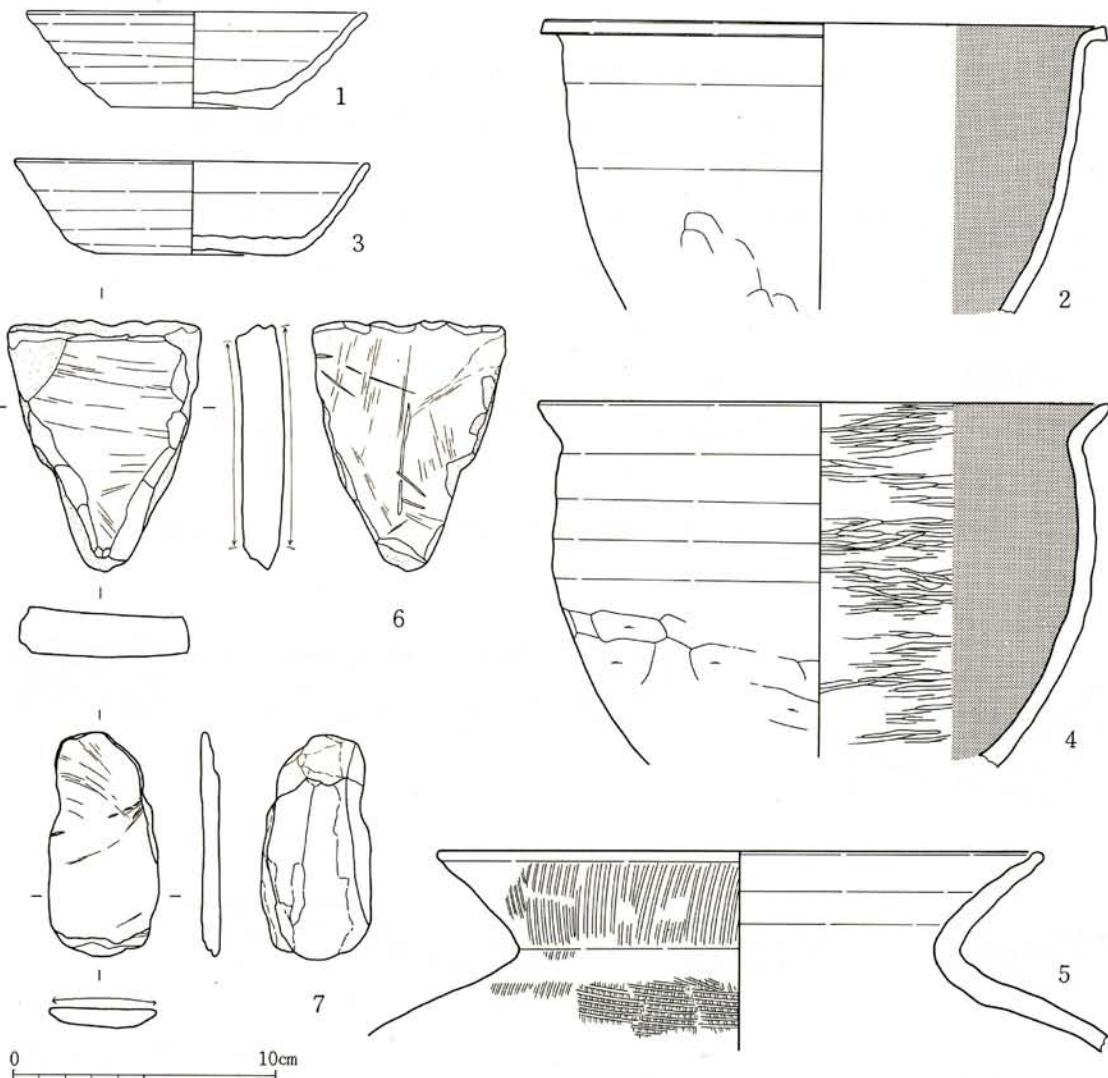
遺構	層位	土 色	備 考	遺構	層位	土 色	備 考
SD 02	1	10YR ½	灰黃褐色	SD 03	1	10YR ½	灰黃褐色
	2	10YR ¾	褐色		2	10YR ¾	褐灰色
SD 06	①	10YR ¾	灰色	SD 04	1	10YR ½	灰黃褐色
			地山ブロックを含む	SD 07	1	10YR ¾	褐灰色
			酸化鉄斑を含む				酸化鉄斑、マルガン粒を含む

第39図 D 2 区溝跡セクション図

遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・壺・甕、古銭（寛永通宝）が出土している。

SD10溝跡 D3区南半分のV層上面で検出した。この溝跡は東西方向に向きをとり、SD09(B)溝跡付近にくると蛇行し、調査区外へと延びている。確認できる長さは約10mで、上幅約60cm、下幅約30cm、深さは15cmを計る。埋土は3層に分けられ、1層には灰白色火山灰がブロック状に含まれている。遺物は出土していない。

SD11溝跡 D3区V層上面で検出した。この溝跡は確認した範囲では、SD10溝跡とほぼ



単位：cm ()は推定値

No.	遺構	種類	器形	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	備考
1	SD01	須恵器	杯	ロクロナデ、底部回転ヘラ切りのちナデ	ロクロナデ	13.0	6.2	3.7	
2	々	土師器	甕	ロクロナデ、体部下半ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	(21.4)			
3	SD02	須恵器	杯	ロクロナデ、底部回転ヘラ切り	ロクロナデ	13.5	7.3	3.5	火ダスキ痕
4	SD04	土師器	甕	ロクロナデ、体部下半ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	21.7			
5	SD02	須恵器	々	平行叩き目、頸部ロクロナデ	ロクロナデ・体部ナデ	(22.9)			
6	SD09	加工土器片		平行叩き目、研磨	平行線状当て板痕、研磨				須恵器甕体部 一部打ち欠き擦痕
7	SD01	砥石							

第40図 溝跡出土遺物

並行して走り、さらにSD 09(A)溝跡の東側で検出されなかったことより、ほぼSD 10溝跡と同様に蛇行するものとみられる。確認できる長さは約8.5mで、上幅約50cm、下幅約10cm、深さ約10cmを計る。埋土は灰白色火山灰を含む黒褐色シルトである。遺物は須恵器杯が出土している。

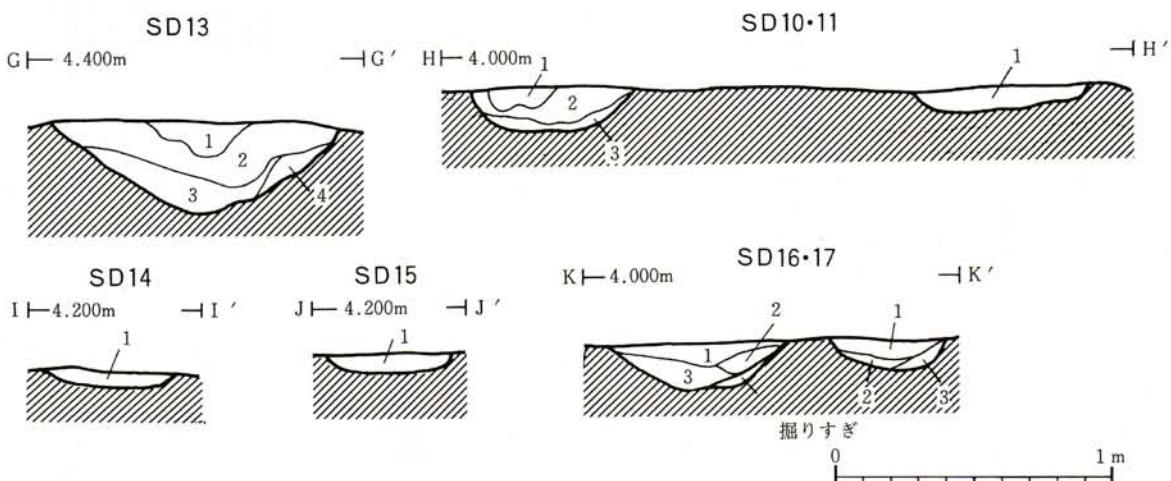
SD 12溝跡 D 3区南西隅の地山上で検出した。方向は、発掘基準線に対して北で37度西に偏している。確認できる長さは5.5mで、上幅50~60cm、下幅20~40cm、深さ5~10cmを計る。埋土はⅢ層に近いシルト層である。遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・壺・甕が出土している。

SD 13溝跡 D 3区西半部Ⅲ層上面で検出した。方向は発掘基準線に対して北で37度西に偏している。確認できる長さは約10mで、上幅約1.1m、下幅約30cm、深さ約35cmを計る。埋土は3層に分けられ、いずれも砂質シルトを主体としている。遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・甕、灰釉陶器が出土している。

SD 14溝跡 D 3区南半部のV層上面で検出した東西溝である。確認できる長さは2.5mで、上幅約50cm、下幅約25cm、深さ5cmを計る。埋土は灰白色火山灰と酸化鉄斑を含む黄褐色シルト層である。遺物は須恵器杯が出土している。

SD 15溝跡 D 3区南壁際のV層上面で検出した東西溝である。SD 14溝跡とほぼ同一形態で、埋土も同じである。確認できる長さは2.8mで、上幅約45cm、下幅約25cm、深さ6cmを計る。遺物は出土していない。

SD 16溝跡 D 3区中央部VI層上面で検出した南北溝である。SD 17溝跡と重複関係にあり、



造構	層位	土色	備考	造構	層位	土色	備考
SD 13	1	7.5YR 1/2 褐色	砂質	SD 14	1	10YR 1/2 黄褐色	灰白色火山灰、酸化鉄斑を含む
	2	7.5YR 1/2 灰褐色	〃		2	10YR 1/2 黄褐色	灰白色火山灰ブロック、酸化鉄斑を含む
	3	7.5YR 1/2 褐灰色	〃		3	10YR 1/2 黄褐色	砂
	4	7.5YR 3/4 黒褐色	粘土質				〃
SD 10	1	10YR 1/2 灰褐色	灰白色火山灰をブロック状に含む	SD 15	1	10YR 1/2 黑褐色	〃
	2	10YR 1/2 黑褐色	酸化鉄斑、粗い砂粒を含む		2	10YR 1/2 黄褐色	〃
	3	10YR 1/2 黑褐色	地山細粒、粗い砂粒を含む		3	10YR 1/2 黄褐色	〃
SD 11	1	10YR 1/2 黑褐色	灰白色火山灰をブロック状に含む	SD 17	1	10YR 1/2 黄褐色	
					2	10YR 1/2 黄褐色	
					3	10YR 1/2 黄褐色	

第41図 D 3区溝跡セクション図

これより古い。確認できる長さは5mで、上幅約70cm、下幅約20cm、深さ約15cmを計る。埋土は黄褐色の粗砂が主体となっている。遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・壺・甕が出土している。

SD17溝跡 D3区の中央部VI層上面で検出した南北溝である。SD16溝跡と重複し、これより新しい。確認できる長さは4.5mで、上幅約40cm、下幅約10cm、深さ約10cmを計る。埋土はSD16溝跡と類似した粗い砂が主体となっている。遺物は須恵器甕が出土している。

(3) 土塙

SK01土塙 D3区北壁際のIV層上面で検出した。規模は長軸3.85m以上、短軸2.25m、深さ10cmを計る。平面形は南北に長い不整形である。壁は底面よりゆるやかに立ち上がっている。埋土は黒褐色・灰黃褐色・灰褐色砂質シルトの3層に分けられる。遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・甕が出土している。

〈堆積層出土の遺物〉

D2区

II～V層の包含層からは、土師器、須恵器、赤焼き土器、灰釉陶器、瓦、円盤状土製品、古銭、鉄製品が出土している。このうち、特にII・III層からの出土量が多い。なお、層位ごとに遺物の取り上げを行なっているが、そこには特徴的な違いが見い出せなかつたことから、ここでは器種に主眼をおいて説明していくことにする。

(1) 土師器

土師器は杯、高台付杯、甕の器種が認められる。その中でも杯と甕の出土量が多く、他はわずかである。

〈杯〉 製作技法により、ロクロ未使用のものと、ロクロ使用のものに分けられる。前者については出土量がわずかで、図示できたものはIII層から出土の1点だけである(第43図3)。平底気味の底部をもち、体部が内弯して立ち上がる小形のものである。外面は体部から底部にかけてヘラケズリを施し、内面はヘラミガキ・黒色処理を施している。後者については、全て内面にヘラミガキ・黒色処理を施している。底部が回転糸切り無調整のものが多く認められる。

〈高台付杯〉 図示できたものは、III層から出土した1点だけである(第43図4)。体部が内弯気味に立ち上がり、口縁部でやや外反するものである。底部には回転糸切り痕が認められる。

〈甕〉 ロクロ未使用のものと、ロクロ使用のものがある。前者は出土量がごくわずかで、図示できたものは1点だけである(第43図2)。体部中頃より上を欠損しているため、全体の器形は不明である。外面にはヘラケズリ、内面にはハケメの後ヘラナデが施されている。後者については、出土量は多いが大部分が破片のため、図示できたものは2点と少ない。両者とも口径より器高が小さく、口縁部が「く」の字形に短く屈曲するものである。第43図1は体部下半にヘラケズリが施されており、第42図9は底部に回転糸切り痕が認められる小形のものである。

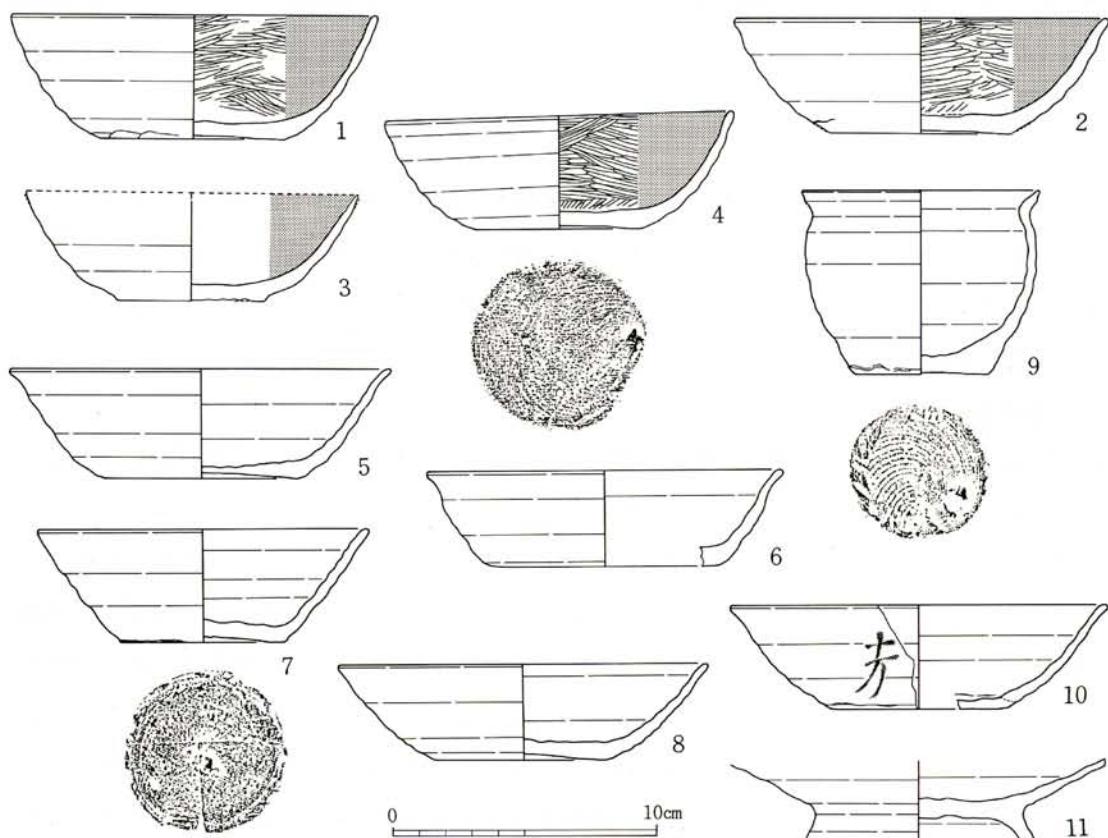
(2) 須恵器

須恵器には杯、高台付杯、壺・甕の器種が認められる。特に杯と甕の出土量が多い。

〈杯〉 ロクロからの切り離し・調整技法によって4種類に分類できる。このうちD類の出土量が最も多く、C類がこれに次ぐ。両者を合わせると、杯全体の出土量の約9割を占める。

A類：回転ヘラケズリ調整を底部全面から体部下半にかけて施しており、切り離し痕跡が残らないもの（第43図9）。

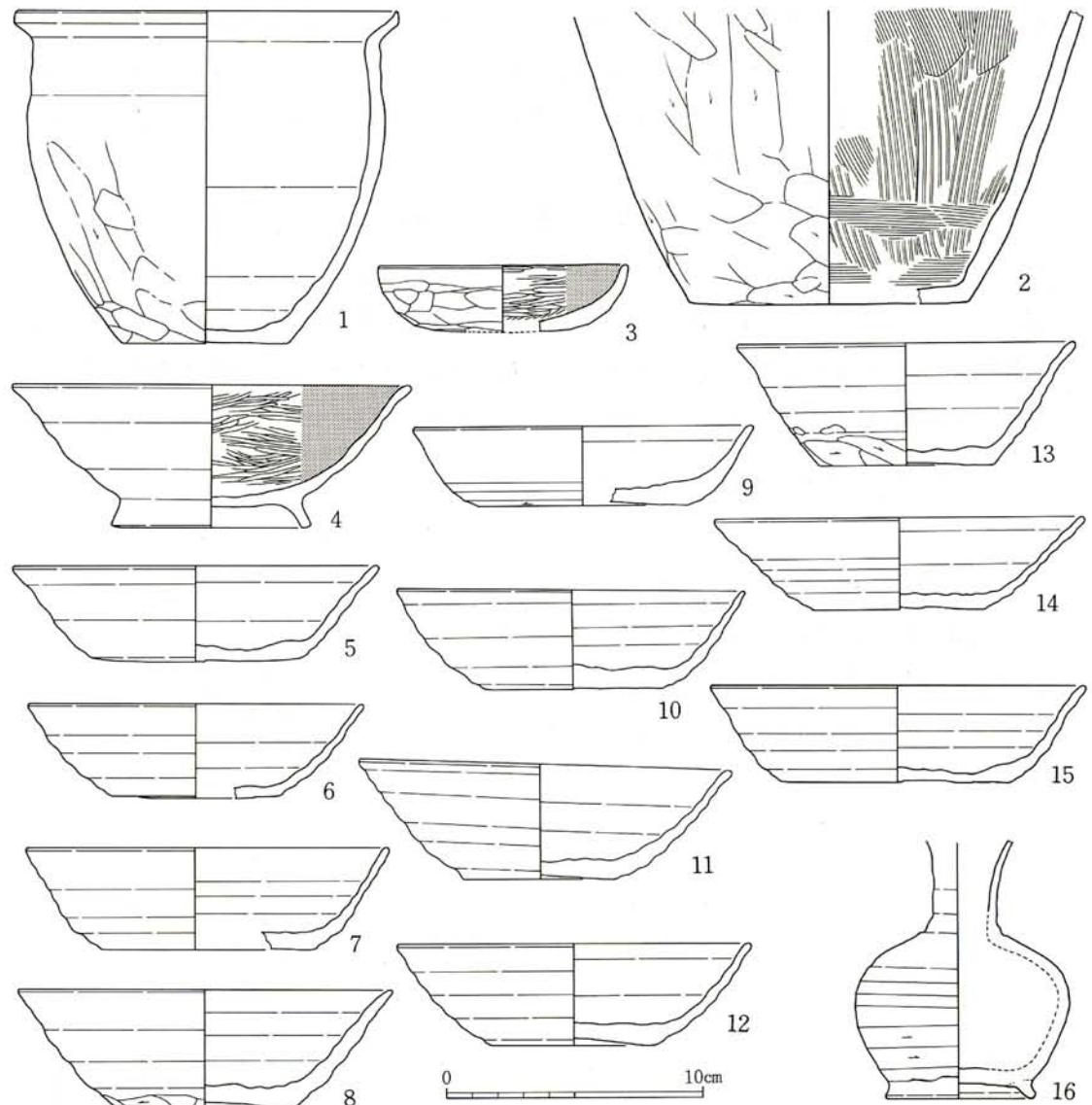
B類：手持ちヘラケズリ調整を底部全面から体部下半にかけて施しており、切り離し痕跡が残らないもの（第43図13）。



単位：cm () は推定値

No.	層位	種類	器形	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	備考
1	I層	土師器	杯	ロクロナデ 感籠 回転糸切り、手持ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	(14.0)	(7.1)	4.1	
2	フ	フ	フ	フ	フ	(14.2)	(6.8)	4.4	
3	フ	フ	フ	フ	フ	(12.7)	(5.6)	4.1	
4	II層	フ	フ	フ	フ	13.3	6.3	4.3	
5	I層	須恵器	フ	フ	ロクロナデ	(14.5)	(7.4)	4.2	
6	フ	フ	フ	フ	フ	(13.6)	(8.7)	(3.7)	
7	II層	フ	フ	フ	フ	(12.6)	6.2	4.3	
8	フ	フ	フ	フ	フ	(14.1)	(6.8)	3.7	
9	フ	土師器	小型甕	フ	フ	(9.0)	5.2	7.0	
10	フ	須恵器	杯	フ	フ	(14.3)	(6.7)	4.0	外体部墨書
11	I層	赤焼き土器	高台付皿	フ	フ				

第42図 D2区堆積層I・II層出土遺物



単位: cm ()は推定値

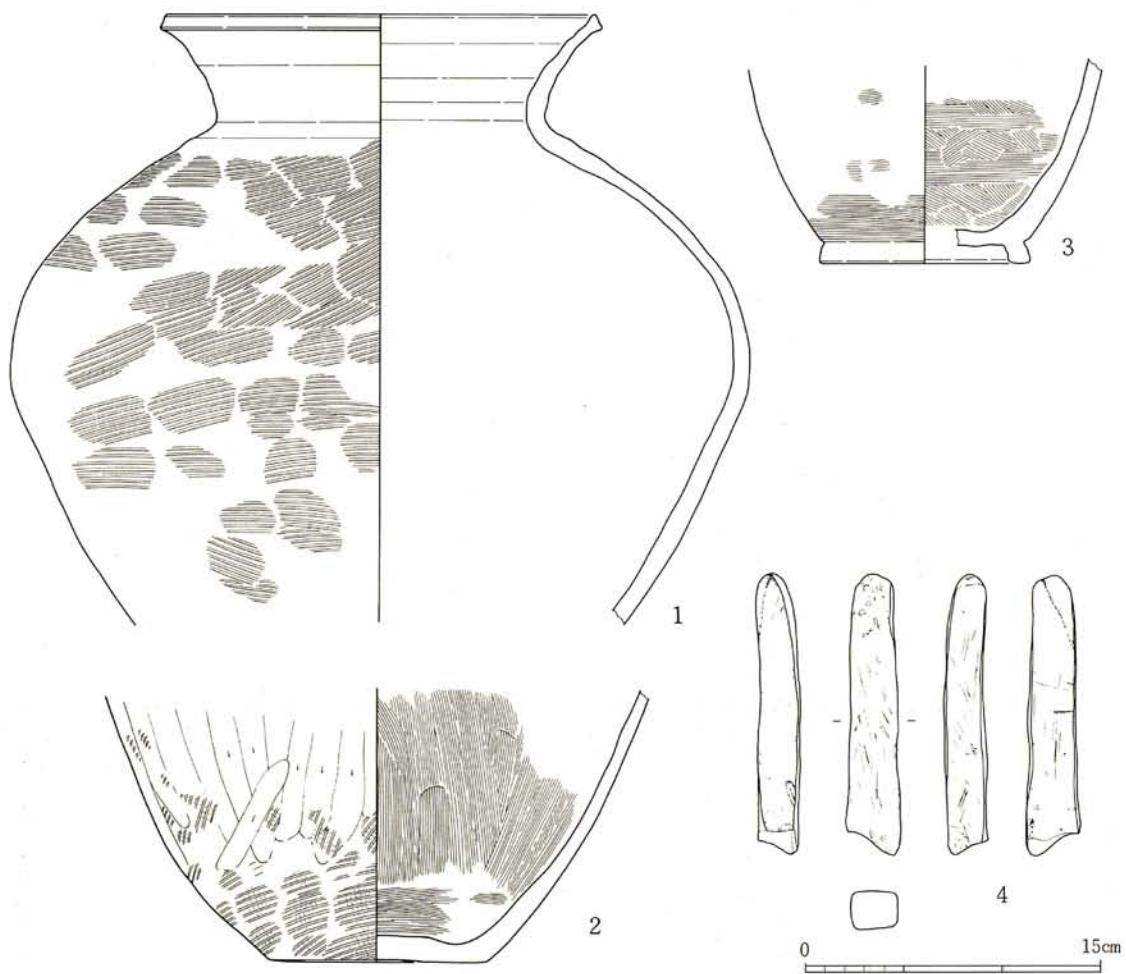
No.	種類	器形	外 面 調 整	内 面 調 整	口径	底 径	器 高	備 考
1	土 師 器	甕	ロクロナデ、体部下半ヘラケズリ	ロクロナデ	(14.9)	6.5	(12.9)	
2	々	々	ヘラケズリ	刷毛目のちヘラナデ		(10.8)		ロクロ未使用
3	々	杯	体～底部ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	(9.8)		2.6	々
4	々	高台付杯	ロクロナデ、底部回転糸切り	々	(15.6)	7.8	5.6	
5	須 恵 器	杯	々 底部回転ヘラ切り	ロクロナデ	(14.2)	8.2	3.7	
6	々	々	々	々	(13.1)	6.6	3.7	
7	々	々	々 底部回転糸切り	々	(14.2)	(8.2)	4.0	
8	赤焼土器	々	ロクロナデ、回転糸切り、体部下端 底部	々	(14.6)	(7.1)	4.6	
9	須 恵 器	々	ロクロナデ、体部下半～底部回転ヘラケズリ	々	(13.2)	(8.1)	3.1	
10	々	々	ロクロナデ、底部回転ヘラ切り	々	13.6	7.0	3.9	
11	々	々	々 底部回転糸切り	々	(14.6)	6.0	4.5	
12	々	々	々	々	(13.8)	(6.5)	4.0	
13	々	々	ロクロナデ、体部下半～底部手持ヘラケズリ	々	(13.2)	(6.8)	4.8	
14	々	々	ロクロナデ、底部回転ヘラ切り	々	(14.4)	6.6	3.6	
15	々	々	々	々	(14.6)	8.6	3.7	
16	々	小型壺	ロクロナデ、回転ヘラケズリ、底部回転糸切り	々		5.8		

第43図 D2区堆積層Ⅲ層出土遺物(1)

C類：回転ヘラ切り無調整のもの（第43図7・10、第43図5・6・10・14・15）。体部が直線的に外傾して立ち上がるものが多く、また内弯気味のものもみられる。図示できたものは、器高が3.6～3.8cmの間にまとまっており、口径に比べて小さい数値を示す。なお、底部周縁にかかるいナデ調整を施しているものもある。

D類：回転糸切り無調整のもの（第42図8、第43図7・11・12）。体部が内弯して立ち上がり、口縁部でやや外反するものが多い。また、口径に比べて底径が小さい傾向にある。

〈壺〉 図示できたものは、口縁部を欠損した小形の長頸壺（第43図16）と体部から底部にかけて残存するもの（第44図3）の2点である。前者は肩部が丸味をもち、頸部が垂直気味に立ち上がるもので、体部下半にはロクロ回転によるヘラケズリを施している。底部には回転糸切



単位：cm () は推定値

No.	種類	器形	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	備考
1	須恵器	甕	ロクロナデ、平行叩き目	ロクロナデ、体部ナデ	(22.6)			
2	々	々	平行叩き目のち手持ちヘラケズリ	指ナデ		11.2		
3	々	壺	ロクロナデ 一部ヘラナデ	ヘラナデ				外体部に若干布目痕 棒状
4	砥石							

第44図 D2区堆積層Ⅲ層出土遺物(2)

り痕が認められる。

〈甕〉 大部分が破片のため、出土量が多い割には図示できたものは2点と少ない（第44図1・2）。1は底部を欠損する大形のものである。口縁部は頸部よりやや外反しながら立ち上がる。外面には、肩部から体部にかけて平行叩き目が認められる。2は体部中頃より上を欠損しているもので、外面には平行叩きの後へラケズリが施されている。

(3) 赤焼き土器

図示できたものは1点のみである（第43図8）。体部が直線的に外傾して立ち上がり、口縁部で先細りするものである。底部切り離しは回転糸切りであり、体部下端のみ手持ちへラケズリ調整している。

D3区

II～V層の堆積層からは、土師器、須恵器、瓦が出土している。

(1) 土師器

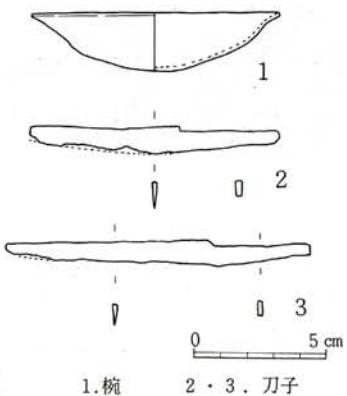
土師器には杯、高台付杯、高杯、甕の器種が認められる。高杯（第45図1）は脚部破片で、ロクロ未使用のものである。三ヶ所に穿孔の痕跡が認められる。他はいずれもロクロ使用のもので、細片のため図示できない。

(2) 須恵器

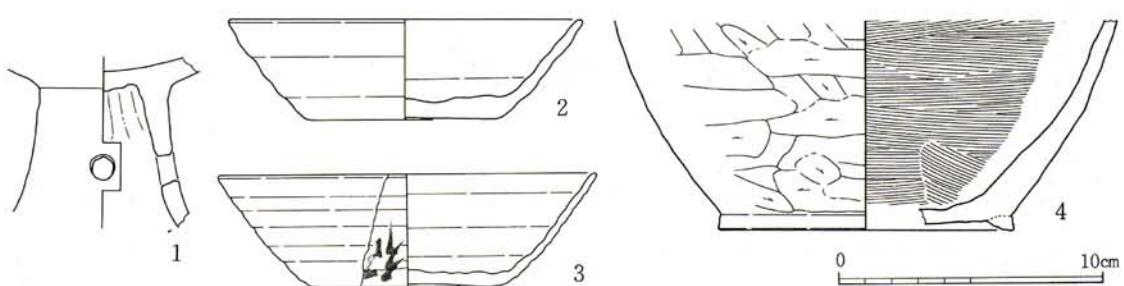
須恵器には杯、壺、甕の器種が認められる。土師器同様細片が多く、図示できたものは杯（第46図2・3）と壺（第46図4）の3点のみである。

(3) 瓦

瓦は平瓦と熨斗瓦が出土している。出土量はさほど多くない。



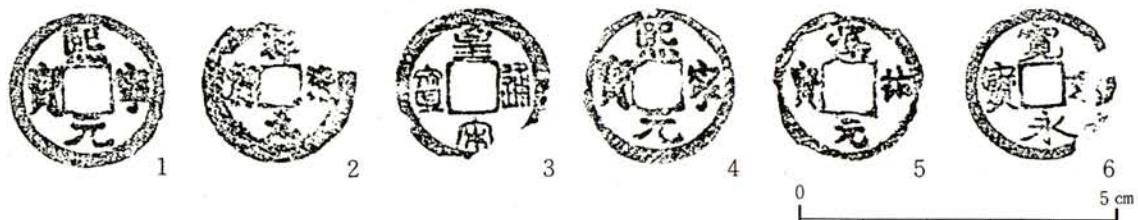
第45図 D2区堆積層Ⅲ層
出土遺物(鉄製品)



単位:cm ()は推定値

No.	層位	種類	器形	外 面 調 整	内 面 調 整	口 径	底 径	器 高	備 考
1	IV層	土師器	高杯						脚部のみ 穿孔あり
2	III層	須恵器	杯	ロクロナデ、底部回転へラ切り	ロクロナデ	(13.4)	7.2	3.8	
3	II層	々	々	々 底部回転糸切り	々	(14.4)	7.2	4.3	外体部墨書
4	々	々	壺	々 体部へラケズリ	ヘラナデ	(11.2)			

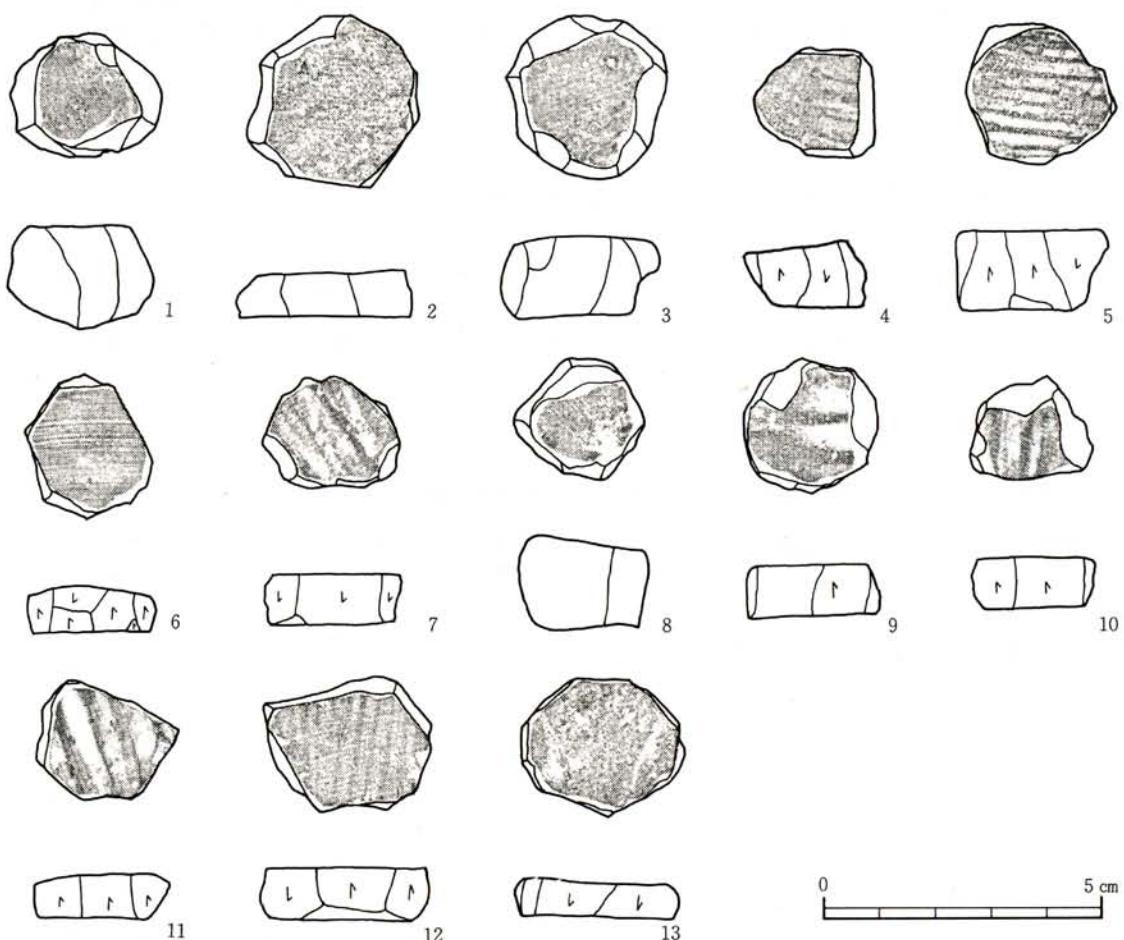
第46図 D3区堆積層出土遺物



No.	出土地	層位	種類	No.	出土地	層位	種類
1	D2区堆積層	I層	熙寧元宝	4	D2区堆積層	II層	熙寧元宝
2	ク	II層	祥符元宝	5	ク	ク	嘉祐通宝
3	ク	ク	皇宋通宝	6	D3区SD09(B)	埋土	寛永通宝

※他に、C2区SA01より「開元通宝」が出土しているが、
破損が著しいため拓本を載せることはできない。

第47図 出土遺物（古銭）



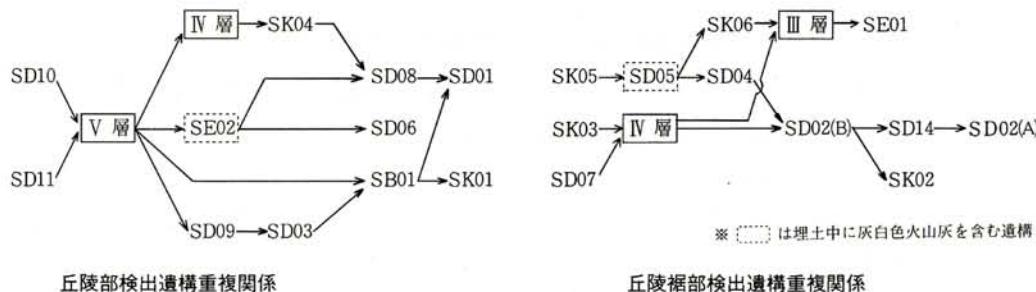
No.	地区	出土地	備考	No.	地区	出土地	備考
1	B地区	SD11	須恵器 豊 体部	8	C2区	IV層	須恵器 豊 体部
2	ク	IV層	ク ク ク	9	ク	VI層	ク ク ク
3	ク	IV層灰白下	ク ク ク	10	ク	整地層	ク ク ク
4	C地区	SA01	ク ク ク	11	ク	ク	ク ク ク
5	ク	SD03	ク ク ク	12	D2区	Ia層	ク ク ク
6	ク	SD07	ク 壺 ク	13	ク	II層	ク 壺 ク
7	ク	SD10	ク 豊 ク				

第48図 出土遺物（円盤状土製品）

V 考察とまとめ

1. B地区

本地区で検出した遺構と堆積層の関係をまとめると下表のようになる。



これらの関係を出土遺物をもとにして遺構の年代、性格について検討してみたい。

はじめに丘陵部検出の遺構の上限年代を求めるために、大部分の遺構の検出面となっているV層の年代について検討する。V層は、10世紀前半に降灰したとされている灰白色火山灰（註7）の直上に堆積するIVa～VIc₁層に覆われており、またSE02井戸跡の構築面ともなっている。SE02井戸跡最上層には同火山灰が自然堆積しており、同層中からは赤焼き土器（註8）の破片も出土している。井戸内底面直上には、土師器杯（第10図1）が据えられていた。これは口クロ使用のもので、底部全面から体部下端にかけて丁寧に手持ちヘラケズリ調整を施し、切り離し痕跡を残さないものである。これらの火山灰の堆積状況、遺物の諸特徴から本井戸跡の年代は10世紀前半頃を下限とすることができる。以上のことから、V層の年代については10世紀前半頃より古い時期といえるが、具体的にどこまで溯るのかは不明である。しかし、V層に覆われて地山面で検出できる遺構（SD10・11溝跡）や同層中の出土遺物をみると、確実に奈良時代まで溯るものは認められない。丘陵部検出遺構の下限年代については、重複関係から一番新しいSD01溝跡の出土遺物が参考になる。出土量はさほど多くはないが土師器、須恵器の古代の遺物に混じって近世～近代と思われる磁器が出土している。したがって、ここではSD01溝跡出土遺物の年代をもって下限と考えておくことにする。

さて、これまでの検討から丘陵部検出の遺構は、大きく平安時代から近代頃の間に位置づけることが可能であるが、SE02井戸跡や後述するSX01を除いては、出土遺物がいずれも僅少であるため特定の時代を限定することはできない。

SX01（合口甕棺）は、2個体の土師器甕を合わせて横位に埋設していた。これらは土圧によって割れたり、押し潰されていたが、ほぼ完形のまま残存していた。埋甕中から遺物は全く出土していない。第12図1・2は大小の違いはあるにしても、形態、調整技法が近似している。前者は、口縁径と体部径がほぼ等しいが、後者は、体部径がやや大きい。いずれも口縁部が

頸部から外傾し、端部がわずかに上方につまみ出されている。外面はロクロ調整の後、体部下半に縦方向のヘラケズリが施されている。これらの特徴を有する土器は表杉ノ入式に比定され、平安時代のものとみることができる。

宮城県内における甕棺の検出例は、本例を加えて7例を数える。その概要を表1に示した。

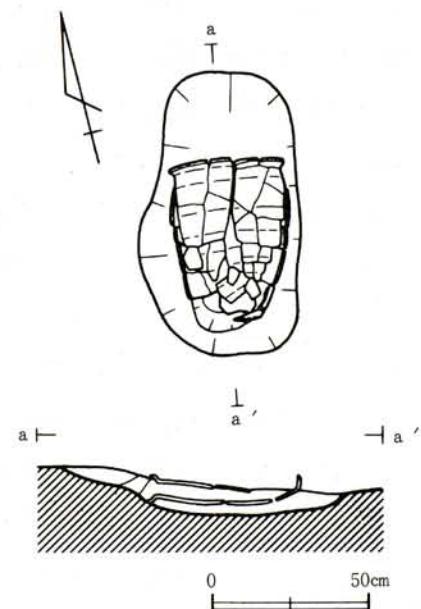
宮城県内の甕棺出土例一覧表（第2表）

遺跡名	規模（長軸×短軸）	個体数	方向	時代
高崎遺跡（市教委第1次調査）	75cm×32cm	2	N-18°-E	平安時代
〃（〃第3次調査）	73cm×40cm	1	N-10°-E	〃
〃（〃第6次調査）	76cm×55cm	2	N-27°-W	〃
仙台市安久東遺跡	不明	2	N-7°-E	〃
〃	〃	2	N-57°-E	〃
築館町佐内屋敷遺跡	65cm×28cm	2	N-42°-E	〃
高清水町手取遺跡	90cm×45cm	4	N-1°-W	〃

※高崎遺跡第6次調査の方位は、国家座標を使用している。
磁北は国家座標の方位に対して西偏約7度である。

掘り方の規模と埋納個体数についてみると、長軸は70cm前後に集まる傾向にあり、2個体を埋設しているものが大部分である。例外的に手取遺跡の4個体を連結したものや高崎遺跡（第3次調査）の1個体のみ埋設された例がある。方向は磁北にほぼ同様か、あるいはそれより東に偏しているものが多く、当地区の調査において検出したもののみが西に偏している。年代については、各遺跡とも時期決定の資料が土師器甕に限られることもあり、大きく平安時代のものととらえられている。この合口甕棺については、沼山氏によって埋葬施設の一つであり、主に幼児用に用いられたのではないかと考えられている（註9）。また、多賀城市内発見の甕棺についてまとめてみると、これらはすべて丘陵から沖積地に移行する緩斜面に位置しており、1基だけ単独で存在している。集落との関係については、各地区とも調査区の制限により明らかにできないが、立地の状況から集落の端部に位置しているのではないかと思われる。

次に、丘陵裾部検出の遺構とその出土遺物について検討する。ここでは年代決定するにあたって、灰白色火山灰が認められたIV層とSD05溝跡を基準とすることができる。SD07溝跡、SK03土塙は、地山上で検出しIV層に覆われている。SD05土塙については、SD05溝跡に切られている。以上の重複および層の上下関係から、これらは10世



第49図 表地区（第3次）埋甕

紀前半以前に機能していたものとみることができる。また、重複関係から S D 05 溝跡より新しい遺構については、前述の灰白色火山灰降下年代が上限になるものと考えられる。ここで、丘陵裾部検出の遺構の中で、比較的新しく位置づけられる S D 02(A)・(B) 溝跡を検討し、下限年代を考えてみたい。両溝跡は、S D 14 溝跡を間に介在するが、ほぼ同位置で重複していることから、近接した時期の変遷であったと思われる。出土遺物についてみると、S D 02(A)には土師器、須恵器、瓦に混じって青磁碗（第10図5）と陶器が出土している。青磁碗は口縁部破片で、外面には蓮弁文がみられる。釉は明緑灰色で、厚さ0.5mm位を計る。釉、蓮弁文の特徴から13・14世紀のものと考えられる。陶器については細片のため不明である。S D 02(B)からは古代の遺物が出土している。以上のように出土遺物が少なく、詳しい年代については決め難いが、上記の陶磁器の年代より、概ね中世頃とみておきたい。S E 01 井戸跡については、灰白色火山灰降下後に S K 06 土塙の構築、Ⅲ層の堆積という過程を経てつくられていることから、おそらくは中世頃まで下るものと推察される。

ところで、本地区で検出された遺構は各時代ごとに有機的な関係にあったと思われるが、その同時性については充分に検討できなかったので、ここでは遺構の位置関係について述べることにする。丘陵部およびその西側斜面では、掘立柱建物跡、井戸跡、合口甕棺、多数の柱穴が検出されており居住地域の一部とみることができる。さらに丘陵裾部には、各時代ごとに溝が構築されていたようであり、一貫した土地利用がなされている。なお、S D 02(A)・(B) 溝跡は丘陵の裾を巡っているものであり、特に(B)は途中より南へ分岐し、丘陵の小谷間へと延びている。このような方角は、本調査区南側に位置する低丘陵上に何らかの施設が存在し、これに関連する溝跡とみるのが妥当であろう。この丘陵上には現地踏査の結果、土壘状の高まりや平場が観察され、館跡の存在を思わせるものがある。

2. C地区

本地区はC₁区とC₂区に分けて記述する。

〈C₁区〉

ここでは、主要な遺構について年代を検討していくことにする。

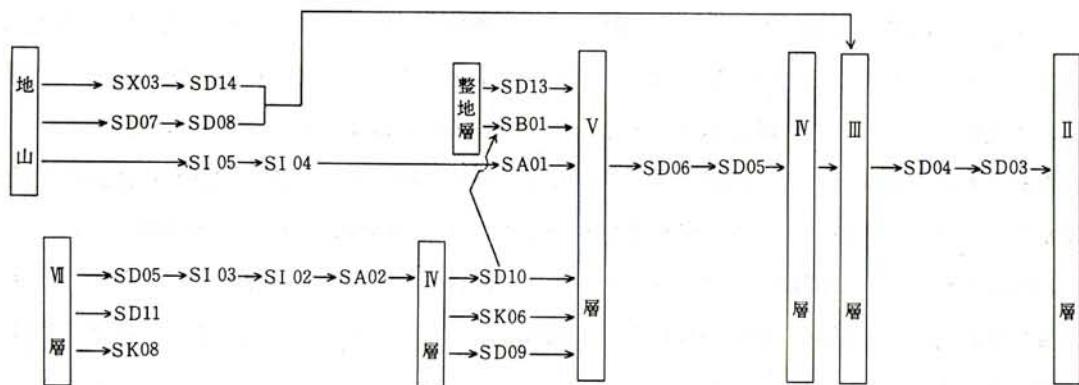
S I 01 竪穴住居跡についてみると、その出土遺物には土師器、須恵器、赤焼き土器、瓦がある。土師器杯・甕についてはロクロ使用のもので、表杉の入式に比定される。赤焼き土器は、杯の口縁部破片である。いずれも細片であるため、年代決定をするだけの特徴を導き出せないが、赤焼き土器の年代より、ここでは大きく平安時代後半に位置づけておくことにする。

S K 01 土塙については、昨年度の試掘調査の段階では古代の遺物のみ出土しており、平安時代後半頃と考えていた。しかし、今回の調査で中世陶器の擂鉢が出土したことにより、中世頃と修正しておきたい。

S X 01(A)・(B)土壙状遺構は、S D 01溝跡（近世以降）に切られていることから、これより古い時期といえるが、上限年代については、出土遺物が皆無であり不明である。

〈C₂ 区〉

C₂ 区で検出した遺構を検出面と重複関係からまとめてみると下表のようになる。



各遺構は、以上のように堆積層および整地層を介在して複雑に重複している。ここでは各層および各遺構の年代について考察してみることにする。

はじめに、調査区全域をほぼ覆っていたⅢ層出土の遺物について検討し、これより下層で検出された遺構についての下限年代を与えておく。Ⅲ層の出土遺物には土師器、須恵器、赤焼き土器、瓦があるが、全体的にみると土師器、須恵器が半々位でその他はきわめて少ない。土師器には杯、高台付杯、甕の器種がみられる。杯は大部分が回転糸切り無調整のものである。須恵器には杯、高台付杯、壺、甕の器種がみられる。杯は回転糸切り無調整のものが大部分をしめ、他には底部全面を回転ヘラケズリしたものがわずかに認められる。赤焼き土器は、多賀城跡出土土器のうちF群土器（註10）に対比されるものである。F群土器には10世紀中頃（註11）という年代が与えられている。したがって、Ⅲ層の堆積年代については、赤焼き土器の年代を考慮し、10世紀中頃とみておきたい。これは、回転糸切り無調整のものが主体を占める土師器、須恵器の杯の年代観とも大きな隔たりはない。

次に、竪穴住居跡の年代について検討する。S I 05竪穴住居跡出土土器のうち、カマド燃焼部底面に敷きつめられていた土師器甕4個体は、住居構築の際にカマドに施設されたものである。第25図1～3の3点はいずれも長胴形を呈し、口縁径に対して体部径がやや小さいものである。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面がヘラナデ、下半にはヘラケズリが施されている。体部内面にはヘラナデがみられる。口縁端部は1と2が丸くおさまるが、3は平坦である。第25図4は器高より口縁径が大きいものである。口縁部外面はヨコナデ、体部がヘラケズリされ、内面はヘラミガキ・黒色処理が施されている。

住居廃絶時に伴うものには、カマド燃焼部堆積土中出土の土師器杯・甕（第26図5・3）周

溝内出土の土師器甕（第26図2）、煙道部先端出土の土師器（第25図5）がある。5の杯はロクロ使用で、体部は内弯して立ち上がり、そのまま口縁部に至るため、全体的に丸味を帯びた形態をもつものである。内面はヘラミガキ・黒色処理を施している。2はロクロ未使用の小形甕で丸底風である。口縁部外面はヨコナデ、体部外面はヘラケズリ、内面はヘラナデされている。第25図5と第26図3の甕は、口縁部と底部の破片で、いずれもロクロを使用しているものである。後者は、体部下半がヘラケズリされている。

この他に、埋土3層から比較的多くの遺物が出土している。3層は床面直上に薄く堆積しており、これに含まれる遺物も住居廃絶時のものと考えられる。出土遺物は、図示できたものが6点で、土師器杯・甕、須恵器杯・蓋の器種が認められた。第26図4の土師器杯はロクロ未使用で、丸底風のものである。外面は口縁部にヨコナデ、体部にヘラケズリが施されている。内面はヘラミガキ・黒色処理されている。第26図1はロクロ未使用の小形甕で、底部に木葉痕が認められる。第26図9の蓋はつまみが擬宝珠を呈するもので、口縁部はわずかに折り曲げられている。

埋土1層（整地土）の出土遺物は図示できたものが2点で、須恵器杯・蓋の器種が認められた。第26図7の須恵器杯は回転ヘラ切り無調整のものである。

以上、SI 05竪穴住居跡出土土器について概観してきた。これらは細かくみると、住居構築・機能時→住居廃絶時→整地という時間的推移の中で把握することができる。ここでは住居構築・機能時に伴うものを若干先行するものと考え、それ以降のものを短い時間幅での土器組成としてとらえることにする。まず、住居構築・機能時のロクロ未使用土師器甕についてみる。長胴形を呈する3点は、これまで説明してきた諸特徴により国分寺下層式に位置づけて良いものと思われる。国分寺下層式の土師器甕は、総じて体部最大径が下半部にあるものから上半部にあるものへ、頸部に段あるいは沈線が巡るものからなくなるものへ、口縁部が長いものから短いものへなどの形態変遷を経て表杉ノ入式のロクロ使用甕へと移行している。このような形態変遷の観点に立ってみると、今回出土した土師器甕は国分寺下層式の中でも比較的新しい要素をもつ土器群として理解できる。また、県内で類似する例としては、御駒堂遺跡（註12）、大境山遺跡（註13）、次橋窯跡（註14）、新浜遺跡（註15）等で知られており、年代的には8世紀中葉および後半頃と考えられている。これらのことからSI 05竪穴住居跡の上限年代については、ここでは8世紀後半頃とみておきたい。次に住居廃絶時の土器についてはロクロ使用とロクロ未使用の土師器杯・甕が共存することに注目したい。宮城県内でこのような方ではありません多く知られていないが、多賀城跡（註16）、伊治城跡（註17）、大境山遺跡などでみられる。このことについては、国分寺下層式から表杉ノ入式に移行する段階、すなわち、土師器製作におけるロクロ技術導入期にみられる一時的な現象と考えられる。よってSI 05 竪穴住居跡の下

限年代は、表杉ノ入式の初期が9世紀初頭とする見解（註18）を考慮し、ほぼこの頃に求めておきたい。

さて、これまでの検討からS I 05竪穴住居跡は、8世紀後半から9世紀初頭の間に位置づけられることになる。しかし、上限年代の根拠とした土師器甕の特徴をみると、国分寺下層式の中でも比較的新しい様相をもっており、また実際の住居の存続期間はさほど長くは考えられずごく限られた一時期と思われることから、この住居跡の上限年代については、8世紀後半の中でも下る時期になると推察される。S I 04竪穴住居跡については、S I 05竪穴住居跡を整地して構築していることから、連続的に営まれたものと考えることができよう。

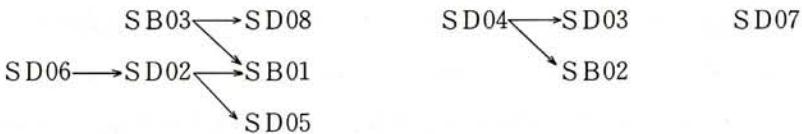
S I 02・03竪穴住居跡は、前者が後者を整地した後に構築しており、S I 04・05竪穴住居跡の状況と近似している。また、住居跡の方向および建て替え位置もほぼ同様であることから、両者は同時期に存在していたものと思われる。

次に、VI～IV層、整地層および各上面での検出遺構の年代についてみてみたい。まず、各堆積層と整地層の新旧関係はVI層→整地層→V層→IV層ということがいえる。しかし、VI層と整地層については、両上面よりSD 10溝跡が掘り込まれていたことから、両者はある時期に共通の遺構構築面となっていたことがわかる。出土遺物についてみると、V層からは比較的多くの遺物が出土しており、図示できたものも多い。土師器は、ロクロ未使用的ものがほとんどみられず、杯類では土師器、須恵器とも回転糸切り無調整のものが大部分を占める。この傾向は、遺物の出土量は少ないが、IV・VI層でも同様である。また、各遺構では、出土遺物が僅少なものが多く、比較的遺物がまとまって出土した遺構でも、時期的なことに言及するまでには至らなかった。これらのことから、各堆積層、整地層および各上面検出遺構については、個々に具体的な年代を推察することは困難である。しかしながら全体を通してみれば、III層とS I 03・05竪穴住居跡の年代検討から、両者の間に位置づけることが可能である。したがって、上限はS I 03・05竪穴住居跡に後続するS I 02・04竪穴住居跡の存続期間も考慮して9世紀前半頃とし、下限については10世紀前半頃とみておきたい。

この他に、堆積層との関係が不明な遺構（SX 03焼土遺構、SD 07・08・14溝跡）がある。これらについては、出土遺物が古代のものに限られており、他の遺構の年代と照らし合わせてみて、概ね平安時代に属するものと考えられる。SX 02については、直接遺構に伴う遺物がないため検討できないが、その形態から古代以降のものと推察される。

3. D地区

本地区については、D₂区とD₃区で検出した遺構のあいだで対応関係が把握できなかったため、ここでは各区ごとに説明を加えることにする。まず、D₂区で検出した遺構の重複関係を整理すると以下のようになる。検出面は全て地山である。



D₂ 区で検出した遺構は、出土遺物が僅少であり、年代を決定する決め手に欠けるものがほとんどである。このため、これらを直接覆っている包含層出土の土器の年代を検討し、各遺構の下限年代を考えていく。包含層出土土器は取り上げの際Ⅱ～Ⅳ層に分けているが、これらは各層位間で出土土器の内容に相違点を見いだすことができず、しかも異なる層位から出土した破片が接合するという例が多くみられたため、一括して取り扱うこととする。さて、包含層出土土器についてみると、ロクロ使用の土師器と須恵器が大部分を占めており、これに出土量はわずかであるが赤焼き土器が加わっている。赤焼き土器は、図示できたものは杯1点であり、他は細片のため器形がわかるものはない。多賀城跡出土土器のうち須恵系土器（註19）が出現するのは、E群土器の時期とされており、さらにF群土器では、須恵系土器の出土量が多くなり、器種には杯のほかに小皿、台付皿が加わってくる。杯に関しては、両土器群で形態的な相違はみられないという。したがって、ここでは包含層出土土器の下限年代に10世紀中頃というF群土器の年代をあてておきたい。上限年代については、遺構内出土土器のうち土師器は全てロクロ使用のものであり、表杉ノ入式に比定される。また、確実に奈良時代にまで溯るものが出でていないことから、平安時代に入ってからの遺構の構築と理解したい。以上の検討から、D₂ 区で検出した遺構は、おおよそ平安時代前半頃に機能していたものと考えられる。

次にD₃ 区についてみると、検出した遺構を検出面と重複関係から整理すると以下のようになる。

Ⅵ層検出遺構	Ⅴ層検出遺構	Ⅲ層検出遺構	Ⅱ層検出遺構
S D 16 → S D 17	S K 01 S D 10 S D 11 S D 14 S D 15	S D 12 S D 13	S D 09(A) → S D 09(B)

ここでは、Ⅴ層上面で検出した溝跡に、10世紀前半に降下したと考えられている灰白色火山灰が含まれることから、この溝跡を手掛りとして、火山灰降下以前のものと以後のものに分けて年代を考えていくことにする。火山灰降下以後の時期のものには、Ⅱ・Ⅲ層検出の遺構がある。Ⅱ層上面で検出したS D 09(A)・(B)溝跡は、南北方向に走るもので、ほぼ同じ位置に重複している。遺物は土師器、須恵器、瓦にまじって、陶器や古銭（寛永通宝）などが出土している。これらの出土遺物の年代から、近世頃の溝跡であると考えておきたい。次に、Ⅲ層上面で検出

したSD12・13溝跡は、同一方向にほぼ平行して走る溝跡である。この両溝跡からは土師器、須恵器、灰釉陶器が出土しているが、全て細片のため年代について言及することはできない。

火山灰降下以前のものには、V・VI層検出の遺構がある。V層上面で検出した溝跡は、全て埋土1層中に火山灰を含むものであり、SD10溝跡とSD11溝跡、SD14溝跡とSD15溝跡は、その形態、方向性から各々ほぼ同時期に機能していたものと考えられる。VI層上面で検出したSD16・17溝跡は、いずれも部分的な検出にとどまっているため、その全容については不明である。遺物は土師器、須恵器の細片がわずかに出土しているだけである。土師器は全て口クロ使用のものであり、また火山灰を含む溝跡より下層で検出していることから、この両溝跡はおよそ平安時代前半頃に機能していたものと考えられる。以上のことより、D₃区で検出した遺構は平安時代と近世のものであり、溝跡のみという共通の要素はもっているにせよ、そのつながりや機能については不明な点が多い。

今回の都市計画街路建設工事に伴う発掘調査の成果を要約すると以下のようになる。

1. 2ヶ年にわたる本調査では、掘立柱建物跡6棟、柱列跡3条、竪穴住居跡7軒、井戸跡3基、合口甕棺1基、溝跡58条、土塙21基が検出された。これらは主に平安時代を中心とするもので、中・近世のものもわずかではあるが含まれている。
2. A地区は、東側緩斜面に掘立柱建物跡・柱列跡→竪穴住居跡の順に遺構が構築されている。これらは、いずれも発掘基準線に対して北でみると西に振れるという共通した方向性をもつていて。西側平坦面では主に溝跡が集中して検出されている。
3. B地区は、東側丘陵部がすでに岩盤面まで削平されており、遺構は残っていなかった。一方、西側では丘陵緩斜面と丘陵裾部に遺構の分布がみられた。丘陵緩斜面には掘立柱建物跡、井戸跡、合口甕棺などが構築され、丘陵裾部には溝が巡らされていた。
4. C地区は、C₁区で遺構の分布密度が薄かったのに対して、C₂区では調査面積の割に濃密に分布していた。C₂区での主要な遺構は、竪穴住居跡→掘立柱建物跡・柱列跡→溝跡という変遷を追うことができる。これらは8世紀後半～10世紀中頃の間に位置づけられる。竪穴住居跡は4軒検出しているが、いずれも継続的に営まれており、この周辺一帯に展開していた集落の一部とみることができる。掘立柱建物跡と柱列跡は重複していたが、その新旧関係については明確にできなかった。柱列跡は、柱間が約70cm間隔と狭く、弧状を描いているもので他にあまり類例をみない。性格については、部分的な検出であるため不明であるが、区画施設の一部と考えられる。また、SD03～06溝跡とほぼ同位置、同方向をとることから、この区画施設は柱列→溝へ変遷したものと考えられる。SD07・08・10溝跡については、直角に近く屈曲する形態をとることから、竪穴住居跡の掘り方であった可能性もある。

5. D 地区で検出した遺構は、掘立柱建物跡と溝跡を主体とした構成である。掘立柱建物跡は D₂ 区東側に集中して検出されており、西側の D₃ 区には、全くみることができない。また、 S D 02・06 溝跡との関係については、位置や方向から建物跡の一部と同時期に機能していたことも考えられるが、充分に検証できなかった。なお D₂ 区の西側で検出した小区画の畦畔状遺構については、Ⅲb 層内に灰白色火山灰を斑状に含むことから、平安時代頃の水田跡と考えておきたい。

6. 今回の高崎遺跡井戸尻地区の調査は、道路の路線幅に限定されたことから、いずれの調査地区でも遺構の全容を把握するには至らなかったものが多い。しかし、各地区が比較的斜面に位置していたのにもかかわらず、これだけの数の遺構が検出されたことは、この丘陵地には、多くの遺構が存在することが明らかとなった。また、多賀城廃寺跡をとり巻く本遺跡の環境からしても、検出遺構の位置づけは重要な意味をもつものと考えられる。

(註)

- 註1 現在の地番は、それぞれ高崎一丁目と東田中一丁目であるが、調査地区の名称は旧字名を使用している。
- 註2 加藤孝他「多賀城町高崎古代井戸跡調査概報」(1967)
- 註3 多賀城市教育委員会「山王・高崎遺跡発掘調査概報」多賀城市文化財調査報告書第2集(1981)
- 註4 多賀城市教育委員会「高崎・市川橋遺跡調査報告書」多賀城市文化財調査報告書第3集(1982)
- 註5 多賀城市教育委員会「多賀城周辺の遺跡展」(1986)
- 註6 多賀城市教育委員会「高崎遺跡」多賀城市文化財調査報告書第11集(1986)
- 註7 白鳥良一「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要Ⅶ』宮城県多賀城跡調査研究所(1981)
- 註8 宮城県多賀城跡調査研究所「多賀城跡・政庁跡本文編」(1982)によれば須恵系土器は10世紀以降に出現するものと考えられている。本報告書で赤焼き土器としたものは、細部で若干の違いはあるが、この須恵系土器と同様のものとみている。
- 註9 沼山源喜治「土師器合口甕棺葬について」『考古学雑誌第66卷第4号』(1981)
- 註10 註7に同じ
- 註11 F群土器は、註7の文献によれば11世紀から12世紀にかけての年代が与えられていたが、その後の検討により註8の文献では10世紀中頃と訂正している。
- 註12 小井川和夫他「御駒堂遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書VI』宮城県文化財調査報告書第83集(1982)
- 註13 阿部正光他「大境山遺跡」瀬峰町文化財調査報告書第4集(1983)
- 註14 松山町教育委員会「次橋須恵器窯跡発掘調査報告」松山町文化財調査報告書第1集(1983)
- 註15 宮城県教育委員会「塩釜市新浜遺跡」宮城県文化財調査報告書第113集(1986)
- 註16 註7に同じ
- 註17 宮城県多賀城跡調査研究所「伊治城跡Ⅰ」多賀城関連遺跡発掘調査報告書第3冊(1978)
「伊治城跡Ⅱ」第4冊(1979)
「伊治城跡Ⅲ」第5冊(1980)
- 註18 註7に同じ
- 註19 註7に同じ

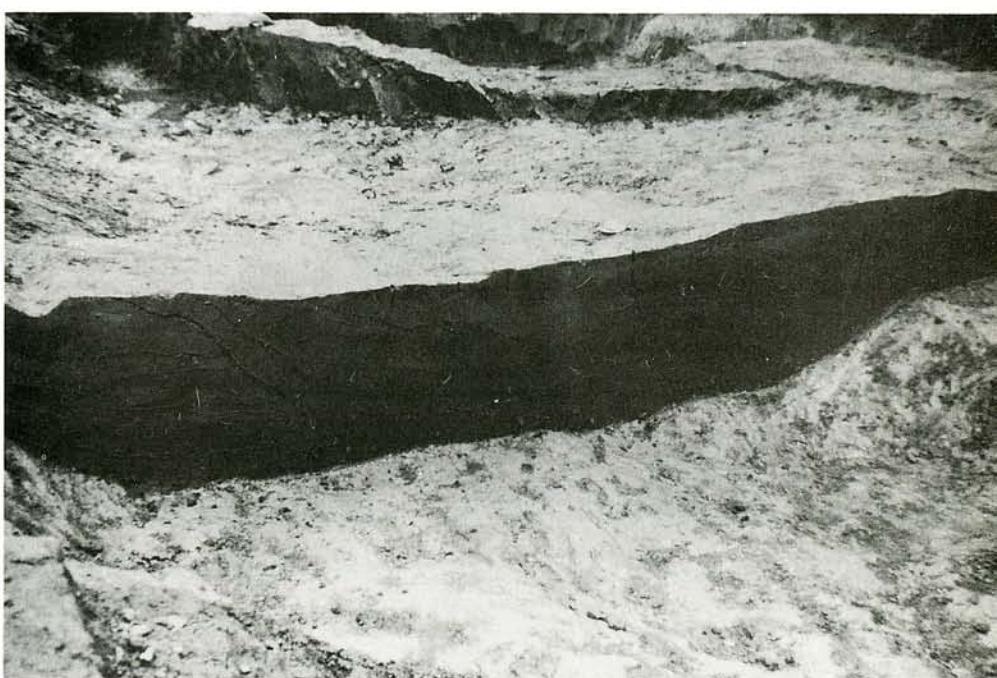
(引用・参考文献)

- 岩渕康治「安久東遺跡発掘調査概報」仙台市文化財調査報告書第10集（1976）
工藤哲司他「栗遺跡」仙台市文化財調査報告書第43集（1982）
木村浩二他「郡山遺跡Ⅳ」仙台市文化財調査報告書第64集（1984）
小井川和夫他「糠塚遺跡」宮城県文化財調査報告書第53集（1978）
　　「上新田遺跡」宮城県文化財調査報告書第78集（1981）
早坂春一他「手取・西手取遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅱ』宮城県文化財調査報告書第63集（1980）
加藤道男他「観音沢遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅳ』宮城県文化財調査報告書第72集（1980）
森 貢喜「佐内屋敷遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅷ』宮城文化財調査報告書第101集（1983）

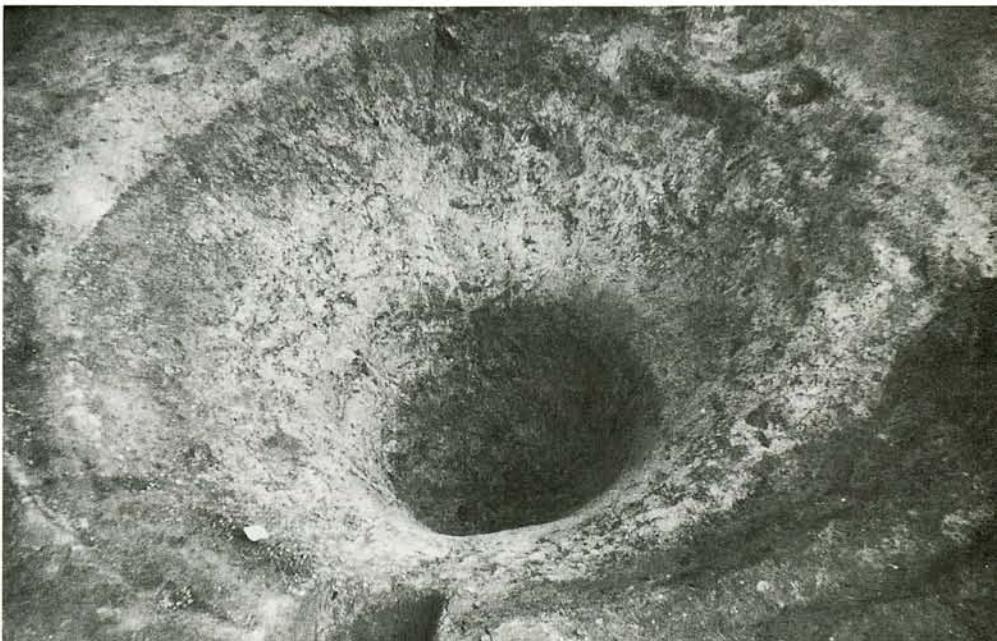
図版 1
B 地区 SD02(A)溝跡
(西より)



図版 2
B 地区 SD02(A)・(B)溝跡
重複状況(東より)



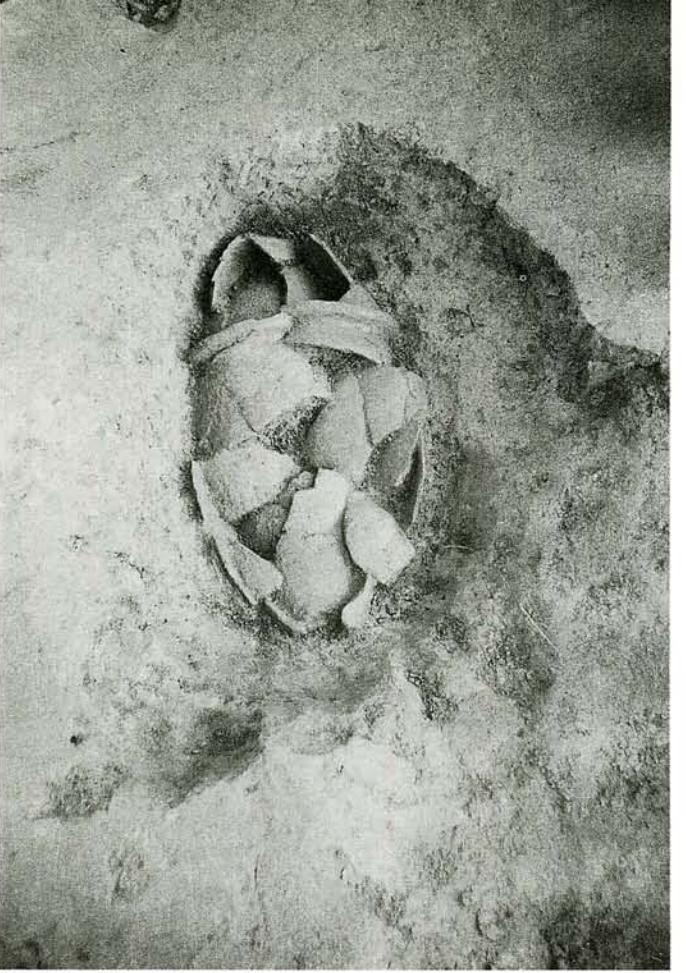
図版 3
B 地区 SE01井戸跡
(北より)



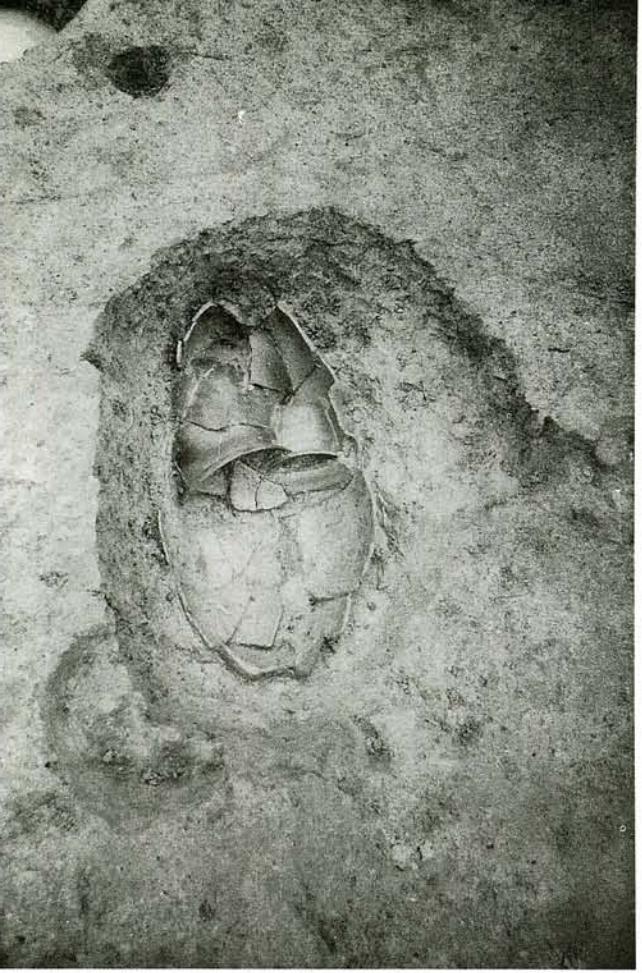
図版 4
B 地区 SE02井戸跡
(東より)



図版 5
B 地区 合口 鏊棺
(東より)



図版 6
B 地区 合口 鏊棺
(東より)



図版 7

C1 地区 S101

竪穴住居跡カマド

(西より)

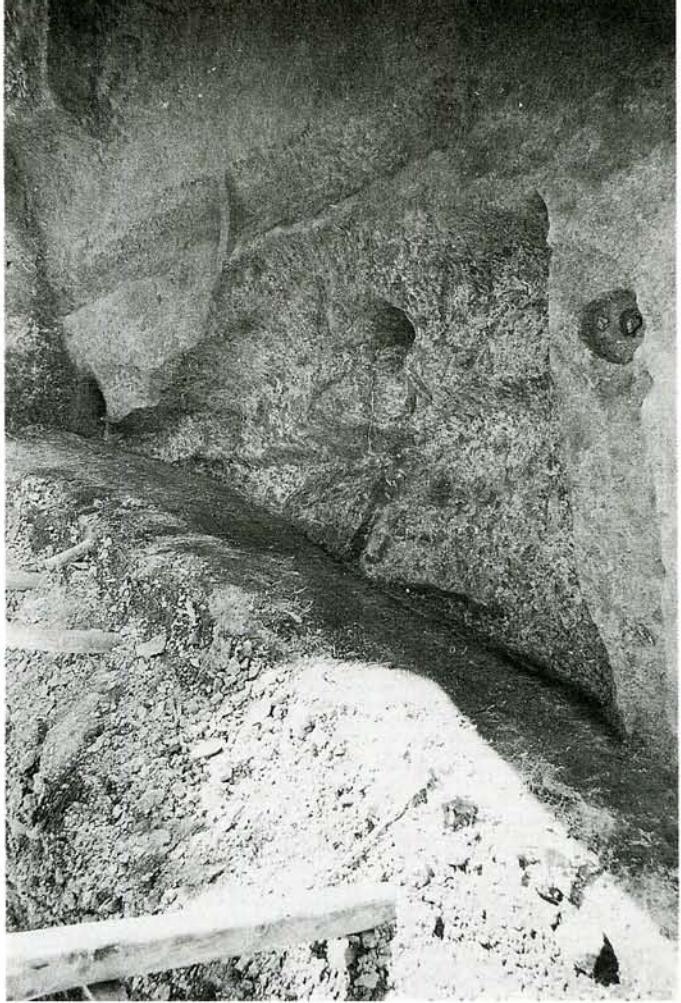


図版 8

C2 地区 S102・03

竪穴住居跡

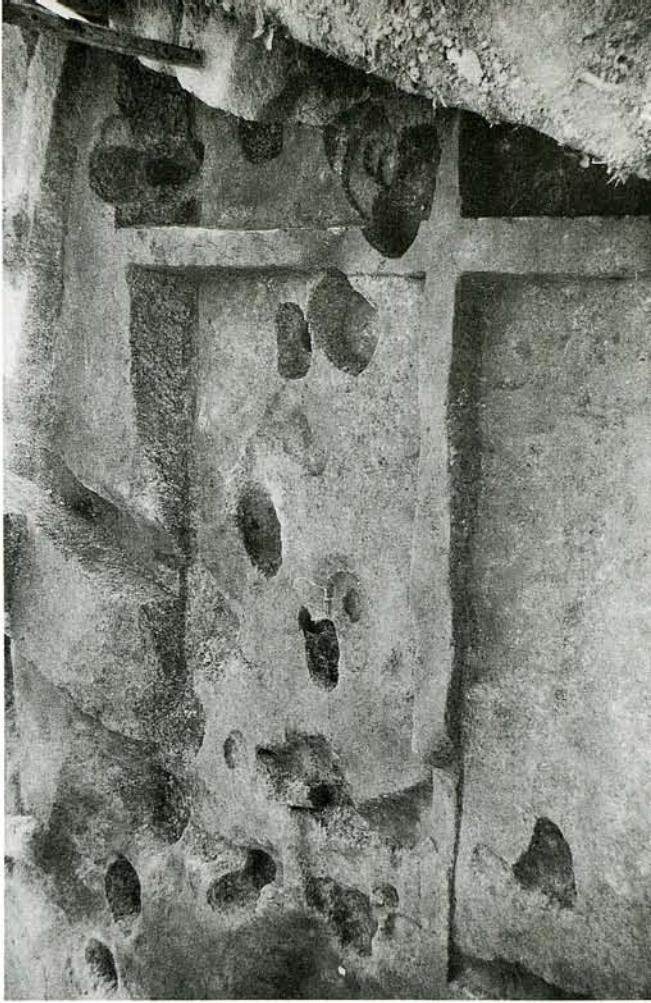
(西より)



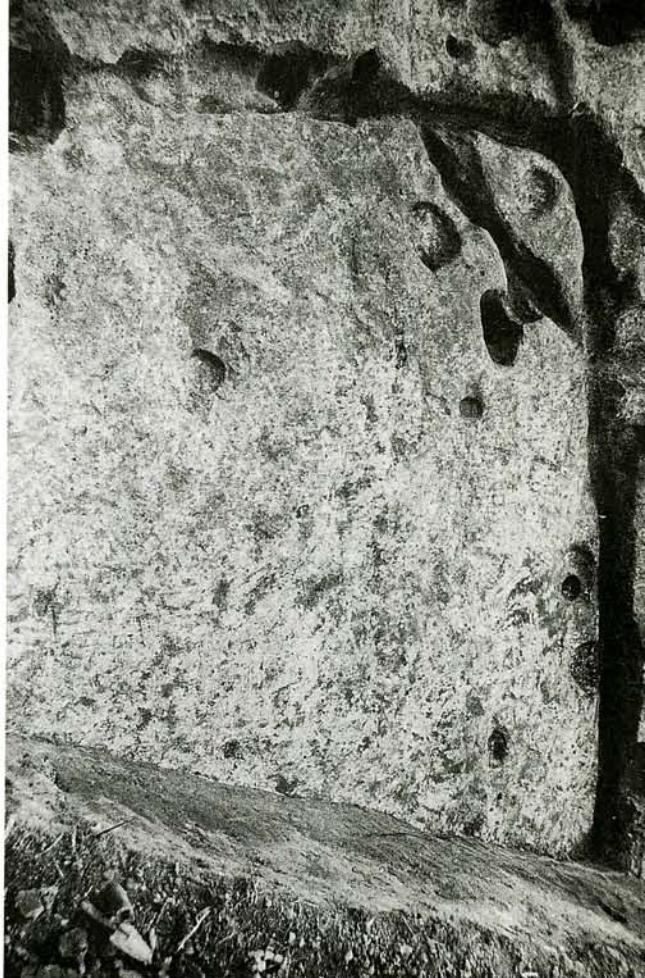
図版 9

C2 地区 S104 竪穴住居跡

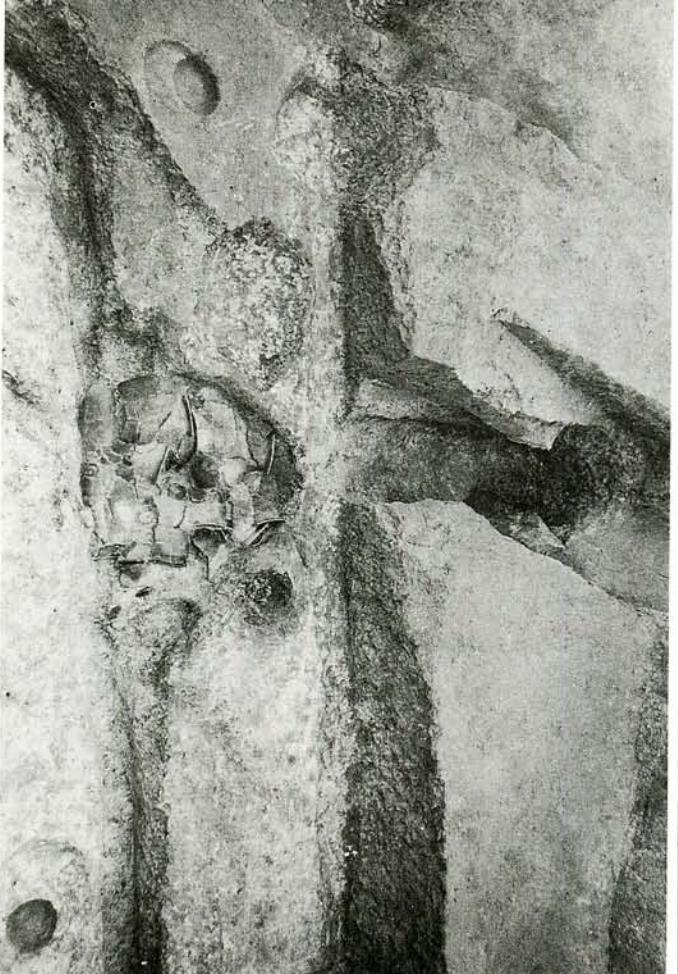
(北より)



図版 10
C₂ 地区 SI 05 穹穴住居跡
(北より)



図版 11
同上カマド
(北より)



図版 12
同上細部
(北より)



図版 13

D₂ 地区 遺構全貌
(北より)



図版 14
D₂ 地区 建物跡
(南より)



図版 15

D₃ 地区 溝跡
(東より)





図版16 出土遺物(1)



1



6



2



7



3



8



4



9



5



10

1. 須恵器 杯 (第10図6) 7. 須恵器 杯 (第32図2)
 2. タイリ (第13図5) 8. タイリ (第32図3)
 3. タイリ (第19図1) 9. タイリ (第40図1)
 4. タイリ (第27図14) 10. タイリ (第40図3)
 5. タイリ (第29図2) 11. タイリ (第42図7)
 6. タイリ (第29図4)



11

図版17 出土遺物(2)



1



7



2



8



3



9



4



10



5



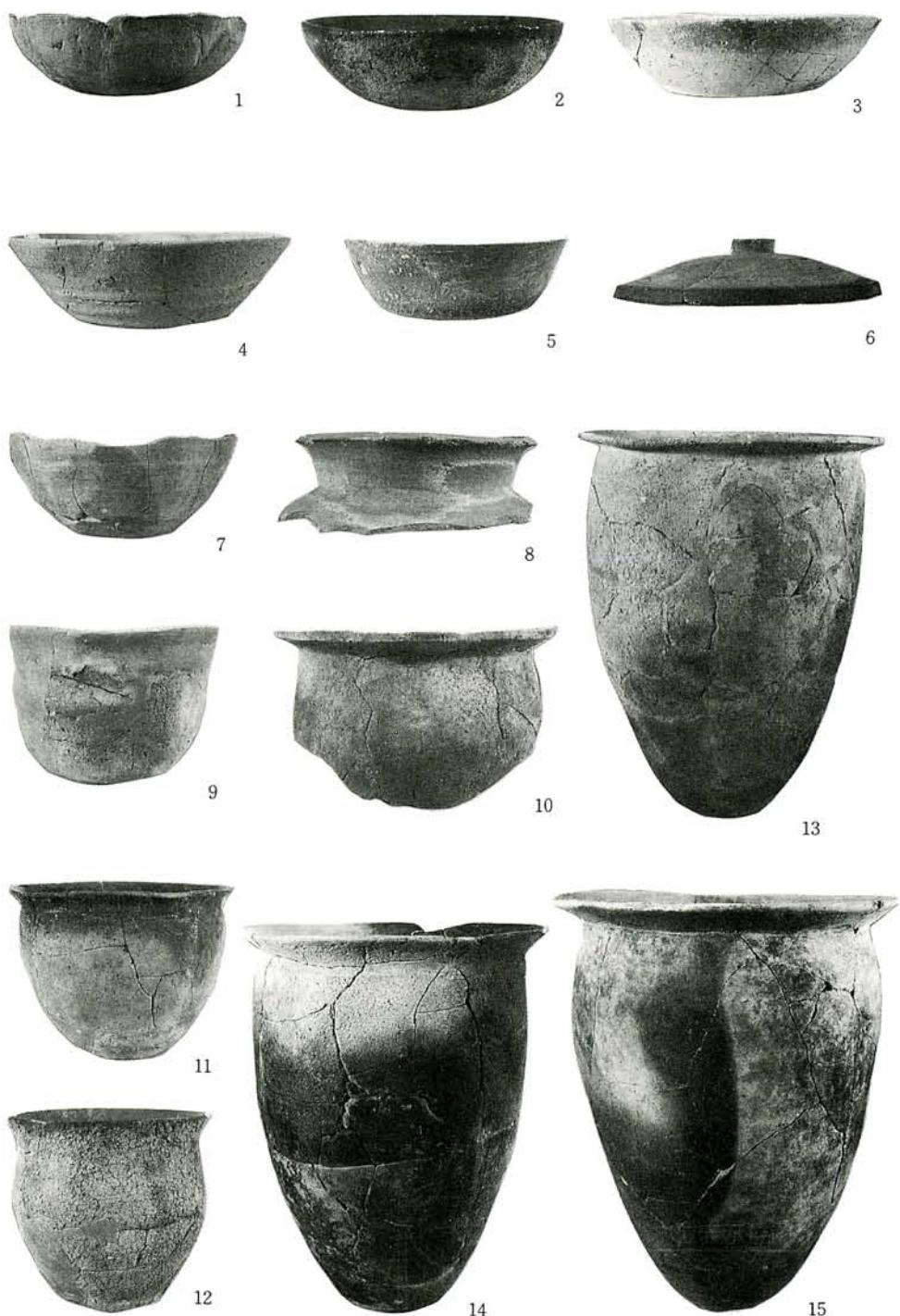
11



6

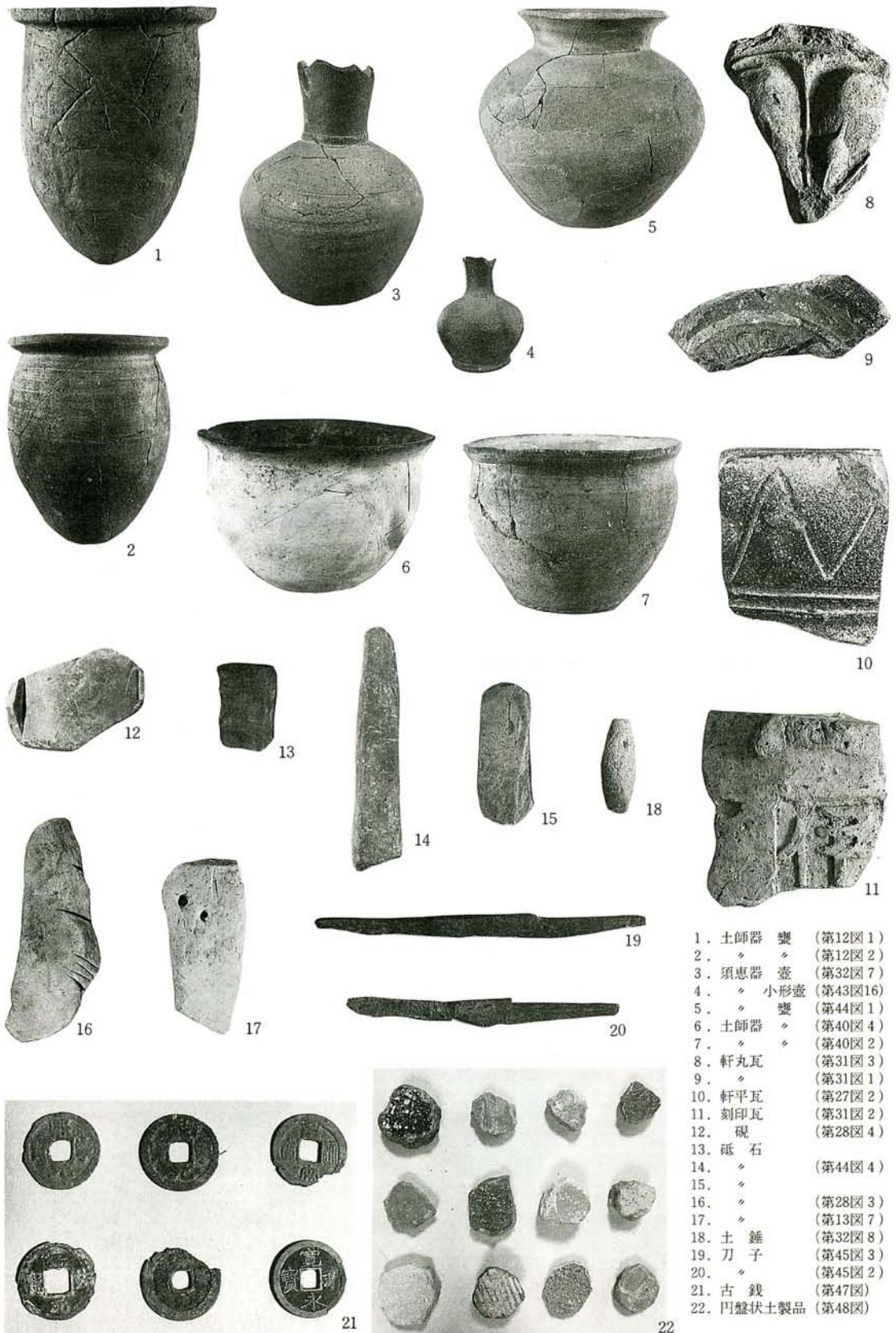
- | | |
|------------------|---------------------|
| 1. 須恵器 杯 (第42図8) | 7. 須 恵 器 杯 (第43図15) |
| 2. タ (第43図5) | 8. タ (第46図3) |
| 3. タ (第43図10) | 9. 赤焼き土器 杯 (第10図4) |
| 4. タ (第43図11) | 10. タ (第27図1) |
| 5. タ (第43図13) | 11. タ (第43図8) |
| 6. タ (第43図14) | |

図版18 出土遺物(3)



- | | | |
|------------------|-------------------|-------------------|
| 1. 土師器 杯 (第26図4) | 6. 須恵器 蓋 (第26図9) | 11. 土師器 蓋 (第25図4) |
| 2. " " (" 5) | 7. 土師器 蓋 (" 3) | 12. " 小形甕 (第26図1) |
| 3. 須恵器 杯 (" 6) | 8. 須恵器 蓋 (" 11) | 13. " 蓋 (第25図3) |
| 4. " " (" 7) | 9. 土師器 小形甕 (" 2) | 14. " " (" 2) |
| 5. " " (" 8) | 10. " 甕 (第25図5) | 15. " " (" 1) |

図版19 出土遺物 SI 05竪穴住居跡(4)



図版20 出土遺物(5)

1. 土師器 瓢 (第12図 1)
2. タ (第12図 2)
3. 須恵器 壺 (第32図 7)
4. タ 小形壺 (第43図16)
5. タ 豆 (第44図 1)
6. 土師器 タ (第40図 4)
7. タ タ (第40図 2)
8. 軒丸瓦 (第31図 3)
9. タ (第31図 1)
10. 軒平瓦 (第27図 2)
11. 刻印瓦 (第31図 2)
12. 砥 (第28図 4)
13. 砥石 (第44図 4)
14. タ (第28図 3)
15. タ (第28図 3)
16. タ (第13図 7)
17. タ (第32図 8)
18. 土錐 (第45図 3)
19. 刀子 (第45図 2)
20. タ (第47図)
21. 古銭 (第48図)
22. 円盤状土製品 (第48図)

多賀城市文化財調査報告書刊行目録

- 第1集 館前遺跡—昭和54年度発掘調査報告書（昭和55年3月）
第2集 山王・高崎遺跡発掘調査概報（昭和56年3月）
第3集 高崎・市川橋遺跡調査報告書—昭和56年度発掘調査報告書（昭和57年3月）
第4集 市川橋遺跡調査報告書—昭和57年発掘調査報告書（昭和58年3月）
第5集 市川橋遺跡調査報告書—昭和58年発掘調査報告書（昭和59年3月）
第6集 志引遺跡発掘調査報告書（昭和59年3月）
第7集 大代横穴古墳群発掘調査報告書（昭和60年3月）
第8集 市川橋遺跡—昭和59年度発掘調査報告書（昭和60年3月）
第9集 山王遺跡—昭和60年度発掘調査報告書Ⅰ（昭和61年3月）
第10集 山王遺跡—昭和60年度発掘調査報告書Ⅱ（昭和61年3月）
第11集 高崎遺跡—都市計画街路高崎大代線外1線建設工事関連発掘調査報告書Ⅰ（昭和61年3月）
第12集 高崎遺跡—都市計画街路高崎大代線外1線建設工事関連発掘調査報告書Ⅱ（昭和62年3月）

多賀城市文化財調査報告書第12集

高 崎 遺 跡

—都市計画街路高崎大代線外1線
建設工事関連発掘調査報告書Ⅱ—

昭和62年3月31日発行

編集 多賀城市教育委員会
発行 多賀城市中央二丁目1番1号
TEL (022) 368-1141

印刷 有限会社 工 陽 社
塩釜市尾島町8番7号
TEL (022) 365-1151(代)
